

覚醒した人びとが磁場の如く集ってくる感興の広場

# スペシャルSM

愛の提言誌

## 愉芽の叢説



### 淑気徇求号

我がオムツ耽溺の半生記  
筒美美佐夫

令子調教中

藤本大作  
裸の貴婦人マダムケイコを罰する日  
丹羽健一郎

御主人様へ—牝犬美代子の手紙—  
滝沢美代子

SMプレイ体験記  
大沢理恵

智子調教旅行記録  
志摩紫光

我が妻との愛虐人生  
松阪和正

縛囚女  
四国佐渡生

実践 縄縛術  
白河 壮

妖縛夢朧絵図  
山口 椿

他収載

大共社発行

15  
スペシャルS&M

愉芽の叢説

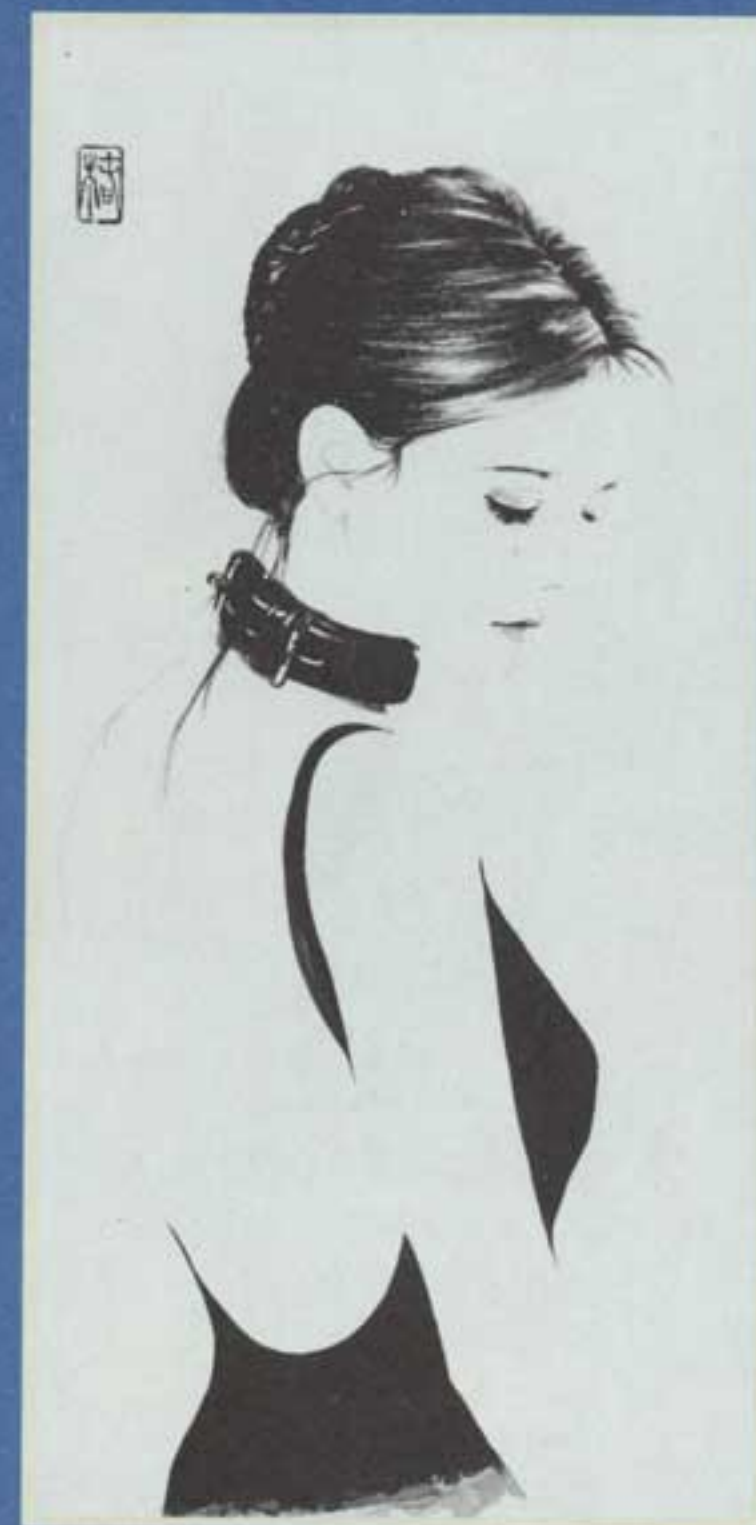
VOL 4  
No 1

大共社

THE SPECIALLY  
S&M

contemporary adult book

TOKYO JAPAN



D1-3/愉芽の叢説/1981・1・15

限定発行 領価1500円

15号

企画編集 山谷秋人



# スペシャリーS&M プレイ実践家・マニアのための 本格SM誌

## スペシャリーS&M

愛の提言誌

A5版による総ページ168頁



12号<D7-3>

初夏豊饒号

13号<D9-4>

破星澎湃号

14号<D11-3>

理玉秋霜号

1年分(6冊)

9,000円

・バックナンバー・

1・3・4号売切れ

2号(S202) 5号(S205)

6号(S206) 7号(S207)

8号(A11-2) 9号(D1-3)

10号(D3-3) 11号(D5-3)

¥1,500

### 申込方法

- 送料は当方で負担します。
- ご送金は現金書留または郵便為替でお願いします。
- ご注文の際は、何号または何号から 明記して下さい。
- ご送本先は、わかりやすい字ではっきりお書き下さい。

## 特別臨時増刊号

A5版によるカラー&白黒 228頁



女体を虐めるプロたちがプレイ実践家に自信をもって贈る二百数十頁に及ぶ壮絶な嗜虐絵巻

### バックナンバー

1・2・3号売切れ

4号<D2-3> 5号<D6-2>

6号<D10-3> ¥1,600

### 通信販売

#### 申込方法

- 商品番号、商品名、価格、数量を明記の上下記宛に申込下さい。
- ご送金は現金書留または郵便為替でお願いします。送料は当方で負担します。
- 尚カタログを希望の方はその旨お知らせ下さい。

株式会社 大共社

通信販売係

東京都新宿区西早稲田

2-16-9

TEL(03)204-2709

## 別冊スペシャリーS&M 夢の愛虐写真集



創刊3号 群虐

D8-4 ¥2,000

那須高原別荘縛虐

馴致調教録

三隸女の馴致縛虐

実態を密着連写!



創刊4号 群虐

上装本

全132頁

D11-3

¥2,000

### 富士山麓縛縛連嗜写録 犯虐S&Mプレイ実録互写録

富士山裾野の廃屋で次々に繰り広げられた嗜虐の宴。熱蠟が白い肌を這い、アナルを黒い嘴管が喰いこみ、節くれた男の手が柔肌を握む、淫虐の4日間。

当社発行物について御意見・御要望をお寄せ下さい。今後の出版物の参考にさせていただきます。

## 戦慄驚嘆の SM調教写録!

# 幻華

先駆するSMリアリズムだ。

本物のM女がのたうちまわる

「幻華」こそ先駆するSMリアリズムだ。



「人妻SM」シリーズ集成

豪華装丁永久保存版

オールカラー160頁

特価5000円

☆当誌は各アダルトショップで購入して下さい。又は、直接大共社通信販売係にお申し込み下さい。代金は、現金書留、もしくは郵便為替でお願いします。(送料は当社で負担致します。尚、当社発行物の全カタログを無料進呈しています。)



クラ、クラ、クラッ  
妖嬈たる官能の眩暈が……  
やがて蜜楽の痺れは  
タナトスへ連脈する……。



# 巻頭カラー 恥虐の剃毛







被



虐





幻



想



# 美顏玩弄













妊婦腹晒し



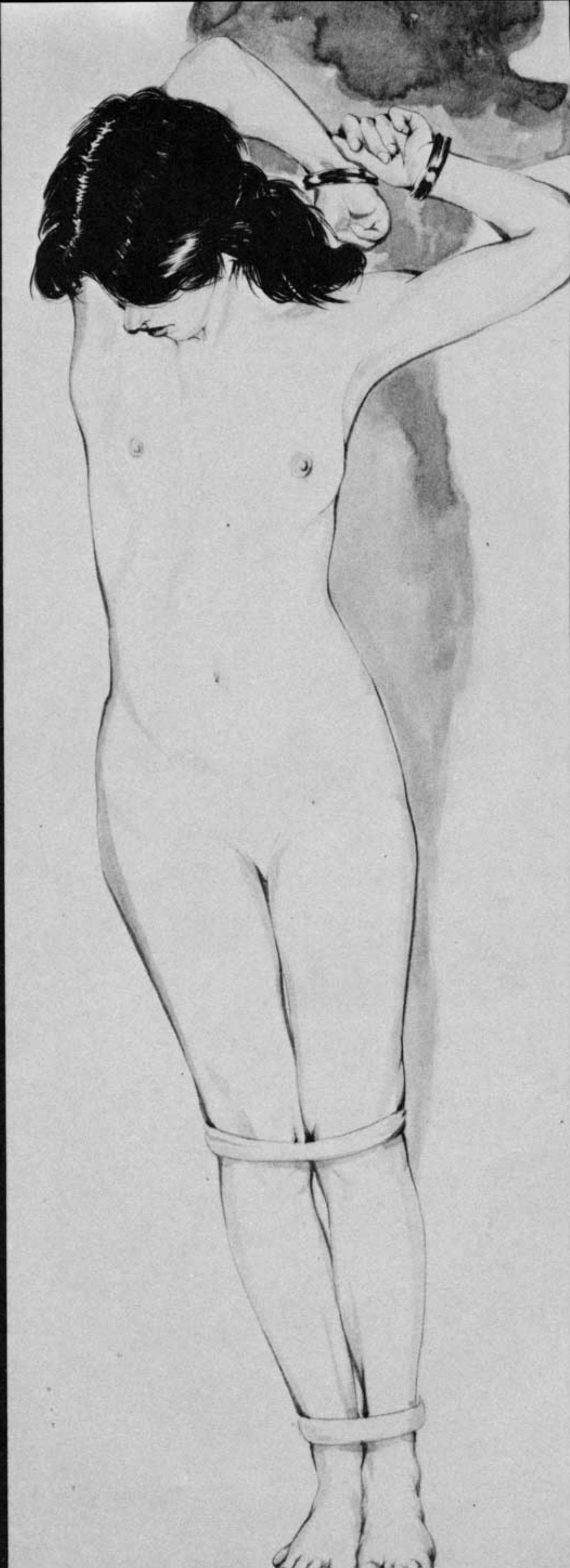


# 吊り責二態





スペシヤリース&M15号



1981年 新春号

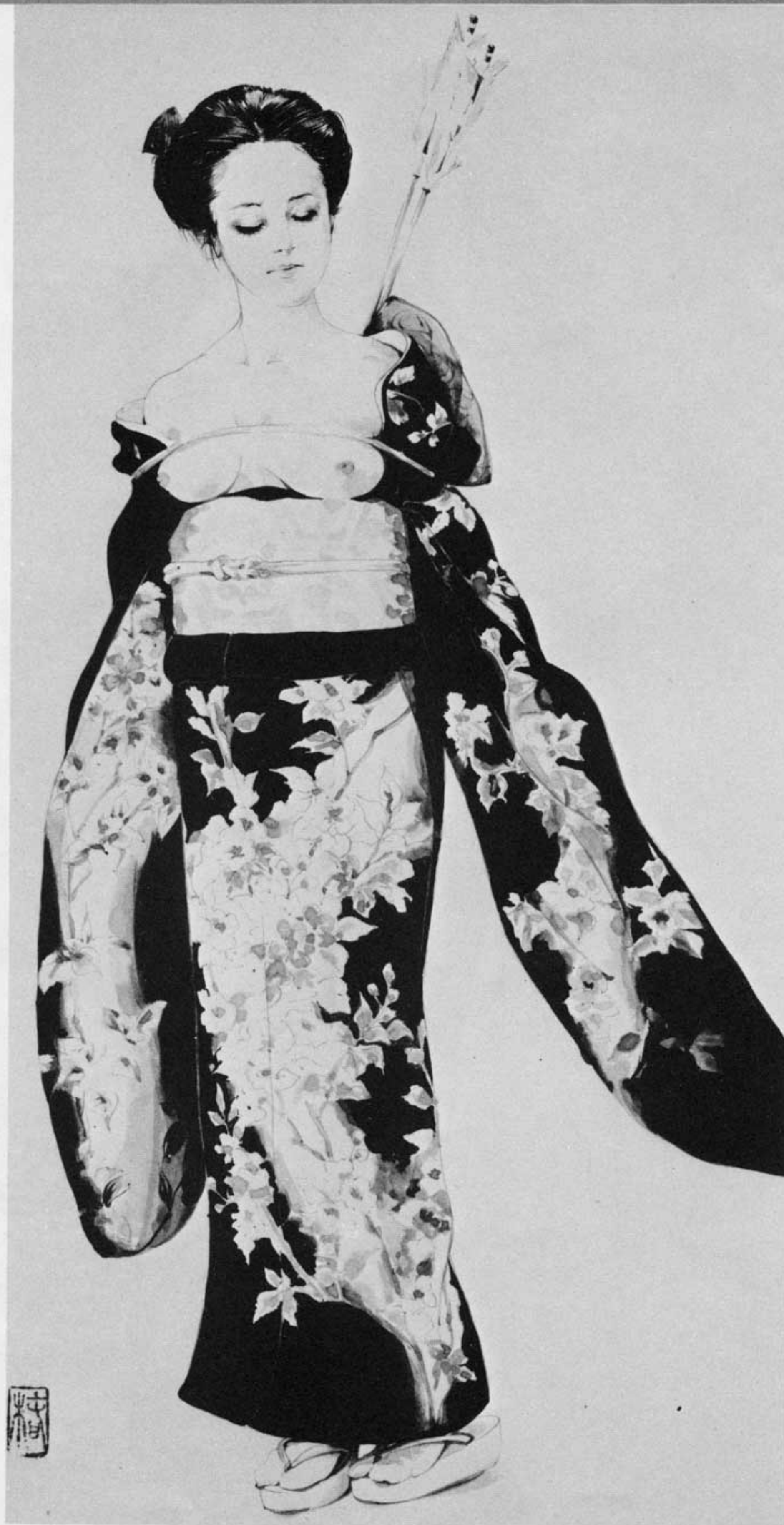


# 妖縛夢朧絵図

絵・山口 椿

















# スペシャリース&M15号目次

## 巻頭カラー頁

吊り責二態／妊婦腹晒し

美顔玩弄／幻想被虐／恥虐の剃毛

## 巻頭イラスト

妖縛夢朧絵図―山口 椿

## 愉芽のフォトギャラリー

若妻嗜炎 「密火」

全裸羞恥のとまどい

轡の魅力／久美子嗜虐／浣腸写真

我が性隷晒し妻―松阪和正

私のオムツプレイメイト―筒美美佐夫

縛囚女―四国・佐渡生



愛の提言・投稿手記目次

|                  |       |     |
|------------------|-------|-----|
| 我がオムツ耽溺の半生記      | 簡美美佐夫 | 16  |
| マダムケイコを罰する日      | 丹羽健一郎 | 28  |
| 令子調教中            | 藤本大作  | 46  |
| 嗜虐行路             | 松阪和正  | 51  |
| 連載小説(三)          | 桃子    | 90  |
| 実践 縄縛術           | 白河 壮  | 105 |
| 続・御主人様へ―美代子からの手紙 |       | 116 |
| 縛りの森の旅人          | 大沢理恵  | 124 |
| 妻隸、多美子を紹介します     | 滝沢文芳  | 136 |
| 夫婦プレイの目覚め        | 田島芳雄  | 139 |
| 浪速に燃えた炎縄娘        | 志摩紫光  | 142 |
| 読者風信             |       | 156 |
| 愉芽サロン            |       | 162 |
| 収声載文             |       | 168 |



# 我がオムツ耽溺の半生記



筒美 美佐夫



私は中学三年になってもまだ週に三回くらいの寝小便が直らず、その為に楽しみにしていた修学旅行にも行けず、当時は随分とつらくみじめな日々を過ごしておりました。その悪癖がやっと直ってからすでに数十年経ち、もう中年の私ですが今だにオシメ、オムツカバーを手放すことができず、執念と言えるほどの強い愛着を持つ、熱狂的なオムツマニアです。仕事を離れた時に、その仕事以上に我を忘れるほど没頭できることがあるという事は、かえって仕事にもハリが出て、幸せを感じております。

中年のオムツマニア諸氏の多くは、あの懐かしい、股部分に黄色のゴム張りのある、厚地の黒綿のメンスバンドに心を奪われ、熱い血がたぎる青春時代にオナニーの良きパートナーとして愛用されたのではないのでしょうか。やがて上級コースへと進み、総ゴム製や柔かいソフトラバー等のオムツカバーを知ることによって、その一枚のオムツカバーのもつ底知れぬ魔力に身も心も奪われてしまう……かように考えておりますが如何でしょうか。ネチネチしたゴムの雨合羽や女性の下着に憑かれた人は、いずれにせよ最終的にオムツカバーに達するようですね。



さて私がこの道に踏み入ったのは、私の生まれ育った環境に負う所が大でしょう。私は四人姉妹に囲まれて育ち、夜尿症時代には母親代わりの長女、次女に大変世話になり、間に合わない時など姉達のはき古したズロース、ブルマーをオムツカバーの代用とした事もあります。

そんなわけで女性の下着や裸には十分慣れていたのですが、それでは飽き足らず、中学、高校生の頃は、女生徒の下着を覗くのが楽しみとなりました。教室内での起立、礼、着席の、その最後の着席の時は、長く嫌だったた学業の中で最も楽しいひとときでした。後から眺めていると必ず女生徒は着席の時、プリーツスカートの両端を持ち、パツとまくって座るわけですが、その一瞬に見えるむっちりしたヒップを包むキャラコや綿の白、黒のズロースに無上の喜びを感じたものです。その他、校庭の隅に佇む女生徒のスカートの奥、黒いストッキング、太腿に食い込む赤い靴下止め、ふつくらとしたブルマー等々、貧欲に垣間見たのを覚えています。夜尿症であった私は男でありながら、ズロースやブルマーをばく恩恵に恵まれていたのに、姉達以外の女生徒の下着にまで執着したのですから、今日





の私の基礎はその頃すでに出来上がっていたと考えるべきでしょう。

高校卒業の頃には他人の庭先、軒下に干してある女性の下着を見ると我慢できずに失敬してしまう程になりました。路地や一本入った横道に並ぶ家の軒下に、遠くの外燈の薄明りに照らされてぼんやり浮かぶ洗濯物。白い肌着や手拭などの間に丸味を帯びた真っ黒の

メンスバンド、そばに近づくとき黒い布地の合間に見える黄色のゴム。チラッと周囲を見回して竿に手をかけ、震える手でその黒いメンスバンドを外す時の感激。そしてまだ生乾きのそのメンスバンドを丸めて内ポケットにしまい、家に帰る途のあのもどかしさと幸せ一杯の気持は忘れられません。帰ってから布団の中でそれを広げ頬ずりし、メンスのしみ込

んだゴムの匂いを嗅ぎながらよくオナニーをしたものです。

そんな日々が長く続いたある日に、今日のオムツカバーの熱狂的なマニアになるための、決定的な出会いがありました。当時勤めていた東京神田の広告会社の帰り、古本屋をぶらつき、店頭に並ぶ本の中から「奇ク」を目にしたのです。パラパラッとめくったページの中に描かれていたイラストが言いようのない衝撃を私に与えました。それはスカートのまくり上がった女学生のイラストで、黒のストッキングそして靴下止めの上に肌がのぞき、その腰の部分には両端に黒い丸ボタンのついた格子縞模様のオムツカバーをはめ、さらによく見るとその裾から浴衣地のオシメがはみ出ていました。この一瞬に私は夜尿症時代を思い出し、急激にオシメを当てたい、あのオムツカバーをはめた時の緊縛感のようなものを今一度味わいたい、という衝動にかられたのです。「奇ク」を小脇に当時住んでいた目黒で降りると、権之助坂中途にある洋品店に入り、女店員に、

「あのう、オムツカバーありますか」

と尋ねました。

「はい、こちらです」



女店員は私をケースの前へ案内し、可愛らしい赤ちゃんのオムツカバーを指差しました。「そのう、もっと大きいのはないでしょうか」「何ヶ月位の赤ちゃんですか」「いや、赤ちゃんじゃなく、そのオ……」「ああ、大人の方ですね。御病気なんですか、その方？」

こちらの意図には気づかず尋ねてくる店員に、私は内心ホッととしてこう答えました。

「ええ、ずっと寝込んでいるものですから……」「それは大変ですね。ちよっとお待ち下さい」と女店員は言いつて奥の方に行き、レジの所にいる中年の女性に、

「奥さん、大人用のオムツカバーまだありましたか？」

と聞いていました。結局戻ってきて、

「すいません、お客さん。売れてしまっていないんですが。急いで取り寄せましようか？」

と言われたので、二枚頼みました。三日後に品物が入るとの由、当日は残業を断わり目黒のその洋品店へ駆けつけました。その日私は中学以来何年ぶりに、薄いピンクと赤い線の格子柄の大きなオムツカバーを二枚手に致しました。裏は白っぽいラテックスで黄色いゴムとは違い、さらっとした厚地のゴムで

した。女店員が、

「お客さん、オムツはよろしいんですか？」

と言うので、白いサラシの反売り（当時は今のように十枚一組の動物絵柄のオムツはありませんでした）を求め、姉達の目を盗んでオムツ作りに精を出しました。

オムツカバーとオムツを手にした満足感、

それにオムツをはめてその感触を楽しむことの素晴らしさ。しかし姉達が居るので実際に洩

らすのは不可能でした。その頃次女、三女は嫁ぎ、父母代わりとなった長姉と四女が一緒に住んでいました。私のオムツに対する欲望は強く深く、意を決して姉達の目を気にせず自由にオムツやオムツカバーのできる、アパート暮らしを申し出て待望の独立を果たしました。

それからというものは女性の下着類、シュミーズ、ズロース、メンスバンド、ブラジァ







ー、ガードル等一通り揃えました。もちろんオムツは浴衣地から作り、オムツカバーの枚数も増やし、毎夜それらを身につけては楽しんでおりました。小さい音を立てながらジュースと柔らかいふつくらとした布オムツが濡れてゆくあの一瞬に、母の優しい胸に抱かれ

た時に感じたであろうミルクの匂い、女性の柔らかいふくよかな乳房と肌の甘酸っぱい匂いを感じとります。お洩らしの快感に包まれた、私にとっては快適の日々でした。

やがて数年経ち私にも結婚話が持ちこまれ

ました。普通であれば好きな異性が現われ、その人と一緒になるということは素晴らしいことなのですが、オムツとオムツカバーへの断ち切り難い深い愛着を考えると複雑な気持ちでした。相手に打ち明けることも出来ず、やめるわけにもゆかず、その心情はオムツマニアしか理解できないでしょう。結局、結婚後もオムツをつけたりするのとは不可能と断念し、下着類、オムツとオムツカバー、「奇ク」等をハサミで切り、いくつかの箱に入れて夜遅く目黒川に投げ込み、別れを告げました。本誌十月号睦月氏の文中にもありましたが、外出時、庭先や軒下に干してあるオムツ、オムツカバーを見るにつけ、たまらない気持ちになりました。

結婚相手は三女の友達で、姉達に甘えて育った私の相手としてふさわしい、と姉達も積極的であったため、ゴールイン致しました。

交際中、彼女は笑いながら、

「お姉さんから聞いたわよ。随分大きくなるまでオネショしたんですってね」

と言ったことがあります。考えてみればアパートでのオムツ生活、布団のシミや室内にこもった小水特有の匂いなど、休日の度に見回りに来た姉には察しがついたのでしょうか。





笑い話とはいえ、万が一という思いで姉は私の妻に伝えたのだと思います。とにかく私は妻より年下であることを幸いにそれを利用し、動作、仕草で適当に母性本能に訴え、オムツの生活を公然化するための下準備に必死の努力をしました。

五泊六日の新婚旅行から二DKのアパートに帰ったその夜、何が何でも布団の中で洩ら

すことを決意し、それを実際にやってのけました。今でこそ簡単に書いておりますが、その時の私にとっては目も眩むような大変なことでした。布団に入った私はスタンドの小さい灯りが洩れている室内で、自分がこれからとる行動に興奮して眠れず、胸は高鳴り、手のひらは汗でビッシヨリでした。すぐ横にいる妻の様子を見ること約二時間。今だにこの

二時間ほど緊張したことはありません。一瞬迷いが生じましたが、この夜を逃したらもうチャンスはなくなると自分に言い聞かせているうちに、全身がカーッと火照り出し、思考力はゼロになりました。妻の方に寝返りを打ち、しばらく気配をうかがってから、心の中で「エイノ」と叫び、ジュウツと放尿致しました。新しいタオル地のパジャマ、新婚生活用の真新しくてフカフカの敷布団が暖かいほどばしりを受けて、みるみるうちに濡れていきました。

最後の放出をブルツと身を震わせて終えて、しばらくじっとしながら、アアついにやったと胸の中で呟くと、瞬間に幼ない頃の想い出が蘇ってきました。

ウツと傍で小さな声がして妻の手が私の下半身に伸び、「来たノ」と思った時には私のモノに触れています。

「大変。どうしたの……？ うわあ、こんなに濡れてる、どうしよお……」

言葉の終りの方はもう悲鳴に近く、私も必死で寝呆けたふりをして体を固くしていました。

「なに……どうしたの？ あれ、冷たい！ どうしちやっただろう」



とにかく驚いたふりをするのが精一杯でした。

「私じゃないのよ、ほら見て」

妻の驚嘆ぶりは筆舌に尽しがたく、懸命に自らの下半身を指差しています。仰向きの姿勢の妻に対して横から放尿したわけですから、薄いピンクのネグリジェはビショビショに濡れて、太腿にびったりと貼り付いています。今だにこの一件に関しては私の最大の不覚として、妻に弱味を握られています、十分にその見返りはあったのです。

その夜以来勇気づいた私は、会社の残業が続いた夜に意識して、

「疲れた、ああ疲れた」

と口に出し、お洩らしを試み続けました。そして遂に妻の口から次の言葉を言わしめるのに成功したのです。

「お姉さんから遅くまでしていたとは聞いてたけど……。第一お布団が干せないしねエ。」

いっそのことオムツでもしてみたら……」

以来ずっと今日まで、独身時代と同じくオムツのお世話になっております。妻の方も呆れながらも諦めたのか、浮気することを思えばまだいいと言う次第です。

「いつ頃までオネショしてたの？ お布団が

濡れて大変だったでしょう。ねえ教えて、いつまでオシメしてたの？ 正直に言いなさい。もう隠しても遅いんだから」

等々、執拗な質問責めには閉口しましたが、

徐々に妻も私に馴らされてきました。「奇ク」の読者欄を賑わすオムツマニア諸兄姉の投稿記事を見せたり、生ゴムのオムツカバー着用、二人オムツプレイ等の写真も見せました。ま





た、大塚啓子、深田菊子、それに今となつては透逸と思える梨花悠紀子など諸嬢の写真を取り寄せて見せたりもしました。

「病氣でもない成人した女性に、オムツやオムツカバーをはめさせたい、また自分でもはめたい、という僕みたいな男女が世の中には大勢いてね。だからこそ投稿するだけじゃなく、こうやって写真販売も成り立っているわけさ。セックスの体位がいろいろあるのと同じで世の中いろんな趣味の人がいるんだね」

と説明したりもしました。私たち夫婦は以前より一軒家に住み、誰にも覗かれる心配のない陽の入る一室で、オムツ、オムツカバーを干すことが出来ます。最近では自動洗濯機、乾燥機など便利な電化製品が出て、重宝しております。幸か不幸か子供のいないこともあって、オムツとオムツカバーが公然と日常生活に溶けこんで、私は誠に幸せな日々を送っていると申せましょう。

さて次にとりかかったのは、妻に対するオムツ着用の要求です。しかしながら結果は天を仰ぐものになりました。オムツを当て、オムツカバーをはめたら、そのフカフカの布オムツに暖かいオシッコを洩らしてこそ価値があるのに、妻はこれを嫌がりました。なにし

る海水浴中に催しても、わざわざレストハウスのトイレに行くくらいですから、オムツを当てたままトイレに行っても、オムツの中に排尿することが出来ないのです。根気よくやらせたのですが結局無理でした。自分の尺度で物を計ってはいけないということでしょう。考えてみれば、普通の人間が寝ながらオムツに排尿するということは、簡単なようで難しいことなのかもしれません。

車で近くに食事に行ったりするとき、身体線の線を隠すためのアンブレラかブリーツスカートをはいている妻を後から眺めながら、まさかスカートの下にオムツとオムツカバーをはめているとは誰も想像しないだろう、と心の中でニヤニヤしながら満足したりしていました。

ところが人間の欲望は限りがなく、オムツに関する我が身の安泰を掌中に収めると、妻に対して要求したことを他の女性に求めるようになりしました。何とかならないだろうかチャンスを探し、それなりに努力をしたかいがあつて、まず一人の女性とのオムツプレイに成功しました。口説きのコツを覚えると相續いて二人の女性と、オムツとオムツカバーを伴なうプレイを果たすことが出来たのです。

今回文中欄に掲載して頂いた写真は、妻以外とオムツプレイをした最初の女性、幸代三十才と、二番目の女性、久子がモデルです。

バックスタイルを見た限り、二人とも年令を感じさせない体型ですので、夏、冬服のセーラー服、もしくはベビードールを着せ、屋内と野外で撮影致しました。写真だけ見るとどちらもロングヘアのかつら、それに使用したオムツ、オムツカバーも用じものですから、同一人物に見えてしまい残念ですが、顔は写せないで致し方ありません。写真以外にもオムツプレイのVTR録画、カセットテープ録音、それにオナニーションなども収録してあり、コレクションは豊富です。オムツマニア諸氏にこれらのものが御役にたてれば幸いです。

ところで昨年三月第二週の日曜日、午後九時より東京十二チャンネルで放映された「ザ・ベビー」という映画を御存知の方おられますでしょうか。魅力的な母親と二人の姉に赤ちゃんとて可愛がられる、二十才位の青年の話です。つまり体は大人でも知能は赤ちゃんのままで発育が止まってしまふ設定で、その青年は歩くことも出来ず、ハイハイをするだ



## 読者原稿募集

### ★体験・告白手記

実践家のみならず、本誌内容にふさわしい体験・経験をなさった方、読者の皆様の偽りなき真実の告白手記をお寄せ下さい。文の稚拙等は問いません。

### ★映画・演劇・雑誌感想

映画・演劇を鑑賞し、雑誌を読み、特に興味を持ち、関心を引いた場面等についての感想をお寄せ下さい。但し、何を見、何を読んだのか、出处については必ず明記願います。

### ★アイデア・提言

本誌に将来企画して欲しい事項について、内容を具体的に記したものをお寄せください。また、独自のアイデアをお持ちの方もそのアイデアを具体的に書いてお寄せ下さい。

### ★カット・イラスト

本誌にふさわしい図柄であれば、内容の如何を問いません。荒唐無稽、奇抜なイメージ画でも歓迎します。

### ★写真

自作の写真をお寄せ下さい。写真の映り、ピントの甘いものでも結構です。カラー、白黒、リバーサルを問いません。但し、盗作、複写等の自作の写真はお断わり致します。未現像フィルムのままでも結構です。弊社にて実費で現像し、御返送します。但し、その写真に関する簡単な説明を必ず附記して下さい。

### ★読者風信

皆様の為の気軽なサロンとして御利用下さい。本誌掲載内容についての御意見、御要望等でも結構です。読者風信を通じての読者交流のお手伝いも致します。

★読者風信への投稿を除く皆さまから寄せられた原稿に関しては、弊社特写の写真を洩れなく贈呈致します。但し、寄せられた原稿内容に応じての増減はあります。

※写真贈呈が不必要な方は、その旨をお書き添え下さい。

け。泣き声も本物の赤ちゃんの声を吹き替えているにあり、とても貴重なフィルムでした。美しい姉にお洩らしで濡れたオムツとオムツカバーを外してもらい、新しいのに取り換えてもらってハイハイするシーン。大きなベビーベッドに寝かされて哺乳壺のミルクを飲ませてもらうシーン。パートの女性が胸をはだけ、大きなオッパイを青年の口にふくませながら、オムツ姿の青年の頭をいい子、いい子にするシーン。また二人の姉はボーイフレンドにも赤ちゃんになれと要求し、「そうじゃないと私は燃えないの」というセリフなど、私のようなオムツマニアは泣いて喜ぶ映画でした。もちろん録画しておいたのですが、うっかりツメを折るのを忘れ、不注意で他のものを再録してしまいました。そのうち忘れた頃に他局で放映するかも知れません。

最後に本誌十号の浦上氏の書かれていることに関して、少し述べてみたいと思います。氏はお洩らしの体験で悪戦苦闘されたようですが、実験されたようなバスタオルの使用ではかさばるだけで、オムツカバーのホックもできず、洩らすのも難しいと思います。エン





ゼル社製のヘルスオムツは下がナイロン、上はガーゼ状でくるんであり、肌ざわりは布オムツを当てた感じと全く同じです。幅、長さともに大人用のものですから、特注品の大人用オムツよりも、市販の赤ちゃん用で十分です。

交互にオムツを重ねてヘルスオムツよりや

や短かめにセットし、ヘルスオムツのガーゼ部分を表にして中に入れます。入れ方はオムツの先を入れて反対より引けば簡単です。オムツの枚数は、動物柄の赤ちゃん用オムツ六枚、さらに二枚のオムツを一枚ずつ四分の一に折り、股間にはめたときかさばらないように交互に重ねます。つまり部分的にはオムツ

を十四枚当てたことになりますが、絶対にモコモコにはなりません。腰回りのオムツはなくても良いのですが、何となくあった方がびったりしていいので、前に当てるオムツの二倍の長さでくるみ（このオムツは浴衣地で作ります）、オムツカバーをはめます。もちろんオムツカバーは一枚で十分です。オムツカバーはむしろエンゼル社製より、フタバ、クリーン、他に主婦の友社で通信販売しているブルーの横巻きのオムツカバーなどが実用に適しているようです。

夜尿の回数ですが、睡眠の前に多量の水分を取っても大体夜中二回、明け方一回、多くても通算四回でしょう。その場合、少しずつ洩らすのではなく、トイレで放尿するのと同じ要領で行なうのですが、男性器はオムツを当てる際に下向き、つまり股間にはさむようにしておきます。そうすれば女性の放尿時と同じで、洩らしたオシッコは上の方へ来ず、股下から後へと流れます。

尿の量は三、四回したとして洩瓶の目盛りで計ると、八百五十CCから一リットル未満のはずです。私のやり方だと、腰に巻いた布オムツはもちろん、オムツカバーの内側にも漏れず、夜無意識に寝返りを打っても、朝起



きてから立って歩いても平気です。しかも股間にはめたオムツがふくらんで、寝た時に腰回りがタオルのようにモコモコすることもありません。立ち上がった時など多量のオシッコで、オムツカバーの中のオムツがずっしり下がって重く感じますが、夏のオムツカブレもなく、冬は布オムツだけの時のように洩らした後冷たくなるということもありません。ヘルスオムツは洩らした後も肌のぬくもり同様の暖かさと快適さを保ってくれます。ただしこれはオシッコの場合だけで、私には浣腸などの趣味はありませんので、排便に関する結果は分かりません。

別にヘルスオムツの宣伝をするつもりはないのですが、多量のオシッコで吸収能力の限界を越えた状態であっても、外ににじみ出ることがないのは、私には大変便利です。このヘルスオムツは大手スーパー、デパート等で説明販売しています。常設ではないので、直接本社に電話をして、居住地に最も近い場所での販売期間を聞き、数枚買っております。自動洗濯機に放り込んでも、二年くらいは十分使えます。

なお本誌十号で睦月氏が言われるように、本格的な純ゴム製のオムツカバーは最近なか

なか手に入らないのですが、上野で先日やつと、商標名「ダンロップ」の総ゴムのオムツカバーを手に入れました。昔のニシキのゴム張りのオムツカバーと比べるとゴムも薄く、寂しい限りですが、まあ総ゴム製ということでは我慢せざるを得ません。他に渋谷、池袋でもピンクなど色付き総ゴム製のものを見かけましたが、ひと昔前のオムツカバーのイメージが忘れられないので、買う気になりませんでした。

また現在、日中使用できるものとして産褥

バンドを使用しております。前開き式の月経帯と同じでゴム張り部分がヒップの半分近くまでゆるやかな円を描いて付いており、使用感も上々です。一枚のオムツを四分の一折りにして股間にはめ使用しておりますが、少しずつの尿量でしたら結構もちます。この場合ズロース、ガードルをはいた方が具合が良いのですが、したがって今のような冬の季節に適しているわけです。女性の生理用品よろしく四分の一に折ったオムツとビニール袋を、常に車の中に用意していますが、前開きです





のでトイレでも簡単に交換できます。

このメンスバンドは綿の縦縞織りでしっ  
りしており、色もピンク、ブルー、白の三色  
がありますが、残念ながら二年ほど前より、  
股の部分がナイロンに変わってしまいました。  
最近では女性がタイトなスラックスやスカート  
を着用するので、どうしてもメンスバンドや  
ズロース、ブルマーなどの布地も薄くびつた  
りしたものになり、昔のブカブカの下着が懐  
しくてたまりません。どうもとかく懐古趣味  
になりがちで、自分も年をとったなあという  
実感が致します。

つまらぬことを長々と書き述べてまいりま  
したが、同好諸氏のお役にいくらかでも立ち  
ましたら幸いに思います。また、同好の方で  
私の拙文にご意見がございましたら、ぜひ聞  
かせて頂きたいので、誌面を借りてお願いす  
る次第です。

☆

☆

☆

☆



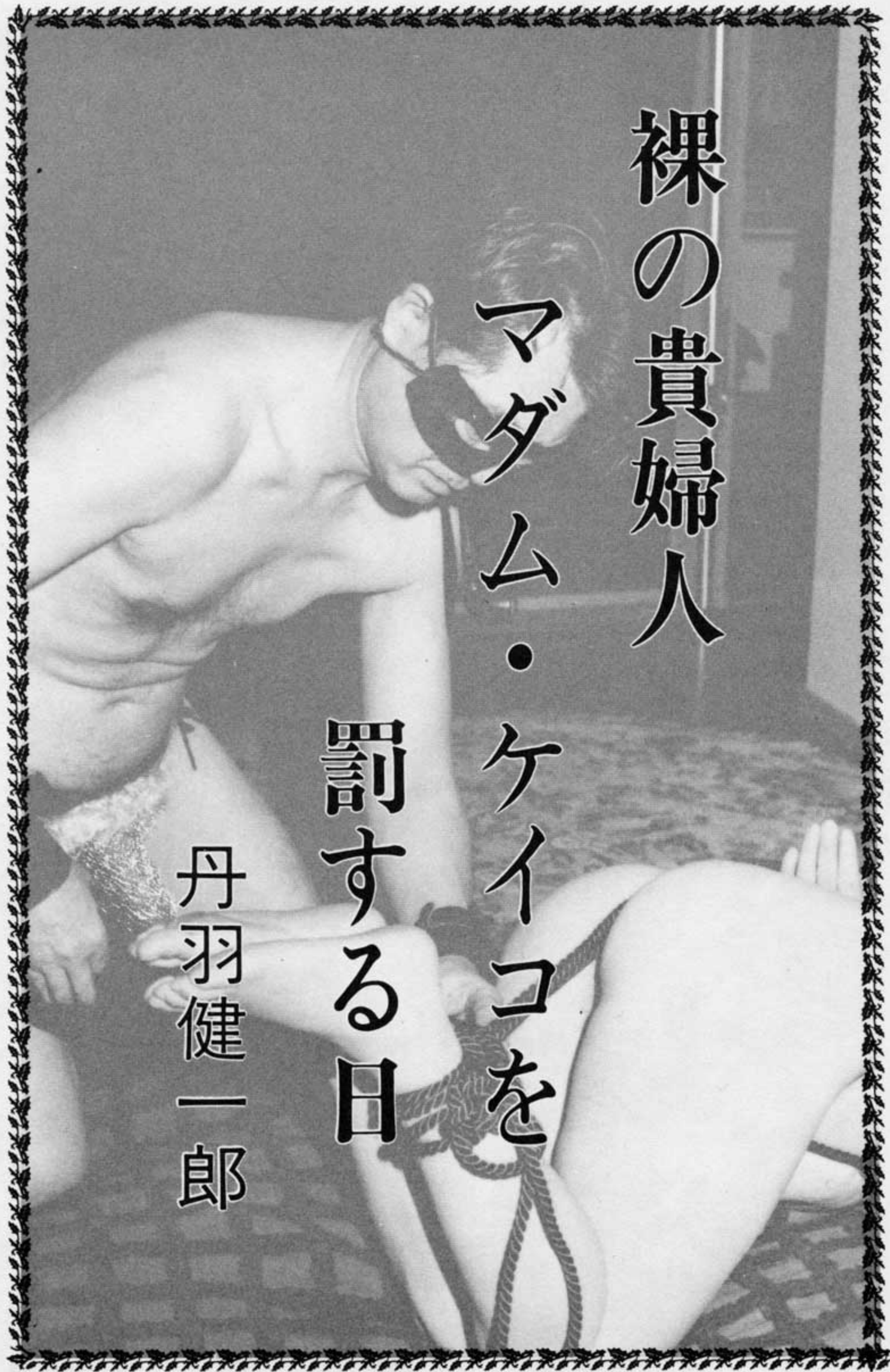


# 裸の貴婦人

マダム・ケイコを

罰する日

丹羽健一郎





## 誘拐

助手席の彼女がわずかに身悶えした。私の左手がハンドルを離れて、彼女の太腿に触れ、スカートの下に這っているからだ。車の外からはわからない筈だが、彼女は後手錠をかけられた上からシートベルトを締めており、サングラスの下は眼は絆創膏を貼られて盲同然なのである。

実は今日はもう一人奴隷役の女性をみつけてきて、プレーをスリー・サムでやってみた。と思い、そのことを先日彼女に話してあった。そのとき彼女は身を乗り出し好奇の眼を光らせていたから、妖しく心ときめかせて今日を待っていたようで、車に乗ってしばらくして私が、

「女奴隷さんの都合がつかなくて、今日は君と僕だけだ」

と告げたときは、

「あらっ、駄目になったの!? そのつもりでいたのに……」

といかにも怨めしげだった。私はすぐさまいってやった。

「だから、今日は君が奴隷だ」

彼女は一寸白い眼で私を睨み、口をとがらせて前方を見詰めたまま黙ってしまった。私

はその眼を塞ぎ、序でに手を縛ったのである。ハンドルと内股の間を往復している私の手先の動きに、彼女は抵抗せず時折、

「う……」

と小さな声を洩らすだけだった。彼女のやや強目の香水の匂いがその度に私の鼻先に漂ってくる。ポーリーヌ・レアージュの「O嬢の物語」の書出しの場面——パリ郊外の森にあるロワッシーの城館に向う二人の男女の姿を、私は思い出してスリリングな気分になっていた。あの神のようなマゾヒスト・O嬢を、この女は知っているだろうか?

「着いたよ」

私は車を止め、彼女をそのままにしておいて、トランクからゴルフバッグとボストンバッグをとり出した。これからゴルフへ行くわけではない。今日のための小道具類を納めてあるのだ。助手席から彼女を下ろし、後手錠の体にカーディガンをかけて人目に立たぬようにしてやる。その腕をとって、われわれの「ロワッシーの館」へとゆっくり歩いていく。一戸建の瀟洒な洋館のドアを押す。

「ここだ。入りなさい」

彼女、マダム・ケイコを今日はこっぴどく

苛めてやるつもりだ。四年間のブランクを除いて二年足らずのつきあいだが、海外から戻って二度目の今日のデートに、彼女は昔ながらの優雅な風情で立ち現われた。もう三十を三つ四つ越えた年令だが、よく整った顔立ちの知性的なマスクの女である。未亡人で子がないからか、肌は艶を失っていない。小柄な体の上品な身振りが、セックスの中ではしたたかな女の性を露わにして、わめき声をあげ、せき立てるような激しい動きに一変する女だ。

文学好きの話題の豊富さ、とりわけオスカ・ワイルドの作品やサディスティックな文学が好きだというあたりが私の気を引くのだが、彼女の性格には実は少々ひっかかることがある。才女であり美女であるけれども、N女子大の優等生だったという過去の履歴が、彼女の心を素っ裸にさせないようなのだ。いづれどこかに飾りがある。厚化粧がいい例であり、一流品好みの贅沢さも私には気に入らない。結構男友達もいてかなり翔んでいる女だから、私が他の女性と交際しているのを知ってもさして気にとめない風だが、一緒に寝る男にも仮面を冠った気どりをみせるのが素直でない。もう娘の若さがいいことはわかっているし、体の隅々まで知り尽くされて女の



秘部の恰好から絶頂のときの乱れ方まで、すっかり曝け出してしまった相手の男に対して、気位を高くしてみたところで何の役にも立つまい。だから、私は彼女のヴェールを引っぱがし、高い鼻をペチャンコにしてやろうとかねがね考えていた。女は男と会ったら素直にならなけりや、可愛い女でなけりやあいけな——というのが、私の彼女に対する意見なのである。

ケイコはリビング・ルームの中ほどに、顔を心もち上げて停んでいる。ドレッシーなワンピースに上等な真珠のネックレスをつけ、濃いルージュの口紅とマニキュアが挑発的なこの女は、今何を考えているのかな。こちらには彼女の虚飾の部分をすっかり取り除くための責めの段取りができ上がっているんだよ。すべての戸と窓に錠をかけ、カーテンを下ろしたこの館の中でこれから始まる肉地獄の狂宴を想像して、私はサデイスチックな微笑みを浮べた。

目隠しと後手錠をはずしてやると、彼女はほっとした顔をみせて室内をキョロキョロと見廻したが、すぐに、

「ひどいわ、目に絆創膏を貼りつけるなんて

……」

といい、ひき剥がしたあとの目の周辺の赤くなつた部分を指でさすりながら鏡に見入り、アイシャドウとマスカラを念入りに直し始める。

「今更、化粧はいらない。バスルームへ行つて顔を洗つて落してきなさい。プレーの間も化粧したければ、あとで俺様好みに仕上げてやるさ」

私は彼女を追い立て、自分も着ているものを脱ぎ、革サポーター一つのプレースタイルになり、買い込んだ飲み物の中からシャペンを出して冷蔵庫に入れ、小道具をプレーに備えて配列し、そしてソファに腰をおろし、パイプたばこに火をつける：：身についてたきまりの手順だが、こうしてキリツと股間を緊めた革褌姿の裸になるといつも新鮮な気分にあふれるから妙である。

私はバッグから「ペントハウス」誌ヨーロッパ版をとり出してぺらぺらと頁を繰った。欧米女性の壮麗な牝猫（プッシー）の無修正カラー写真をケイコ未亡人に見せてコメントさせる魂胆である。アメリカのプレーボーイ誌と同類の男性専科のこの雑誌を私が好んで読むのは、月並みな欧米女性の全裸開股ポ

ズの写真のせいなどではなく、その読者通信欄にSMに関する実態の紹介やユニークな主張がよく掲載されて、勉強になるからなのである。この号ではS女性との結婚を夢見て果せない六十才の英国紳士が、以前この欄に載つたザビエラ嬢なるS女性の「M紳士に告ぐ」という意見開陳に猛然と反論している投書が掲げられていた。SM誌でもない雑誌で読者同志のSM討議の様子を読むにつけても、今日の欧米社会でSMが開かれた性風俗のひとつとなつていくことがよくわかつて、楽しい。「何を読んでらっしゃるの？」

いつの間にか後にケイコが立っていて、湯上がりの香りが漂ってきた。見ると驚いた。裸の下半身に黒のガードルと網タイツをつけた上へ、黒革のブーツを履いてポーズしてみせている。

「どう？ こんな恰好で男の人たちを誘惑してみたいな。パンプ風貴婦人ってところね」「それで鞭をもつたら、まるでサデイスチンのスタイルじゃないか！ 化粧も落してないな。サデイスチンのつもりなら、眉をはね上げて目に墨で隈取りしたらどうだ。ハンブルグの女みたいにさ！」

彼女は聞き流して鏡の前に行き、自分の姿



に見とれている。ナルシズムが強いのである。

「口紅は落したんだからいいでしょ。私、てつきり女奴隷がくるものとばかり思っていたんですもの……。これ女主人役のコスチュームのつもりでもってきたのよ」

洋風が似合う彼女のサディスチン・スタイルは確かにさまになるのだ。だが冗談じゃない、今日は私が主人なのである。

「主人は僕一人がいい。その恰好が気に入っ

たのなら、しばらくは許してやる。ただブーツは脱げ。女隷役には邪魔だから」

そこで私は、すばやく彼女に革手錠を前手につけ、足枷をはめ、首輪をつけ、それに鎖を繋ぐ。

「開宴の仕度だ。冷蔵庫からシャンペンを出しておいで。グラスとオードブルも忘れずに」

### 開宴の歌

鎖の音をジャラジャラと立てながらケイコ

が食卓の準備をおえた。二人はテーブルの角に斜めに並んで腰かけた。彼女の首輪の鎖は私の手首に捲きつけてある。

「さあ、観客のいない舞台の幕をあけよう」

私はシャンペンのコルク栓をナフキンで押えて抜く。ポン！と軽快な音が響いた。

「チアー（乾盃）！」

とグラスを上げると、

「ア・ボトル・サンテ（あなたの健康のために）！」





と彼女はフランス語で応じた。そこでこれからあとは、英仏ちゃんぽんの会話となる。

「イタリア語で乾盃を何といったわけ？」

「え？ チン……おお、ノー」

と彼女は気付いて睨んだ。チンチンというのである。

「久しぶりね、シャンペン。おいしいわ」

「おいしい（デリシヤス）、という言い方は、

あちらの女性はセックスのときにも使う」

「セックスって味わうものであるわけ？」

「そのとおり。勿論オーラルならコックもカントもそれ自体に良い味があるわけさ」

「もう少し会話をエレガントに運びませんか？」

「どこがエレガントでないというのかな。そうだ。こういう写真を見てみたいと前にいつていたね。どう？ ご感想は」

ペントハウス誌のカラー写真をめくる彼女の顔を私は観察している。

「ああ、これ……」

と一度目を見開いたあと、彼女はそれぞれをじっと見詰めている。たじろいだ風情がない。初めてみるわけでもないとみえる。

「十人十色で、同じ形ってのはないもんだ」

「どれがあなたにはおいしそうなのよ」

「これは君、いずれも名器だろうね。僕にはレアのビフテキに見えてくる」

「まあ、そんな言い方をするものなの？ いや、男の人のものは何なのよ」

「僕はホモじゃないからね。お愉しみになる女性側に聞きたいものだ。ソーセージなんて言い方は、少なくとも事実をいい当てていないことは、君が知ってるだろうな」

シャンペンのグラスを重ねて、お互いいい気分になってきている。

「この雑誌のSM討論（ディベート）という読者の意見欄でさ、あるイギリスのS女性が、この世の中のS女性とM男性の数は同数であるといったとかで、M老人が、それならS女を結婚相手に得られないワシのようなM男がいるわけではないじゃないかと噛みついてるんだ。マダムはどう思いか？」

「さあね。私、マゾの男って随分多いと思うのよ。程度の差はあるにしても。女の方のサドって実際はぐんと少ないでしょ」

「フム。で、君は自分をマゾだと思う？」

「私って、自分の性格分析なんてつきつめてしたことはないもの……」

「逃げているな。自分を見つめるのは怖い？」

私は突っ込んでみる。

「あら、うん……さあね……」

「返事できないか。ま、自己分析がし易くなるように手伝ってあげてもいいと思ってるんだ。一つの方向に君を統一する……ね？」

「どういう意味ですか？ それ」

「いまに、君の体が自然と教えてくれるだろうよ」

「……」

シャンペン・グラスを指で撫でながら黙っていた彼女が、急に顔をあげて尋ねた。

「ねえ、この家……」

「ああ、ここがどこかはわかるまい。君は盲になって拉致されてきたんだから」

「いえ、場所はいつでもいいのよ。ここを知りあいの方に借りたっておっしゃったわね」

「尊敬する知人の好意のお蔭さ」

「あなたと同じ趣味ですってね。その方女性ではなくて？」

「ああ、は。女性ならなおよかったけど、立派な男性ですよ、紳士です」

「そうなの。じゃここで、あなた、他の女性とプレーしてらっしゃるわけ？」

「君は僕の招いた初めての女性です」

「ねえ、聞かして。今日奴隷役で参加させる予定だったという女性のこと」



「マゾヒストです。ほぼ完全なマゾ女性」

「だったら、きつと凄い美人に違いないわ。」

「そうでしょ？」

「マゾ女性に美人が多いのは確かだろうが、美人が必ずマゾであるわけじゃない。それに、美人とは一体何だね？ お面の造作ばかりで美人になれるなら、化け方次第で世の中いくらでも美人ができるぜ。『凄い美人』というだけの女じゃあ男は魅力を感じないよ。女の美しさは顔だけじゃないからね」

私は、彼女をぐっと見詰めた。彼女の目に僅かに狼狽の色が動き、一寸頬が赤わんだ。

「……ええ、そりゃ。だけど教えてよ。その女の人とあなた、どんなおつきあいをなさるの？ その人はどんなことが好きなの？」

「縛られるのが好きさ。太縄で後手に、胸を乳房を下腹部をギリギリに縛り上げられ脚を縛るが好き。鞭で滅茶滅茶に叩かれるのが好き。乳房に針を突き立てられるのが好き。カントに太い蠟燭を押し込んで火をつけて、熱い蠟涙で股間を固められて悦ぶよ。それから……まだまだ凄いプレイを話そうか？」

「ああ、もういいわ。あなたもそうするのが好きなのね！ そうやって燃えるわけ？」

「そうさ。彼女が燃えるから僕も燃え、僕が

興奮するから彼女も興奮して……」

私は、いく分誇張して話したのだ。ケイコは一寸強くいって私を見据えた。

「私、その人を見てみたい！」

彼女の心が急速に動いているのがわかる。嫉妬かな？ この心の動きの微妙さをうまく掴んで、わが意図する方向へ変換していくチャンスのようなのである。ここは愚図愚図していは事を仕損じる場合だ。

「プレーの中で君は彼女を見るかもしれないんだよ。さあ、今日の筋書を進行させよう。立ちなさい。ほら、もたもたしないで、こっちへくるんだ！」

私は彼女の首の鎖をとり、ぐいと引き立てる。Sプレイヤーの本性を現わした男の態度にあわてて従う彼女は、いくぶん紅潮したほろ酔い気分である。深みのある灰色がかった眼に、才女のプライドを傷つけられたときの混乱の色合いを浮べ、私と見知らぬ女との間の想像を越える狂態を聞き知って驚きとジェラシーを押えられず、マダム・ケイコは身を震わせ足を乱してついてくる。

## 女の贖罪Ⅱ鞭の罰

拷問道具の設備されたプレールームのドア

の前で私は立ちどまり、彼女に黒い布で目隠しを施してから、その桜色の耳に囁いた。

《雑念を払え。女の恥らしいも飾りも全部用はない。プレーに臨むとき、西洋の女性はいかなうだし、あの奴隷役の彼女もそうだったよ。光のない世界に沈潜して自分に問いかけるんだ。いいか？ 僕は君を罰する。僕の君に与える罰は、すべて君自身への戒めだと思え。君は僕の罰で自分自身を戒めなけりやあいけない。僕らの愛はその後にだけやってくる》

実際、西洋の女性たちは、『女の罪』の深さをよく知っている。そもそも世界最初の女イブはエホバの神によって地球の支配者とされたアダムの肋骨からつくられたというのに、邪淫の蛇の唆しに乗る軽卒さのせいで、禁断の木の実を喰ったばかりに、アダムの子孫の男たちを永遠に堕落させてしまうという罪を犯したから、神は彼女の子孫である世の女性族に男性に従属する義務を罪として課したのだ、とは旧約聖書の言葉である。男を永遠に色欲の囚人としてしまった女の原因を少しでも贖う道は、男の肉体によって女の欲望を制圧し続けてもらう以外にはない。だから、男に愛されたいと思ったら、女は男の罪を愛する





ことだ。それが女の贖罪というものである。  
西洋男女のSMプレーで、鞭打ち、縛り、刺  
突、そしてファックへと連なるそれぞれの行  
為は、女のうける罪であり、同時に男の愛な

のである。だからそれらの罪がより激しかれ  
と願うM女性は、最も神の心に叶う者であり、  
つまり最も女らしい女ということなのだ。  
の愛。SM愛は贖罪の道だから、女は男の前

に一切の虚飾を捨てて裸になり、男の肉刑の  
前に素直に体を差し出すだけでいい……ヨー  
ロッパの女性の「女らしさ」とはこういうこ  
となのだと、私は西洋好きのわがマダム・ケ



イコに体で知らせてやるつもりなのである。

二人の間では初めての強烈な責めの場面が、これから始まる。彼女は、私の「罰」という言葉と「飾り」をはがされるかもしれないことにたじろぎの色をみせ、いく分身を固くして立ちつくしている。だが私の方は嗜虐の快感への期待で軽い興奮を覚え、彼女を後から抱きかかえるようにして裸の肌をあわせ、その丸い尻を股間の膨らみでぐいと押してドアをあけた。

この部屋は新進気鋭の緊縛師でルポライターかつ雑誌編集者である某氏が、手塩にかけてしつらえた愛と罰の城なのである。ここでどれだけのM女性たちが悦虐にうめきのけぞったことか知る由もないけれど、大道具、小道具の一つ一つに、また壁や天井、床の上に、耽美の色香が濃くしみついているようである。

洋風好みのケイコにあわせて用意したプログラムでプレーを開始する。

まず、前手錠を後手錠に変えて、滑車の鎖に緊いで吊り上げる。彼女の体は少しずつ前かがみになり、逆手が限度一杯に上がったところで前傾の上体も止る。彼女のガードルを外し、尻を丸出しに剥ぐ。白く艶やかな肌のその体から数歩退き、私は愛用の鞭を手にし

て立つ。快い緊張感に包まれる一瞬である。

いつの頃からか、女体を鞭打つことが好きになった。それまでの緊縛一辺倒のプレーに鞭の前戯が加わるようになり、今では鞭抜きプレーはホップの利かぬビールのような味気なさが残ってしまう。その鞭も小振りの乗馬鞭や九尾鞭ではつまらない。日本古流の紙縊りや竹束の笞はなおいけない。大振りの紐鞭のついたブル・ホイップがいい。見た目に美しいスネーク・スキンのものよりは、やはり牛革の編み紐で使うほどに色がくすみ、しなやかさを増すもの、紐鞭部分が一メートル半から二メートルほどもあるものが好きだ。猛獣使い用のものと同種で、パリのムーラン・ルージュなどの鞭打ちショーで愛用されるものだ。小手をひねって押し出すと、ヒュンヒュンと小気味良い音を立てて空を切って飛び、肌にバシッと当って跳ねる。その気分は硬式テニスで球を打つあの鋭い快感に似ている。以前もっていたブル・ホイップは使用感抜群だったが、つまらぬことで紛失してしまった。今手にしているのは、滞欧生活中にロンドンで買い直したものだからまだ新しいが、それでもパリ娘の体に当てて使いこんできた思い出の道具である。

鞭を好むようになって、プレーの状況にも変化が現われる。まず、縛りの型が影響をうける。日本流のきっちりした左右対称の縛りは、緊縛拷問のプレーでこそ不可欠かつ愉しいが、鞭打ちプレーではむしろ具合が悪い。体中に纏った縄衣裳が防具になって邪魔でさえある。鞭打ちの効果を最大限に高めるためには、拘束は最小限にとどめなければならぬ。肌をできるだけ露出して鞭打ちをうける部分の表面積を大きくした上で、悦虐の雰囲気ダイナミックに演出できるように、対象者が弓なりに体を反らせて絶叫し、えびのようにな身を縮めて悶え、魚のように身をくねらせて躍り跳ねられるだけの、体の自由度が与えられる必要がある。欧米のSMプレーで縛りといえば、手首吊りや前手また後ろ手の小手縛りあるいは大の字縛りなど、シンプルな型の多いのは、鞭打ちがプレーの主役になっているためである。もっとも私は、こんなプレーに親しんではみても、審美的で情感溢れる日本伝統の縄による緊縛プレーへの愛着は、いささかも減ってはいないのである。ときに応じて洋風にまた和風にとプレーの巾を広げることが楽しいのである。

鞭打ちを楽しむようになって起った頭の痛



い問題が一つ。派手な鞭音が他人の耳を驚かして邪魔が入りはしないかという心配である。

プレーの最中にルームメイドにマスターキーでドアをあけられ踏みこまれた経験を一度でも持つと、ホテルでの防音法にはことのほか気を使うことになる。だがこの館なら安心である。今日は思いきって鞭を振るだろう。

私はブル・ホイップを構えて大きく二度、三度スウィングしてから、ケイコの臀部にバシりと打ち下ろした。続いて二打、三打！

「あーっ、あーっ」

彼女は大声で悲鳴をあげながら、逆手の吊り縄を支点に身を反らし小馬のように跳ねる。けれども「やめて！」とはいわない。私の打ち方を心得ているからで、だから彼女の悲鳴には自己愛的な演技が混じっている。私は今日は本物の鳴き声を聞きたい気分である。

尻に腰に背に薄赤い条痕が縦横に交錯して浮き上がってきたところで、首輪の鎖を引きつけて感想を聞いてみる。

「どう？ 鞭の味は。甘いかな？ からいかな？ この程度の鞭打ちではまだ味がないだろうな、どう？」

といって、私は鞭の柄（握り）の部分で彼女の股間に押し当て、両端をもってゆっくり

持ち上げてみる。

「う！ あ、あっ」

彼女は爪先立ち、それから交互に足を上げ下げして割れ目への圧迫を緩和するのに躍起となった。その片脚をもち上げて股間を覗いてみる。薄い繁みに縁どられた女陰の縦長の口はまだ潤いに乏しい。

「尻打ちの叩き料理だけでは、あまりおいしく（デリシャス）はならないようだね。レアのビーフは直接叩くものなのかね」

私は尻打ちべら（スパンキングパッド）をとって尻の代りに股間をピシャピシャ叩き続ける。彼女はわめき声と共にいく分濡れてきた。日本料理風のあっさりした味を好む向きには、香りの強くないこのあたりが食べ頃かもしれない。

#### 女の贖罪Ⅱ十字架責め

小手調べのすんだケイコを、私は黒い十字架に磔にしたくなった。十字架上の法悦のマゾヒズムなど仏教徒の彼女が覚えることはいけれど、洋風プレーでは欠かせない。

「洋風を君は好きだから、磔の罰をあげよう。目の見えない彼女にプレーを予告してやることは、親切だからではないのである。プレー

ー内容を想像させる振り所を予め与えることによって、興奮のための刺激を高める心理効果を狙うので、だから私はこの辺でそろそろもっと意地の悪い予告も始めることにする。

あの女奴隷と愉しんだプレーを教えてあげる。でも、ケイコ奴隷に耐えられるかな？」

十字架台に体を運びながら、ケイコの耳に囁いてやった。明らかに、彼女は反応を示して一瞬ぶるっと震え、唇を開いて何か言おうとして唾をのみこんだが、そのまま押し黙ってしまった。屈辱感と対抗意識がごっちゃんになって声を失った気配である。

縄の縛りでは、二の腕と小手の緊縛は最後に廻すのがプレーの常道とされてはいるが、私は後手縛りの風情が好きなのでどうしても先に手を縛ってしまう。十字架はその点どこから始めても同じことで、余計な心配はいらない。当然両腕を横板に張り付ける仕事から始める。尾錠つきの革ベルトで二の腕と小手を固定し、縦の柱を背負った胴体は、乳の下を同じく固定し、胴をくびれるほど締め、腿と下肢を縛る。網タイツをつけた脚にはハイヒールを履かせた方が審美的だが、責めに関係がないからやめる。色の白い女だから、黒革の緊縛はよく似合う。どこから責めよう



か？ 乳房から下腹部へかけてさーっと撫で  
てみる。残暑の時期、窓を閉め切っていると  
いうのに、皮膚はさらっとしている、いく分  
ひんやりした表面温度だが心配はあるまい。  
ブレーの進行につれて、この肌は火照り出し、  
汗が吹き出してぬめぬめ、てらてらと輝いて  
くるはずである。

顔を押しあげ、口づけしてやり、

「その女はね、こうされるのが嬉しかったん  
だ」

とそのまま両の乳房をゴシゴシと揉み、乳  
首を指先で強く挟みつける。

「うっう……う？」

彼女は私に合わせた口の中で呻き、ついで  
に質問をしているが言葉にならない。で、乳  
首を洗濯ばさみで挟んでやる。するとキスを  
離して、

「ギャー！」

とてつもない大声を発した。これは本物の  
悲鳴らしかったが、この分ではあとあと猛獣  
の檻のようになりかねない。私は口をこじあ  
けて豚轡（ hogtye ）をはめてしまう。それ  
から、

「観音開きの扉がパタパタ開いてご本尊が風  
邪など引かないように、ロックしておこう」

と下の唇を二ヶ所、洗濯挟みではさむ。身  
をよじるが、叫び声はあがらない。

「彼女はね、へ割れ目ちゃんの唇に小穴をあ  
けて糸で縛ってみて」といったんだぜ」

と教えてやる。ケイコ奴隷は、まだ見ぬ女  
への怨念で身を震わし、轡のゴム球をもごも  
動かししたが、

「お……おん？」

と鼻にかかったフランス語風母音を発する  
だけである。へ私にも穴をあけて」といつて  
いる風情ではない。小生も唇のピアスの趣味  
はまだない。装身具のバランス上、両の耳に  
も洗濯挟みをつけてみる。上等なイヤリング  
とはいい難い。

さて、磔刑は本来槍で突くのである。生憎  
恰好の道具がない。肉槍なら革褌の中で動意  
づいているが、十字に磔けられた女体を下か  
ら串刺しにすることは、アクロバットでも不  
可能である。十字架というものはもともと脚  
を閉じるようになっていたので、開脚できる  
なら十字架ではなくX字架である。そこで私  
は、両の指を使ってくすぐってみることにす  
る。腋の下をコチョコチョコとやる。脇腹もコ  
チョコチョコ。これは効いた。マダム・ケイコ  
は身をよじり、十字架が倒れんばかり、豚轡

の下でフワフワ笑っているのは奇妙な情景で  
ある。その他の場所は効かないようなので、  
代りに爪を立てて突いてやる。ハンブルグの  
女調教師たちお得意の刺突で、M男たちの中  
にはこれだけで殉教を全うして昇天してしま  
う者もいるというのだ。爪を突き立てる悪女  
風の技法は、どうも男性の責めの手とはいえ  
ない。彼女の方は、「お……おっ……おん？」  
の繰返しで十字架を揺らして悶えているから  
効果は上がっているが、豪快さに欠けるのが  
私には愉しめない。

「鞭の罰が全身的な感動を呼び起こす、と彼  
女はいつていた。もう一度試してみよう」

私はそう伝えて、鞭をとろつと後を向いた。  
途端に恐ろしい呻き声と共に、ドサツと音を  
立てて背に重たい肉の衝撃をうけた。彼女が  
十字架ごと私に倒れかかったのである。この  
まま押し潰されたら、十字架を背負って殉教  
死するのは私の方になってしまう。私の愛の  
罰が神罰と鉢合わせした気分である。私は十  
字架を彼女ごとよっこらしよと立て直し、気  
分を変えるためにケイコの体を一度外して裏  
返しに磔けることにした。背から尻にかけて、  
鞭打ちに適する空間がたっぷりできた。

私は二メートルの間隔をとり、思い切って



大きくブル・ホイップを振った。尻に集中していた紅色の鞭痕は背中に分散して、ケイコの後姿はみるみる赤く染まる。彼女の「お：おっおん？」の呻き声はもう休む暇もない。そつと肌に触れてみる。ヒクヒク動いている体は大部分照って温度が上昇している。私の鞭は、その跡の華やかさほどには苦痛はひどくなく、傷跡もあとにあまり残らないのである。それにしても彼女はよく耐えている。ライバルとの対抗意識が彼女を支え、彼女をライバルなみの女へと傾斜させつつあるなら、成功である！

一服したいところだが、女責めのプレーは中途半端に休憩すると、彼女の抵抗が出てあとが続かなくなることがある。体力との見合いだ、ここはてきばきと次の場景へと舞台を廻した方がよいようである。私は彼女の磔刑を免除し、抱きかかえて滑車の下に用意した革張りの検診台の上へ運び上げた。相当な重労働である。彼女は自発的には動かない、奴隸人形みたいになっている。その体を仰向けに寝かせてやる。

「火照った背中やお尻が、冷たい革で冷やされて気持ちがいいだろうな。この上で罰をいただくことは、女性の本性に叶っていると思

うよ。ここで股を開かされた経験は大抵の女がもっているものだ」

ケイコはやつと安住の地を得たような面持ちで、豚轡の外れた口を動かし、乳房を大きく起伏させて深呼吸をしている。だが、ここは寝られては困るのである。両手を前革ベルトで縛って一つの滑車につなぎ、両股を開かせてそれぞれの膝上をまた革ベルトで縛り、これに縄を結んでもう一つの滑車にかけ、開股のままぐいぐいと吊り上げる。腰が台から浮いているのは、最後の攻撃を容易にし悦楽の絶頂を共有するときに備えているのである。私は愉しいお遊びを試み始める。

#### 焙り肉ワイン漬けのケイコ

太腿を押えて股間を覗く。洗濯挟みはとつくに除いたから、そこは当然開いている。マダム・ケイコの叢の中をこれまで仔細に観察したことはなかった。その上久しいご無沙汰である。挨拶をして拝見する。それにしてもうす暗い。ライトの位置を調整して、小暗き部分に光をあてた。貴婦人には屈辱の景観である。

私は持参の天眼鏡をとり出して、拡大した部分をじつと見る。これをプッシーというの

はなぜであるか。プッシーとは英語で子猫の意である。どこが猫なのだろうか。その大きな唇で囲まれた複雑な肉襞を指でまさぐってみる。なるほどサカリのついた牝猫の鳴き声が洩れてきたが、上の口からである。するとこの下の口は猫の何なのか？ どうもよくわからない。フランス語でもここはシャットと

いって子猫なのである。男の陽物の方は、その点、英語にせよフランス語にせよ何やらわかりやすい。英語ではご存知コックである。栓のコックではない。雄鶏であるが、またへ上の方へ振り返ったものゝという意味もあつて、ははーんと合点できる。フランス語ではキューである。撞球のキューであるが、原意は動物の尻尾である。平時はだらりと下がっていて、いざ臨戦状態となればぴーんと立ち上がるのがシッポであるから、これもわかりがいい。ついでにいえば、ヴェルジュというフランス語は、鞭と男性器と両様に使われる。これなども、男の陽物は状態によって女体への肉鞭の用をなすと思えば、領ける話である。さて、ひよいと気がついた。レンズを通して子猫の中味を眺めているが、レンズの中が明るいののはライトのお蔭である。今、私の頭に浮かんだのは、太陽光線をレンズで集めて



黒色のものに当てると、温度が上がって焦げ出し、やがて燃え上がるあの現象なのである。彼女は目隠しされていて私の行為がよくわからぬようだが、何やら聞き慣れぬ呻き声を出し始めて身をよじるのは、熱いのだろうか。ライトはかなり強いから、ひよっとしてそこ

が燃えるのであろうか。

彼女の肉壁は、やや色づいた程度のレアのヒレ肉の感じである。ヤングギャルの鮮度には到底及ばないが、といって未亡人だから、日が経って腐りかけた匂いの立ち出す黒ずんだ安売り肉（それを美味だというご仁もいる

が）のように使い込んだ女陰の色合いとは違って、適度の赤味を保っている。一番デリシヤスな頃合いのこの色なら、レンズの光線で燃えて煙を出すことはないのではなかろうか……。

すると、また一つ記憶が蘇った。南仏海岸





の人けのない岩蔭で、悪戯にプレーメイトのフランス娘のプッシーを燦々たる陽光に当てて消毒してやったときのことだ。彼女はすぐにくすぐったいといい出し、やがて「痛い！」とわめいて飛び上がったが、どうやら日頃陽に当らぬ部分の粘膜というのは強い光に弱いようであった。男はどうかと、自分のコックを実験してよくわかったが、陽光に長く晒すと赤い部分は火ぶくれを起こすおそれが十分あることを知ったのだ。レンズを通した電光は、ケイコのそこに火焙りの拷問を加えている理屈である。案の定、彼女は、

「あ、う……熱い！」

と叫んだ。

私は消防夫になる。ホースから放射するにはまだ早い。顔を埋める。匂いは薄い。舌を這わして濡らして、火ぶくれをすばやく防ぐのである。私の舌は襲の部分をあちこちと這い廻り、やがて上辺近くの突起に至ってそこを舌の遊び場所と定めた。

「ああ、うう、ああ、い、いい！」

身悶えて彼女の腰が逃げ、吊られた両足も揺れ動くから、滑車がぎしぎしときしむ。ウーッ、ギシ、ペロペロ、アーッ、ギシギシ、ウーッ、ピシャピシャ、アーッ、イーイ、ギ

シ……不協和音の中で私の舌はくたびれる。

一体、花芯というのはどこを指すのだろうか。花であれば、周辺に「がく」があり、その内側に「弁」があり、中心部に「花柱」がある、花芯とは花柱の謂いであるか？ それなら女体では陰核だろうか？ それとも花芯とは専ら文学的表現にすぎないのだろうか……？ そんなことを思っ顔を動かしているうちに、どうやら彼女の肉襲の内側は、全体としてしとしとに潤ってきた。香氣も急に濃くなってくる。白人女性には体臭が強いからオーデコロンなどをつけてセックスに臨むが、そのせいか女の部分の「香り立ち」を私はその割に感じなかったように思う。逆に体臭の淡い大和撫子だけにそのときの香り立ちが強いというのは、面白い現象である。

私も彼女もいくらかくたびれた感じである。一服の代りに気つけ薬がほしい気分になっている。そのことを思っちゃんと赤ワインを一本用意してあった。栓抜きはこの館備つけのものをお借りするが、寝かしておくのを忘れて立てておいた壺のコルク栓は固くて容易に抜けない。やっと抜けかかった途端に、栓抜きが折れてしまった。紙上をお借りして館のご主人にお詫び申し上げます。

さて芳淳なフランスワインの赤である。どうやって飲むか。まず一口含んで舌で転がし、口腔全体で利き酒をしてそれは飲み下す。もう一口含んでケイコに口移しにしてやる。渴いた咽喉がゴクリと鳴る。私の方は、割れ目の間の肉の器に注いで飲む。壺を両手で支えて、トクトクトクと音立てて注ぐ。

「ああ、何したの？ いやアッ」

と彼女はいうが、私は今ちよつとしたフランス料理人のコック（これは親玉の意味である）の気分なのである。溢れかかった赤い酒をぐい、ぐい、いやびしゃびしゃとなめて飲む。一見吸血鬼めいてくるが、赤ワインは西欧では殉教者の血の象徴であるから、老若男女、子供まで年中飲んでワイン漬けである。信仰心故の吸血鬼である。

前号だったか、島木道人氏が「わかめ酒」の愉しみを書いておられたが、私は女体のヒレ肉にはワインが一番合うという考えである。とりわけいく分渋味のある赤ワインは肉料理に欠かせないと思うのである。大方平らげて肉襲の間に多少留ったワインが残る位のところ、指で肉を丹念に揉んでやる。極小の鞭でもあれば、ホイップ・ポテトみたいにペタペタ叩いてみるのもいい。ワインがしみ込ん



で柔かくなった肉（部分的には揉んで却って固くなったところもある）を、なめかつしゃぶる。匂い立ちといい味といい極上である。そこで一寸思い出すが、先日電車の中にTシャツを着た可愛いお嬢さんがいた。そのシャツの胸のところに「LICK&SUCK!」と横文字がプリントされているのである。「なめてしゃぶって！」というその大人の意味をこのカッコいいギャルはわかって着用しているのだろうか、と私はまじまじと見詰めてしまったのである。

### ケイコのスタンプ

かねてやりたいと思っていたことは、この際やってしまったわねばならぬと思う。何やら宙を飛んでいる風情になってきたマダム・ケイコに向って尋ねてみる。

「顔の化粧が落ちてきたよ。僕好みの化粧をしてやろうか」

彼女は首を振って「いやいやをする。まだ素直でないが、まあいい。私が化粧してみたいのは顔以外の部分なのだから。」

彼女のハンドバッグから抜いておいた口紅と紅刷毛をとって、乳首を染めてみる。子供のない女だから、色素の沈殿は少くてピンク

色の残っている乳首である。塗ってるうちに段々突き出してきて、桑の実の変種みた赤いオブジェができた。次は下の唇である。開いた口の周辺部を化粧する。

これはなかなか難しい。同じ口でも上の口より大きくて部厚い上に粘膜部分につながっているからで、紅刷毛が少なくて手間がかかる。指で押えたりつまんだりしながら丹念に塗る。手作りの民芸品は高価なわけである。

クリトリスのクリクリした部分も塗る。これはエキサイティングであるようで、彼女は「ふわア、ふひゃあ」と奇声を発している。

仕上がったところで眺めてみる。ヒゲを生やした大人の真赤な唇が、縦に開いて笑っている。不気味である。しかし白い肌と黒革のとり合わせに赤のアクセントは、なかなか装飾的かつ幻想的である。

私は、女拓というものをやってみたくいのである。経験はない。今日が初めてである。用意の和紙を開いた唇に押しあてる。紅を塗った部分の上を指で撫でる。一周りしてOK。真中の部分がどうにもならない。バレンをもってきてペタペタと叩くべきなのだろうか？とりあえず和紙を指で押しつける。ふにやふにやのなまこみtainなものであるから、あち

こち押ししていると赤ワインの残滓がジュースと混じってじわじわと滲み出してくる。クリトリスと乳首は別の紙をのせて、それぞれを指で紙の上からつまんで印刷する。さて裏返して観賞してみるが、これは妙なものができた。大きな杏仁形の赤い印の中は、わけのわからぬシミがあるばかり。クリトリスと変種の桑の実、絞り染めみたいなどころを広げると、これはモダンアート風の展開模様になっている。これが女拓というものかどうか、私には自信がない。愛好家のご批判をまつばかりである。ただ技術はこの際どうでもいいのであって、私はこの女の「素顔」をマダム・ケイコに見せつけてやりたい衝動に駆られるのである。これから先の彼女とのつきあいで、この素顔の証拠物件は大いに活用価値打ちがあると思うのである。

### ケイコ落とし・串刺し拷問

私はゆっくりと検診台に上る。この狭い台の上でこれから男女の凄絶な絡みあいを演じるつもりである。がちりしたこの本物の検診台は、二人の重みと震動に十分耐えてくれそうである。

マダム・ケイコは何やら小刻みに震えてい



る。アイフォルダー（目隠し）の下は涙であろうか？ 嬉し涙か口惜し涙の何れであるか、興味深々である。一体コピーをとられることは彼女の人權の侵害であろうか？ 肖像権というものは女人の下半身の部分にも成り立つものであろうか？ そんなことまで彼女の考える余地はないのであって、ただただ才女の自尊心を傷つけられた屈辱のどん底で涙はふり落ちる心境かもしれない。男に心底愛してもらえぬ女になるためには、独りよがりの貴婦人氣取りほど邪悪になるものはない。そんな彼女のバカらしい部分を精一杯破壊してやりたい。愛のスクラップ&ビルドである。

私は顔の上までそろそろと這っていく。サポーターを外す。長らく鞆し革の袋の中で身をかがめていた私の一つ目のキューは、自由を得て伸びをする。口紅の拭きとられている上の唇を、キューの先で撫でてやる。彼女の「あ……う？」が始まる。口を動かして嚙みこみたい風情だから、一寸入れてみてサッと抜き、質問する。

「ドウ、ユー、ウォント、ミー？ はい、いいえ、どちらでもない、の何れかを○印で囲みなさい」

「ウイ。ベゼー、モア……」

英語の質問にフランス語で答えるあたり、彼女まだ飾りがとれないようであるが、この答えは、俗に「したい」という微妙な表現なのである。

「私が汝を愛せるように、まず私を愛しなさい」

彼女はスポツと含んだ。渴いた口が舌のLICK&SUCKの動きにつれて潤ってくる。そこで私は抜いてみる。ぐんと反って、てらと赤黒く照り輝いている。これがコックというものである。私はそれをまた肉鞭に変えてみる。意志でコントロールできるのがキューである。再びしなやかになったところで根元を握り、右頬をぴしやりと打つ。「あっ！」と叫ぶ。

「右頬を打たれたら、汝、左頬を出せ」

これはキリストの言葉である。そこでわがキューは左頬にぴしやりと当って跳ねる。肉鞭の罰を彼女は好きである。私もいい気分である。

SMプレーはセックスの前戯であり、セックスはたとえ片想いにしても愛なしでは愉しめるものではない、というのが私の所信である。自分なりに愛する女性とプレーする（も

っとも私の場合、どうにも愛せないという女性にはあまりいないが、適応力に巾があるのか浮気なのか？）のだから、プレーの極まり二人合体の崇高な儀式「ファック」を抜いたSMは愛の不幸な中絶であり、ときには敵前逃亡なのであって、侮辱だわ！ 卑怯よ！

とののしられてもしかたない性質のものとと思うのである。今日の私は、いささか心に含むものがあるとはいえ、「完全なる愛」の手続きはちゃんと完結するつもりで台に乗っている。革張りの両サイドに手をおいて体を支えながら、跨いだ彼女の上をずるずると摺り下がり、白く艶やかな両股を吊られたままの位置で肩に押し当て、眼下の股間をじつと見る。複雑な形の肉の素顔は正直にヒクヒクと蠢いて、耳を当てれば「ベゼー・モア！」と囁く声が聞こえそうにみえる。ダミーのコックにパイプを入れてじらして苛めてみようか？ けれども、私はパイプやダミーの用法は極限する主義なのである。パイプ責めの愉しみに熱中しているうちに、敵はスタンドインのゲテ物で法悦に達してしまい、本物が用済みになっではうら淋しい。それに女体特有の慣れというのがコワイ。えてして感覚的要素でコトを評価しやすいのが女性である。日頃磨い



た天与の宝刀を、竹光まがいの鈍刀とさげすまれる可能性は十分にある。何のための男かと自ら嘆くようになってはこの世は悲劇。造物主に会わせる顔もない。トドメの攻撃はスキンシップの自然さにしたくはない。ときに一戦終えてまどろむ間にまた敵のトキの声を聞き、やむなく陽動作戦で人工ダミーを先発させる必要がある場合でも、サイズと圧力で大将自身に優る影武者は選ばないのが、兵法というものであろう。

今日のムードはいい線をいっているようなのである。私はズバリ自然にいく。手に唾してひとしごきして、厳かに宣告する。

「マダム・ケイコを串刺しの刑に処する」

見定めて押し当て、一気に入る。

「いやあ、いやっ、ああっ」

いや、と言うのに、ス、ス、スーッと入ってしまった。ついぞないスムーズさである。この豊かな潤いはワインの故か淫水の故か、多分その両方なのであろう。これから先は、所謂九浅一深の動きとなるけれども、私は無報酬では働かないつもりである。手を伸ばして両の乳房を掴み、

「私を罰して下さい、と言え」

「え？ ああ、そんなの、イヤ！」



「罰して下さいと言え！」

「ク、ク、クワッ。バ、バ、バツ……」

「バツカじゃないのか？ちゃんと復誦せい！」

「ああ、バツシテエー！」

「よし、どう罰してほしいんだ。こうか？」

と私は乳房に爪を立ててやる。

「グッ、ガ、ガッ、ヒーイ！ や、やめてエ」

「じゃあ、こう言え。私は素っ裸の女です」

「ス、スッパ……うッ……ハダカ」

「虚栄心を捨てた女です」

「キョ……う？」

「虚栄心を捨てました」

下から刺し貫かれ上から掴まれながらも、

この言葉にまだ冷めた抵抗を感じるのがわかる。この抵抗を断念させる。

「こいつ奴！」

私は、頬に張り手を加えた。

「ギャーッ、痛あい！ やめて」

「言え。虚栄を捨てた、と」

「うわー、わーん、わ、わたし……、ご免なさい……だからぶつのをやめて……」

彼女は明らかに泣き出した。

「泣け、泣いて、要らないものをみんな流すんだ」

う、う、う！ と彼女は身を震わせて声を



しのばせ、唇を噛んでいる。侮辱に耐えようとしているようである。へ頃やよし」独り頷いて私は九浅一深を開始する。彼女は九死に一生を得たような悦びを全身に表わして悶え始め、今泣いた鳥が笑うみたいに思いきり悦虐の大声をあげる。

「このとおり、見栄も外聞もありやしない。

私はタダの女です、と言えるだろ」

「ふわー、ワ、ワタシ……あー、タダノ……オンナ！ ふう……」

「よーし、只の女だ。それじゃ、だから私は淫らな女です、はい」

「う、うーん。ち、ちがう！」

「違うかい？ そうかい？」

と私はすつと抜いてしまう。

「あ、あーっ、う、う？ なぜ？ ねえっ、あなたーっ」

「ほらみろ。好きなんだよ。淫らな女ですよ」頭だけ突っ込んでみる。

「あ、いい！ ふーっ」

「言え、淫らな女！ ほら！」

ぐいぐいと突き立てまた離す。

「あつ、ふつ、あつ、いい……」

「ミ、ミダ、ミダ……う……なのよーっ……わたし……淫らですーっ」

「そうだ、そうだ。淫らだ、淫らだ、淫ら女め！」

彼女はとうとう仮面を捨てた。そして狂女の痴態を現わすかと思えば、牝馬の種つけみたいに荒れ狂う。彼女の姿は変型の猪吊りだから、種つけポーズも変型体位である。牝馬の私は牝馬から落馬しそうである。慌てて滑車の吊縄を握る。狭い台に両手でぶら下がって種つけを遂行する気分はなかなかスリリングである。

そうするうち、何やらコックがカッカと火照る感じである。この興奮は異様である。ワイン漬けの肉装の中で私の一つ目小僧は酔っ払ったのであろうか。彼女の方も下の口の大盃からきこし召して、酔っているのであろうか。真っ赤な顔して全身から汗ふき出して、わめいている。

彼女に淫ら女と口走らせ、私も彼女を淫ら女と呼んで浅深の運動に励むうち、二人とも本当に淫らな気分になってくる。淫ら女と淫ら男が組んずはぐれつ淫らに濡れて、淫ら淫らに高まり高まり修羅地獄に悶え悦び、吊り縄を握り髪を掴み、首を打ち振り、三分の二畳ほどの舞台の上で淫らの愛に乱れ果てた一幕ではあった。

## 十九番ホール

解放された彼女は、一眠りしたいという。

今日は私の奴隷であるから、ベッドに寝かすわけにはいかないのである。床のじゅうたんの上に俯にしてやる。やっと目隠しを外された彼女は、眩しそうに顔をしかめたが、ひどく大人しい女になってひっそりと天井を見ている。狂宴の潮の引く波間に身を委せ、ぐったりじゅうたんの浜辺に脚を投げ出している。彼女は、眼に灰色の深みを増して遠くをみる放心の風情である。私は十九番ホールのプレーを試みる。彼女の両股をぐつと開かせ、ゴルフバッグからパターとボール五個ほどを出し、パッティングの練習を始める。三メートルほどのパットは、ライの読みが難しくスライスして大きく外したが、一メートル半以内の距離はよくきまる。ただしボールはアヌスにぺしやりと当るのであって、狙いたい彼女のカップは芝より位置の高い横穴だから、カップ・インにはどうしても指先の援助が必要となるのは余儀ない次第である。パター以外のものを使ってボールをねじ込むのは、紳士のプレーたるべきゴルフではルール違反であるけれども、彼女の唇からはもはや非難の声もなく、ただ小さく呻いて腰をよじるばかり。

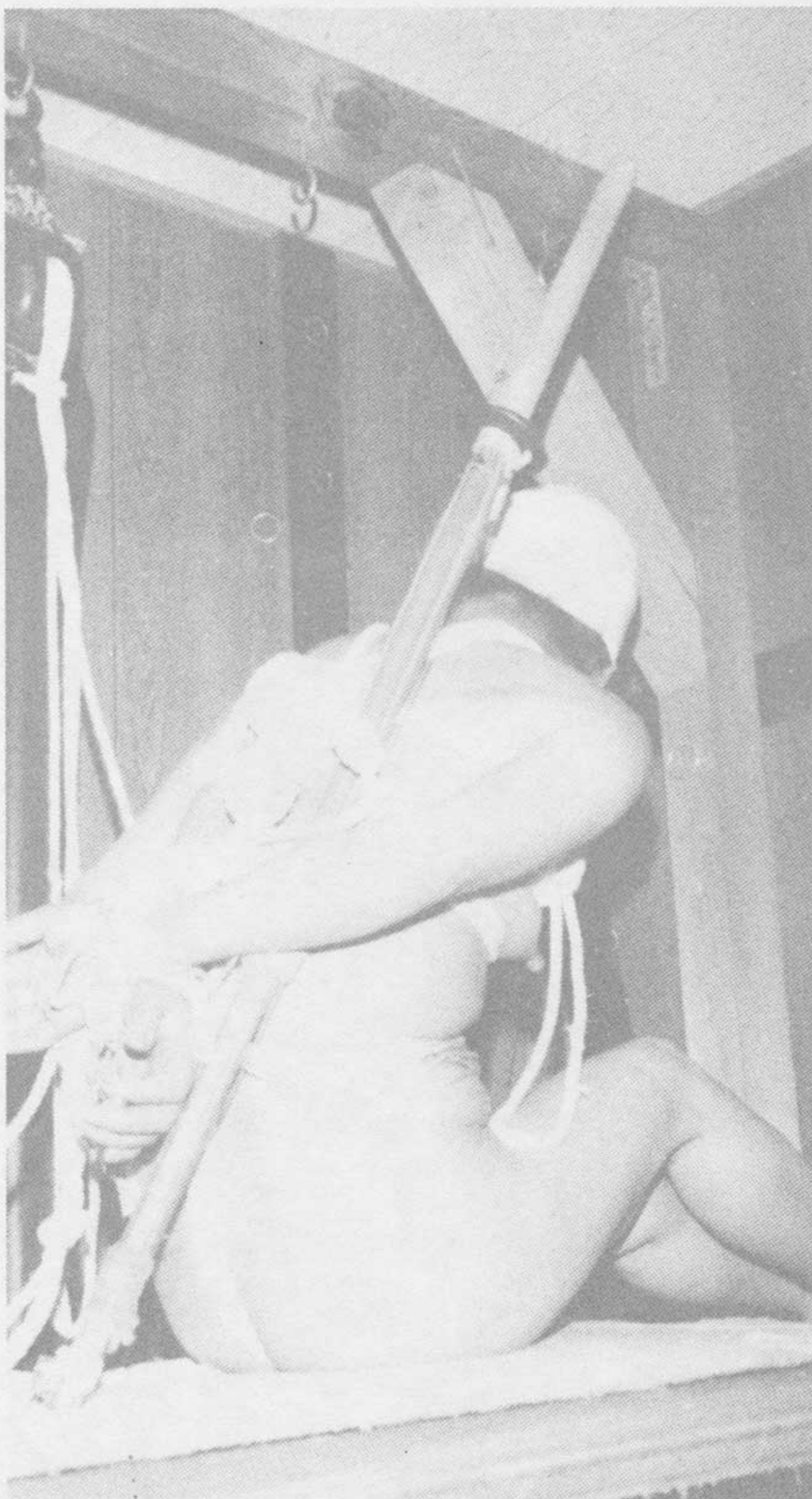


今度はいつか工夫をして、女体ミニゴルフの  
ホールインワンに挑戦してみたい。

X X

この日のプレーには第二幕がある。写真の  
ないのが残念だが、洋風から一転ぐんと粋な  
時代もの和風スタイルで、その顛末を別の機

会に報告できればと思っている。



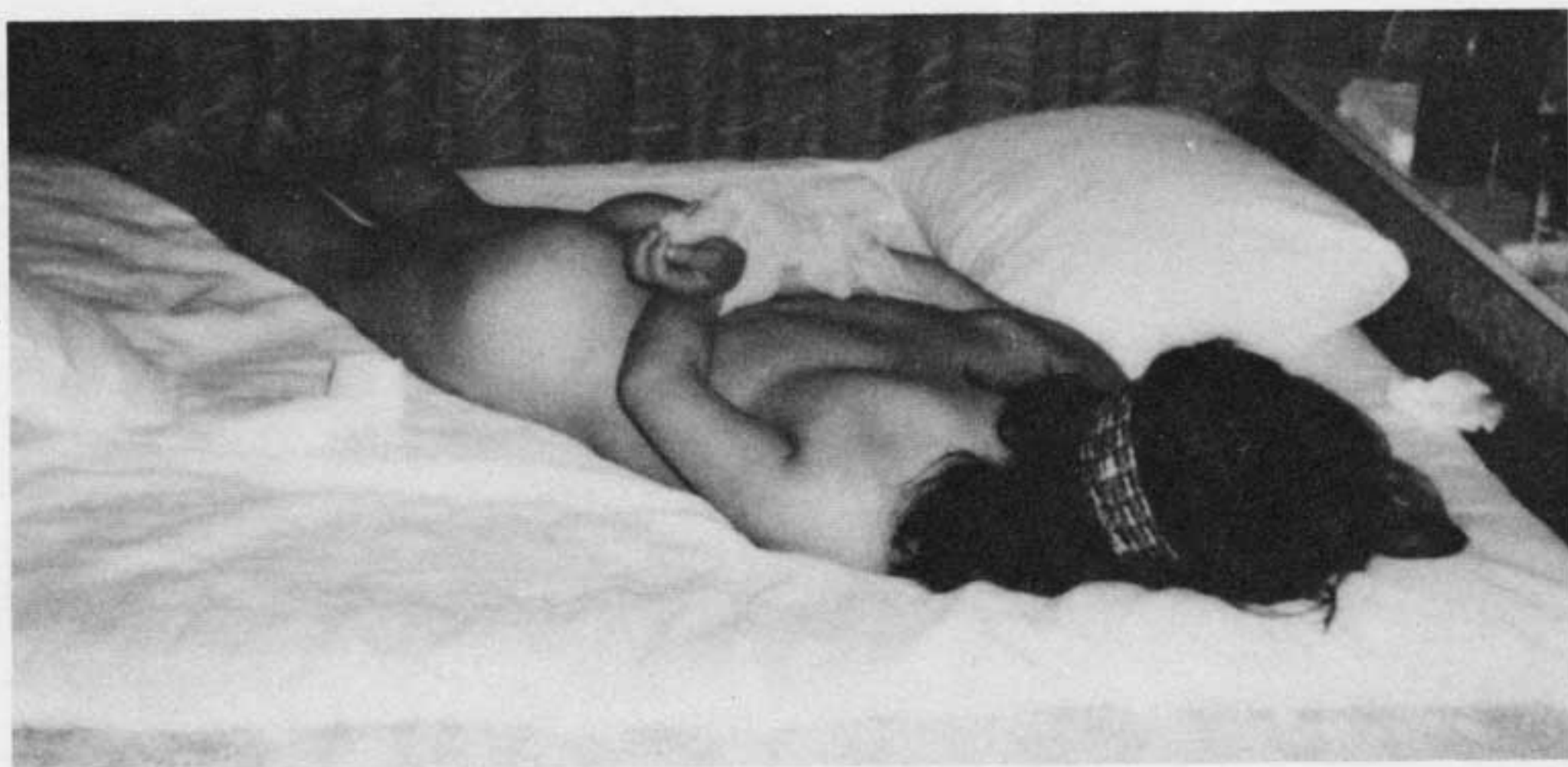


# 令子調教中！

藤本大作







私と令子の出会い、それは彼女が私の勤めていた会社にアルバイトとして採用された事がきっかけでした。

肉感的な、なかなかの美人で、実際の歳よりも若く見えました。人妻らしい落着きは独身女子社員のそれとは違っていました。それが私にとっては好ましく映ったのです。

そんな令子とはじめて関係を持ったのは残業で遅くなった日のことです。

「どうだい、酒でも飲みに行かない？ いい店を知ってるんだ」

「少しだけなら」

「ようし、じゃあ行こう」

「はい」

連れ立って会社を出、酒を飲みながら交わす言葉はどうという事の無い内容でしたが、令子とは話しが合いました。私が三十歳で、彼女が二十九歳、ひとつしか離れていないせいもあったのでしよう。しかし、それ以上に令子の方でも私の注意をひこうと努力しているように感じられたのです。私の錯覚、思い違いかも知れませんが、そう感じた私は令子を誘ってみようと試みたのです。

幾杯もの酒を飲みながら交わす言葉の中から、彼女の夫が出張で地方へ出かけて留守な

事を知っていました。

何軒かの店をハシゴしているうちに令子とは完全に意気投合していたのです。恋人同士が肩寄せ合って愛をたしかめる時のようにホテルへ入っていくのも自然でした。

当然の事のように肌を合わせ、燃え上がった愛の炎のままに身を揉んで悶え、果てたのです。それだけで鎮まるような私達ではありませんでした。更に令子へ挑んで行った時、布団の片わらに浴衣の紐を見つけたのです。

その紐を手に持ち、冷子の体を愛撫するようにして後手に重ね。そのまま令子の両腋下を軽く擦ってみると、はじめはイヤイヤをしていましたが、異常な興奮状態になって身悶え、頬を紅潮させるのです。それはM女特有の表情でした。

瓢箪から駒——正にそれでした。以来、六カ月にわたって調教を重ね、本格的なS&Mプレイに没頭しきる迄に後一息のところまで来ています。

それは後で書く事にして、この時は私が買い求め、秘蔵しているプレイ器具類を一切持って行かなかったのです。そうハードなことではできませんでした。

それでも、最初にしては結構いろいろなこ



とを試みてみました。操りで異常な程の興奮を覚えた令子に、正座するように命令し、その前に立った私は令子の口を開けさせ、ペニスをくわえさせ、おしゃぶりをさせたのです。

口に挿入された時、令子は一瞬驚いた表情を私に見せましたが、素直にフェラチオをしてくれました。

最初のプレイでここまで出来るのはそう多くないのではないだろうか。私は令子にくわえさせたまま、何か部屋にあるもので使えるようなものはないかと周囲を見回しました。が適当な物は見つかりません。あったのはタオルだけ、とりあえずタオルで目隠しをし、後手に縛った紐は解いてやりました。解いてやったのは、縛り続けてあった手首の血行を回復させる為もありましたが、私の命令にどこまで従えるのか試してみたい気持ちもあったのです。

「今度はそこでオナニーしてみろ」

少し冷たい口調で突き放すように命じってみました。

令子は一瞬とまどった表情を見せましたが、ゆっくりと股を開き、右手を上からあてがい指先をリズムカルに動かし、左手で左右の乳房を揉むのです。



「そうだ、それでいいんだ。今夜俺がいなきや、お前はそうしていたんだからな」

「ねえ、いや、早く来て！」

「駄目だ！続けろ」

「お願い！」

「駄目だ！」

令子は観念したように、一人で身悶えをしながらオナニーを続け、

「ア、ア、ア……イクッ、クククク……」

と小さな声を上げ、果てたのです。息遣いも多少は荒げでしたが、それも程なくおさまりました。

令子は体を起こし、ベッドから降りて歩き出そうとしているので、

「何処へ行くんだ」

と令子の後を追うようにして声を掛けながら一緒の方向へ足を進めます。

「やあねえ、オ・ト・イ・レ」

「それじゃあそっちでなくてこっちだ」

「オトイレはそこよ」

「こっちで用を足しなさい」

「バスルームじゃない」

「そう、ここでするんだ」

私は令子の肩を押さえつけ、風呂場のタイルにしゃがませました。洋式トイレでするよ



りも、この方が眺めやすいのです。

「ほんとうにここですか？」

「そう！」

「いやあ」

媚びるような声を出して拒否の表現をしますが、本当に嫌がるような様子は見られません。

尻を左右に振り、少しの間モジモジしていましたが、

「だめ、出ちゃう」

の言葉が終わるか終わらぬうちに、タイルの上に飛沫をあげながら尿をほとばしらせたのです。

黒い繁みの中から左へひねったような水脈が流れ出る姿は圧巻でした。

出終わった後、そのしずくが毛に水玉となって付着しているのも面白いものです。

シャワーの栓をひねり、令子の下半身とタイルの上を何度も洗い流しました。

これだけでできればまず大丈夫、もったも、この時はそう感じる余裕ありませんでしたが、令子が身近に感じられたものです。

以来、不定期ながらも月に二回程の調教を行って、今日に至ってます。

調教の場は主にホテルで、どのような調教





法かといいますと、部屋へ入ると同時に令子  
を全裸にします。そして、全身の検査です。

特に令子のヴァギナは中まで丹念に時間をか  
けて調べます。それが済んでから入浴させま  
すが、体を洗い終わってのすすぎは、令子に  
小便をさせ、その小便をポリ容器で採り、そ  
れを頭からかぶせます。全身に自分の小便を  
あびせられた令子は、濡がポタポタと落ちる  
そのままにサウナバスへ入ります。サウナの  
熱気で小便が乾き、その臭気だけが令子に残  
ります。

そうした臭いのする愛奴もまた、乙なもの  
です、私もその臭いは嫌いでないものではか  
ら、令子の体が乾いた時点で後手縛りを施し  
クスコによるヴァギナの開口責、ロウソク、  
ピン、バイブレーターによる責め等を休む間  
もなく続けます。これで令子は失神寸前まで  
昂まり、

「ねっ、お願い！入れて、入れて！」

と叫びますが、決して与えません。失神寸  
前迄に昂まっている状態を確認してから、

「口を開けてしゃぶれ！」

と突き出し、おしゃぶり奉仕をさせ、その  
ままで放出してやります。

今では私の精液のみならず、小便迄も飲み

るようになっていきます。

次は縄を使つての全身縛り、緊縛です。鴨  
居や床柱を使つての開脚縛り、バイブを入れ  
たままでの責めもよく行います。たとえば浣  
腸です。

私の浣腸法は、二百ccのグリセリン液を  
同量の入るガラス浣腸器にて注腸します。充  
分我慢させた上で排便させ、腸内を空にした  
後、エネマシリンジ、イルリガートルの何れ  
かを用いて石鹼液、微温湯、グリセリン等を  
注腸しては強襲してくる排便に耐える令子の  
表情を楽しんでいます。

そうはいっても、浣腸に充分慣れ、馴じむ  
ところ迄はいつておらず、グリセリン二百cc  
で我慢の限界が約十分です。将来は肛門拡張  
もするつもりで、その調教に備え、直径二セ  
ンチ五ミリ位の棒状バイブレーターによる挿  
入を繰り返し、A感覚を開発すべく努力を重  
ねています。すでにアナル拡大器やアナルス  
トッパー、ブジー肛門点検棒を買い揃えてあ  
りますので、それ等を使用するのもそう遠く  
ないと思います。

また、アナルと共に尿道責にもチャレンジ  
してみようと考え、尿道洗浄器、ネラトンカ  
テーテル等の尿道用小道具も用意してありま

す。

ただ、これらのものを使って調教した経験  
がありませんので、どのように調教していっ  
たらいいのか、実践されている方からアドバ  
イスをお願いしたいと思います。是非共よろ  
しくお願いします。

尚、同封の写真は顔を隠してありますので  
誌上発表して下さい構いません。何れも  
調教始めの頃にポラロイドで撮影した写真で  
す。今は普通のカメラで撮っていますが、自  
家現像処理設備を持たぬ為にフィルムがたま  
る一方です。

〈編集部より〉

モノクロフィルムでしたならば当社で現像  
焼増しができます。カラーフィルムについて  
も同様にできますので、御希望があればお引  
き受け致します。

§

§

§



# 嗜虐行路

## 我が妻との愛虐人生

松阪和正

私達SM歴二十年、すでに中年後半を迎えようとする夫婦ですが、今もって倒錯の世界に魅せられ続けております。本誌十三号もいち早く入手して、大変楽しく拝見させて頂きました。毎号のことながら、自分の胸のつかえがすうっと下がり、明日への仕事に対する活力がみなぎる思いです。いろんな方々の体験や告白、それがパノラマのように私の目の前をよぎり、読んで良かったという気持ち心が晴々とさせてくれます。

今回、稚拙な文章ですが、現在の私達夫婦の卒直な心境を綴ってみたく、ペンをとりました。写真を見ればご判断頂きますように、すでに妻の容姿も衰え、本誌グラビアに登場されるM女性達のように美しくはございませんが、皆様のお仲間に加えて頂ければ幸いです。

若い頃から私の中には嗜虐の願望が強くあり、そのほとばしり出る性の欲求は抑えようにも抑えきれず、絶えずやりきれぬ思いで青春の日々を過ごしてまいりました。内気で小心な私には気の許せるガールフレンドも居らず、ましてやSMのプレイメイトなど望むべくもありませんでした。やはり他の愛好家の

方と同様に私も「奇譚クラブ」を読み漁っては、未だ知らぬSMプレイの息を飲む嗜虐シーンを夢想し、自らを慰めたものであります。そんな私に或る日、親戚から縁談が持ち込まれました。写真を見せられて、まあ嫌いなタイプではないなと思い、見合いにはあまり気の乗らなかつた私も、本人に会ってみることを決意しました。

元来私は口べたで、洗練された会話を人と交わせる才もなく、故に寡黙と見られがちでありましたが、心の奥底には激烈に燃えさかる衝動のようなものがあり、ひとたび良きパートナーを得たならばそれを思うままにぶつけ、曝け出したいと願っておりました。ですから妻となる女性は、我儘で傲慢であつてはならず、従順且つ貞淑であり、私の激しい衝動を受け止めてくれる人であつてほしかったのです。皮肉なことに、それまで付き合ってきた幾人かの女性はどれも皆、勝ち気で我が強く、私を押えつけようとしていました。口数の少ない私を見て母性本能をくすぐられたのでありましかうか。しかしその縁談の相手を写真で見えて、控え目そうな印象が強く残り、内見合いの日を心待ちしたことを覚えております。



見合いの席で実際に会った彼女は、写真よりもぼっちゃりした感じで、伏し目がちに私を見る風情がとても新鮮でした。私は自分でも不思議なほどにあれこれ話しかけましたが、何をしゃべったか思い出せないのは、やはりボートとなっていたからでしょう。

私が積極的にリードする形で交際が始まり、トントン拍子に話は進んで半年後には結婚することになります。今の若い方たちには笑われるかもしれませんが、妻のたつての意向で結婚までは一線を守りました。猛り狂う情欲をなだめ、獲物を生け捕りにしたハンターの気分になって、舌なめずりを繰り返したものです。

そして交際期間中を、結婚後の本格的SMプレイへの助走とし、何も知らぬ彼女の啓蒙に努めました。例えば夜の公園などでペッティングをしながら、

「悪い子だね。縄で縛ってお仕置きをしちゃうぞ」

とか、

「結婚したら、啓子は僕の可愛い奴隷だ。御主人様の言うことは何でも聞くんだよ」

などと耳元で囁きました。その度に妻は目に涙をうつすらと浮べ、イヤイヤをするので



す。その仕草を見て私の官能が燃えたつのは言うまでもありません。

他にも折につけ、「奇譚クラブ」のグラビアを見せたり、本文の内容を説明してやりました。しかし妻は汚らわしいものを見るような視線を私に返すだけです。私は道程の長いことを覚悟しましたが、少々の荒療治も最初は止むを得ないな、と感じたりもしました。

そして新婚旅行です。私の空想の中では、彼女はすでに調教を施されたM女として、あらゆるプレイをこなすまでになっているのですが、実際は未だ男を知らぬ、恐怖心ばかりが先に立つ乙女でした。初夜の床で新妻が風呂から上がるのを待ちながら、私はあれこれ思いをめぐらせたものであります。

最初の営みを終え、喪失の痛みと衷しみて啜泣く妻の両腕をつかみ、後手へまず縛り上げました。まさか新婚旅行へ縄を持参するわけにもゆかなかったので、浴衣の帯を使用致しました。

「何で縛るの！ いや、絶対にいやです」  
妻は渾身の力で抗いましたが、やがて諦めると号泣を始めます。



「今日は記念すべき夜だ。これから他人でなくなるんだからね。だから啓子に僕のやり方を知ってもらわなくちゃならない。僕を本当に愛してるなら、我慢できるさ。」

このように書くといかにも落ち着いているようですが、実際は汗がタラタラ流れ、指が震えるほど緊張しておりました。こちらは女性を縛るのは初めてですし、彼女にとっては不安と期待の入り混った初夜なのです。もしヘタをすれば翌朝にでも実家へ帰ってしまうかもしれない、そういう危惧が脳裏をよぎりましたが、私にとってもこれは大きな賭けだったのです。

その日までの感触で、こちらがどんな苛酷な責めを加えても妻は必ず従ってくる、という成算が私にはある程度ありました。私の行為は妻への愛によって成り立っているのだし、その愛あればこそお互い理解することも出来るはずだ、とも思いました。

しかし、妻のショックは大きかったようです。それまで薄々私の趣味には気づいていたようですが、まさか初夜にこんな目に遭うとは夢想だにしなかったのでしょう。ともかく初めから妻にMの欲びを望むのは無理な話ですから、ひたすら心構えを覚えさせるのに努めました。



「さあ、これから誓うんだ。啓子は一生あなたの奴隷として仕えます、と」

床の中で後手に縛り上げられた妻の髪の毛を引っ張りながら、私はそう言ったのです。しかし妻は泣きじゃくるばかりで、返事をしません。

「これが僕の愛し方なんだよ。君はもう僕の妻になったのだから、甘やかさないぞ。さあどうするんだ。え？ 言わないか」

「ああ、もう苛めないで。わ、わかりました。啓子は一生あ、あなたの奴、奴隷として仕えますわ」

激しく嗚咽しながらも、妻はそう誓いました。その後で私は精一杯優しく妻をなだめて、その恐怖心を柔げてやりました。

そんなふうにして十日間の新婚旅行のうちに、何とか調教の第一段階を終えて戻ってまいりました。毎晩妻の涕泣が部屋中に渡り、私はあたりを憚って気が気ではなかったのですが、旅行の終りには縛られたまま口で奉仕させることも出来るようになったのです。思惑通りの進展具合に、私の喜びは如何ばかりだったでしょう。

それからはどのようにして妻を責めるか、そればかりを考え、新しい責め方を見つけて



妻の羞恥と悦楽に悶える表情を想像すると、言いようのない充実感が体中に漲ってくるのでした。

次の段階では剃毛を始めたのですが、当時は銭湯通いだったせいもあってか、ひどく嫌がりました。最初は辛かったでしょうが、慣れると妻の方から、

「また生えてきたから、そろそろ剃ってほしいの」

と言ってくるようになりました。こうして十年ほどは欠かさず剃毛をしていたものです。

続いてアナル調教に入ると、それまで従順にしていた妻が、久し振りに激しく抵抗しました。自分の出血を見て狼狽し、あまりの痛さに涙を流しました。私は辛抱強く少しずつ穴を拡げてゆき、今では私の男性自身を苦もなく受け入れます。

このように、長い間に亘る被虐の苦しみの中で、いつしか妻は縛られることに歓びを感じ、苦痛の中で生まれる快感に溺れ、陶醉するようになりました。私の嗜虐欲求の生贄として、思い通りの飼育妻になっていったのです。



しかしこの夫婦で楽しむSMプレイにも限度があり、あらゆる試みをし尽した後には、マンネリに悩み出しました。それが重症を極めた六年前、迷ったあげくに、ある決断をしたのです。新しい刺戟を求める試みとして、夫婦のSMプレイにオ三者を交え、複数プレイにする、というのがそれです。かなり勇気のいる決断でしたが、それに踏みきってからというもの、複数プレイは私たちに無くてはならぬ刺戟剤になっていきます。

この六年の間にすでに二十人を越すS男性によって、妻の体は縛られ、凌辱されてきました。それまで私以外の男性を知らなかった妻は、当然のことながら最初はひどく恐れ、緊張してましたが、私のなかば強制的な提案には服従せざるを得ませんでした。

今ではオ三者のS男性から命じられるままに、淫らなオナニープレイを見せたり、苦しい緊縛に耐えながら顔面を紅潮させ、羞かし気にオシャブリの奉仕をします。そして性感の高まりに燃え上がった男性に対し、自ら大きく身体を開いて受け入れ、深く啜えこみながら悩ましいセリフを言って、心ゆくまで満足させます。

この複数プレイの中で妻は、相手の男性の

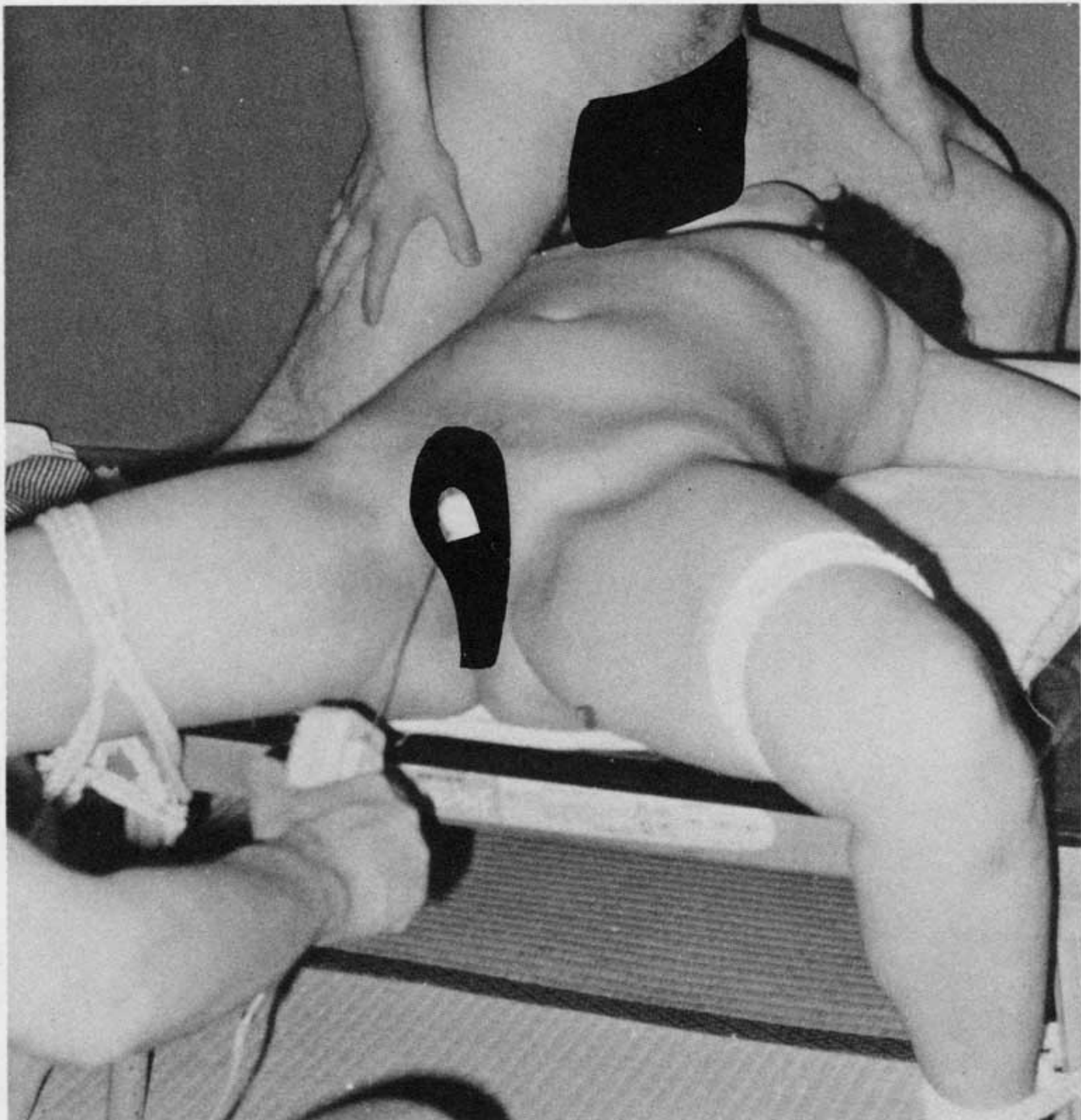


嗜虐度が強ければ強いほど、激しい興奮を示すようです。私もそんな妻の姿態を目のあたりに眺め、クラクラするほどの官能の昂ぶりを覚えます。予想外の効果に味をしめた私はそれからというものの、絶えず頭の中により異常な複数ブレイの企画を練りながら、胸をときめかしております。

今まで述べてきましたように、結婚当初より私たち夫婦はSMブレイによって深い絆を保ち続け、甘美な歓びを味わってきました。そしてそれがマンネリで行き詰まると、新たな試みに私は躊躇し、妻は不安におののきながらも入ってゆき、今やつと願望の頂きに辿り着いたという心境です。

このような私の心境は、同じような夫婦ブレイのマンネリ化に悩み、似たような経験をされた御夫婦でないと、判って戴けないと思います。しかし若しこの拙文が、今現在悩んでいらっしゃる御夫婦にとって、何らかの参考になれば無上の喜びであります。

※編集部より——松阪和正さんの原稿に編集部で若干加筆させて頂きました。





# 愉芽のフオートギャラリー

## 若妻嗜炎「密火」

















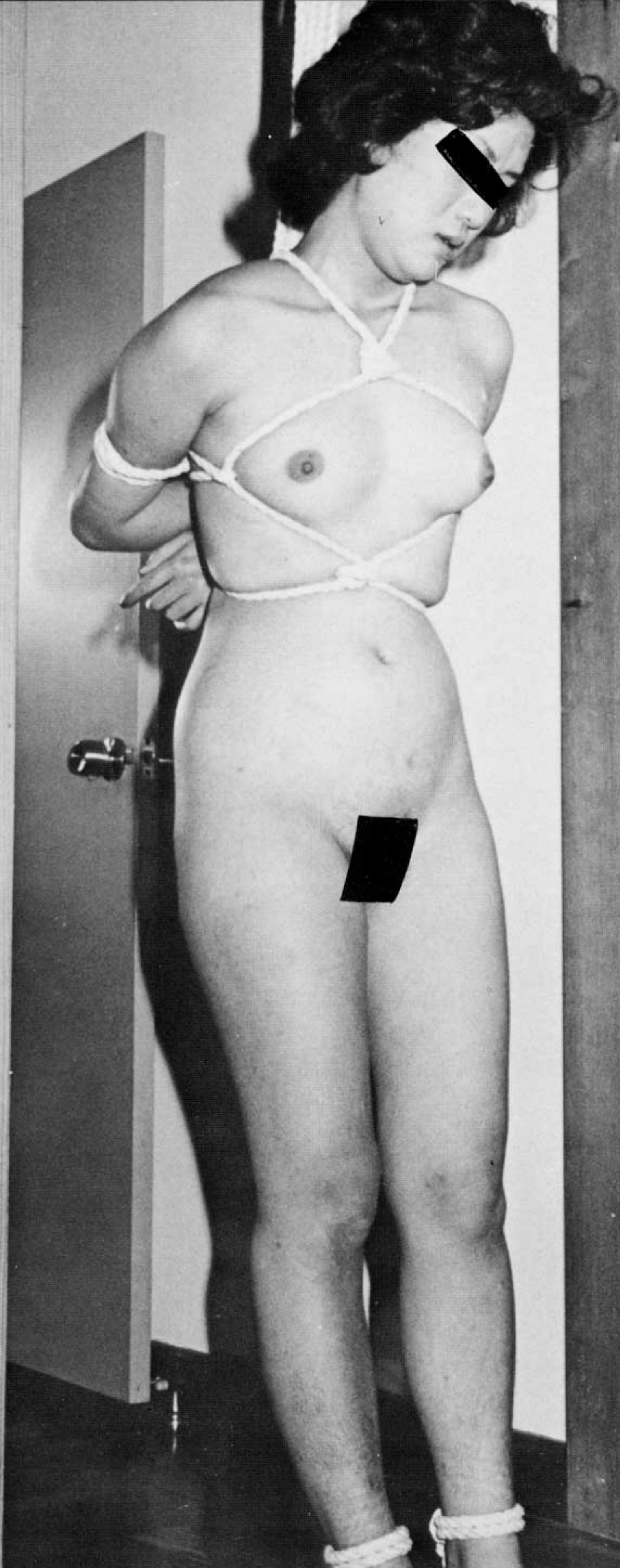








# 全裸羞恥のとまどいら









# 戀の魅力

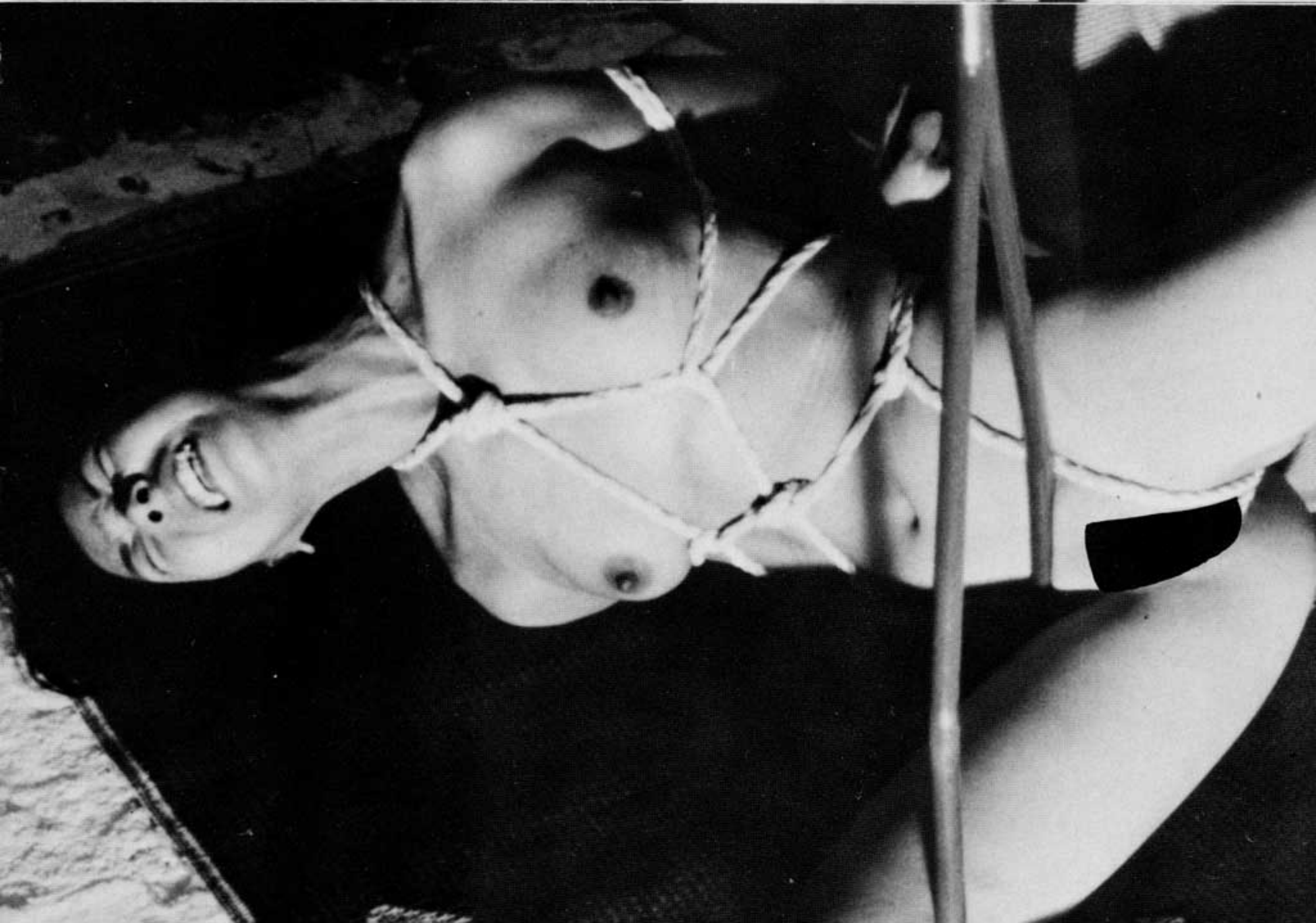








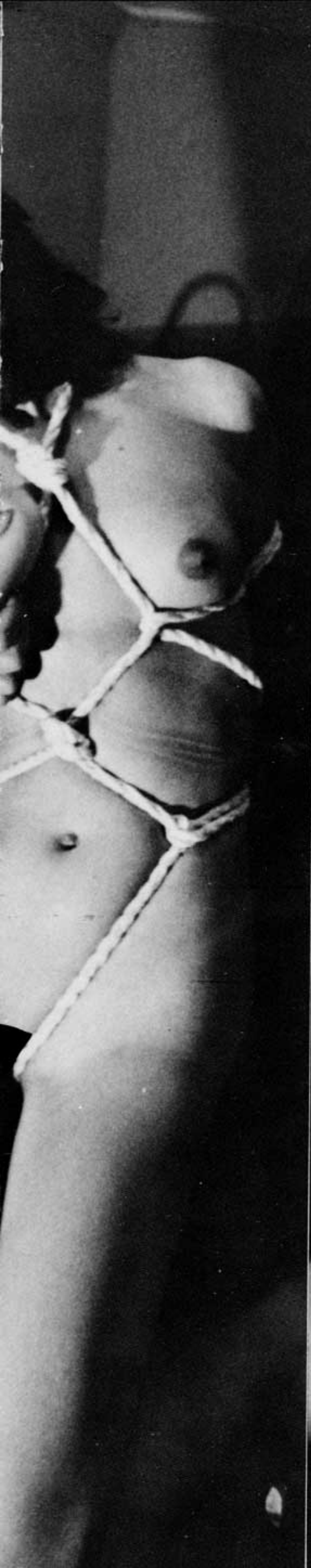
久美子嗜虐











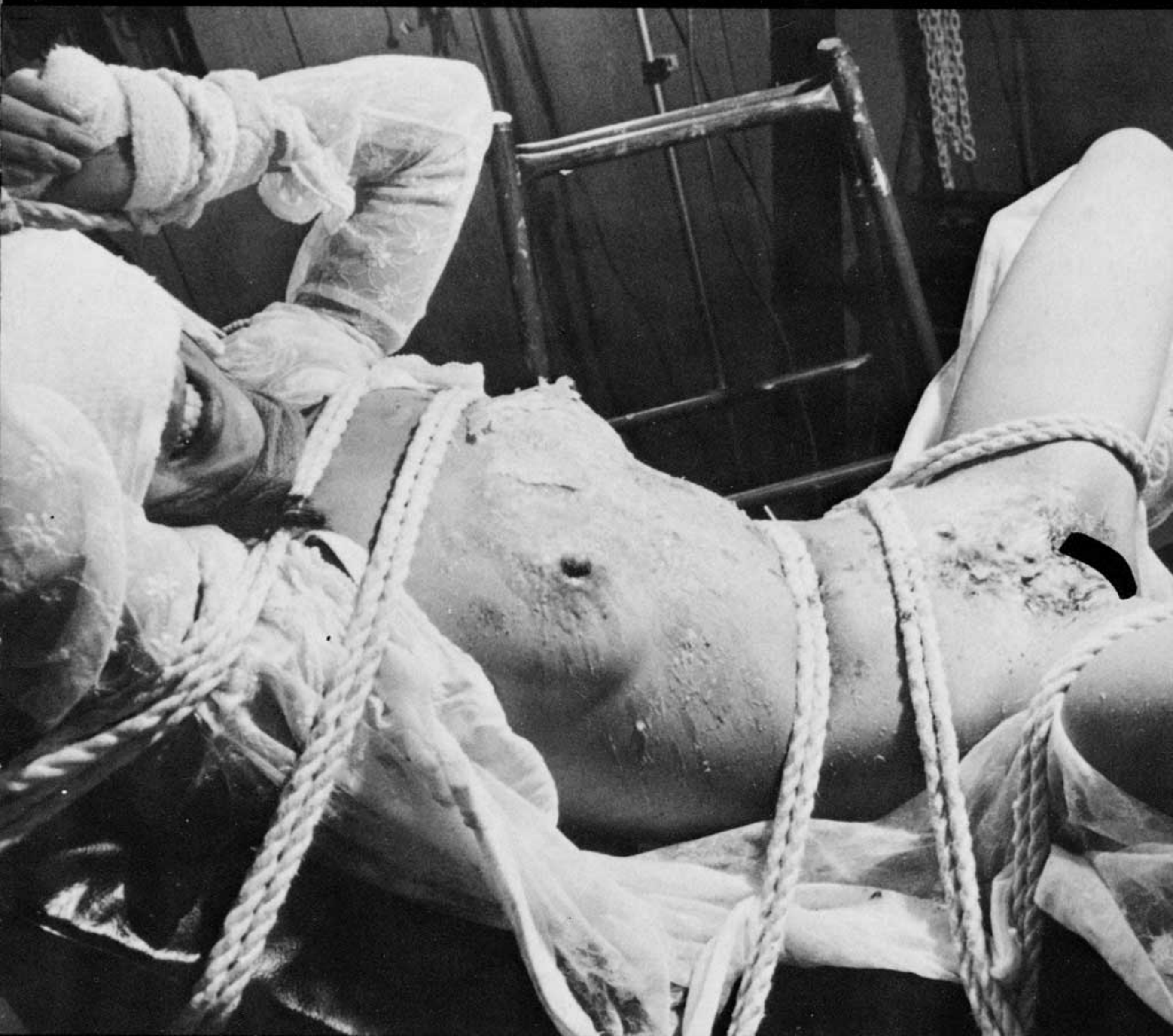






# 炎蠟溶流狂熱地獄

早野久美子果つ











された微温湯が肛門から注入されていく……………







ガラス製500cc浣腸器シリンダー一杯に充填





# 我が性隷晒し妻



投稿 松阪和正















私のオムツプレイメイト

投稿 筒美美佐夫

















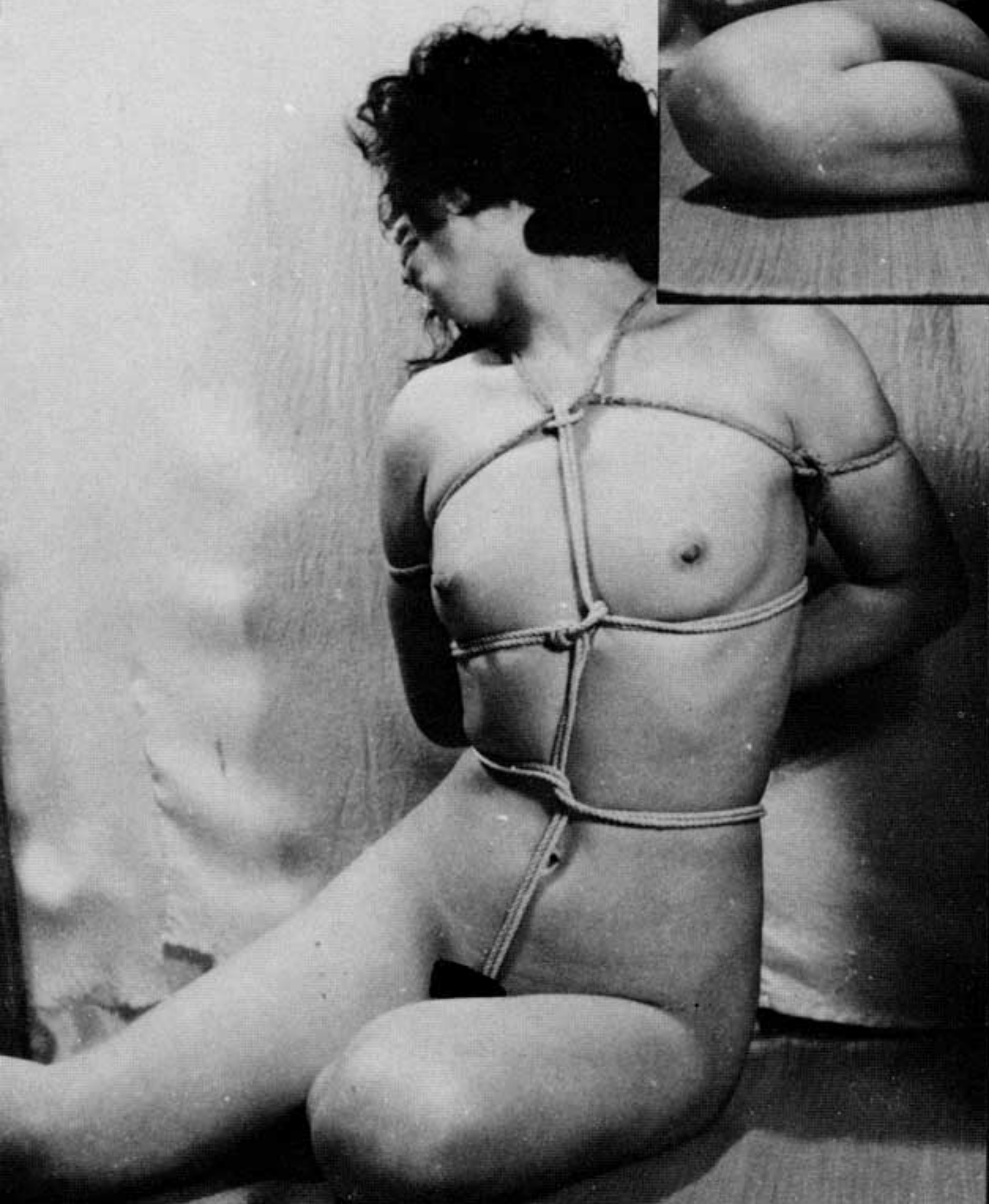








# 縛囚女



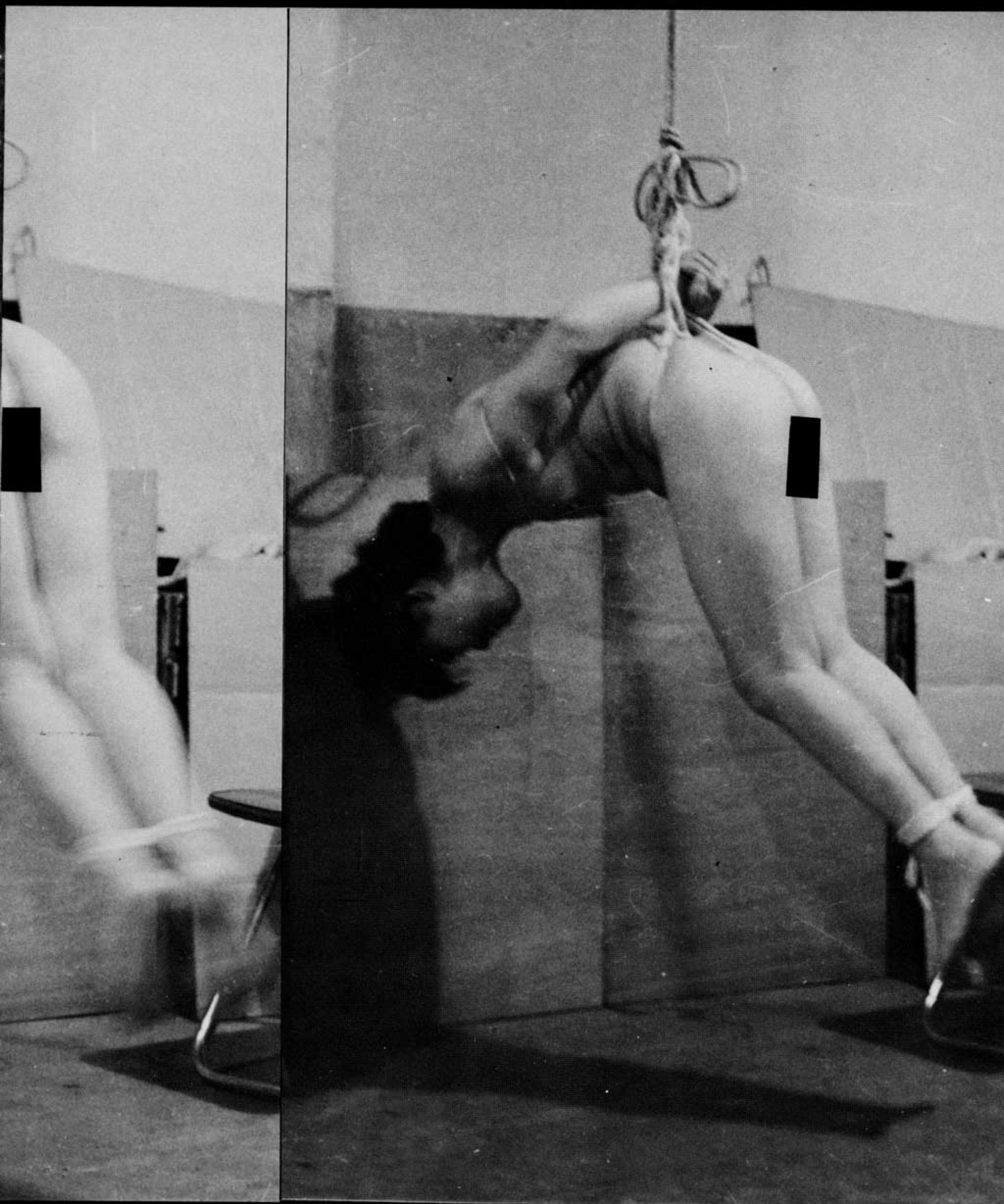
投稿写真

四国・佐渡生









する回し責めの苦しみ





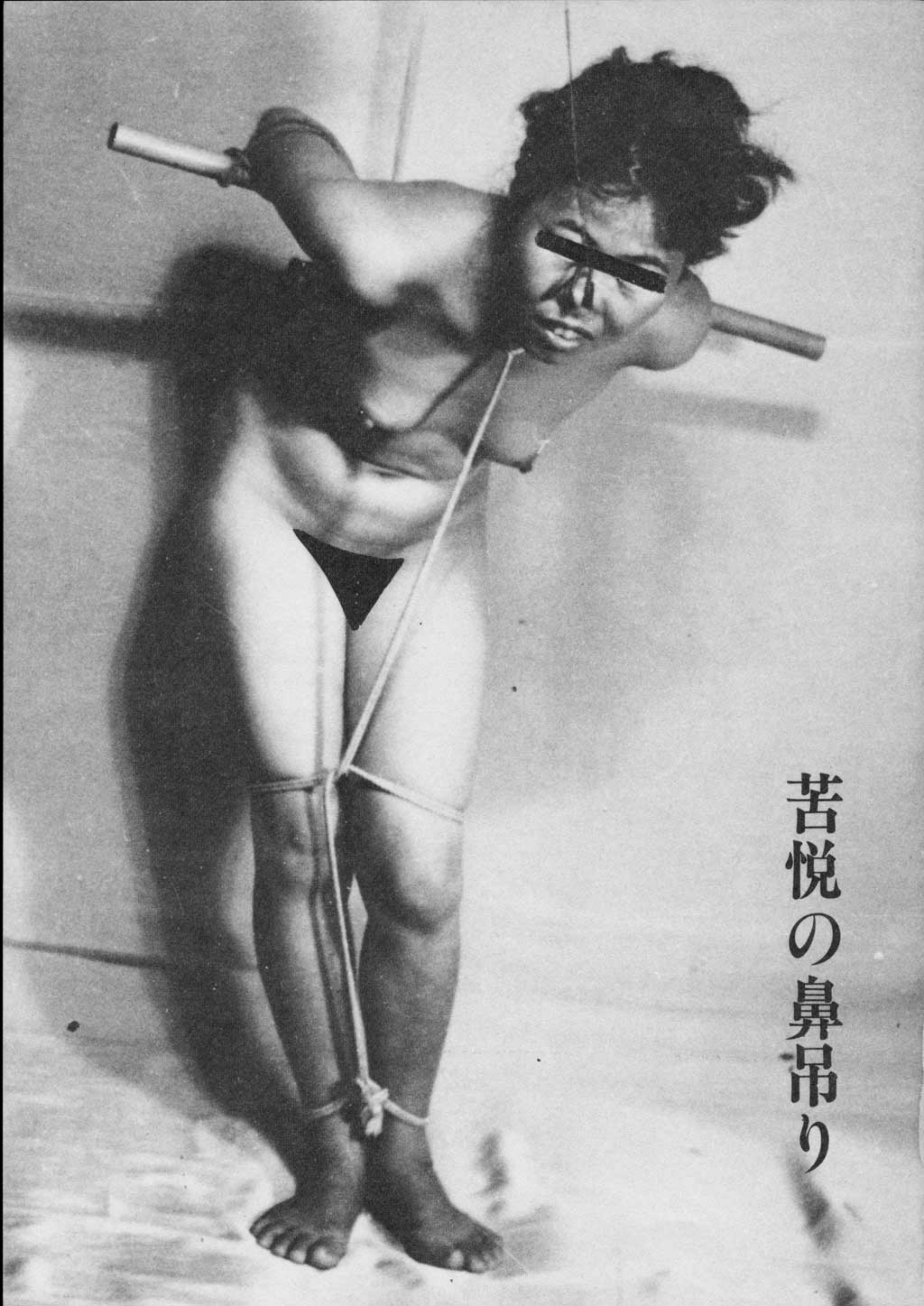
吊られて喰い込む縄の痛みに倍加







苦悦の鼻吊り





# 桃子 (三)

## 秋間塔子

遠雷の音が、次第に近づいて来る。それは夏の始まりであると同時に、二人、それぞれの思いの中で、何かが毀れていく音でもあった。

だが、立ちすくんでいるのは亜矢ひとりで尚文はとても敏速に動きはじめていた。

亜矢は佳乃の貌をながめやっていた。白蠟のようなというにはむしろ青すぎる、肉付きの悪い肢体。労咳を病んだ人間のように落ち

窪んだ眼。背中から腹部にかけて無数の痛々しい鞭の跡。それらを被っている縄目の様々な汚れ。熱蠟や、血や、汗や、得体の知れない粘液に染まって灰褐色にすがれている。

生きた気がしない。亜矢は思った。自分のこれまでの生き方が——ここで死ぬ。元軍人の父に厳しく躰けられた少女時代。一門の栄を背負って学問に励んだ青春時代。それらの輝くばかりの過去の栄光は今や汚濁に染まり

もう跡形もない。これは、私。そう思った。あとは身体。だったら、もう、何をされても良い。なるようになるわ。

そんなふうに思いながら、亜矢は佳乃の亡骸をまじまじとみつめていた。

尚文は縄から佳乃の身体を外すと、肩にかついで小屋を出た。亜矢も衣服をまとうと後について歩きはじめた。

空はかき曇り、雨足はすぐそこまで来てい



た。

佳乃の亡骸は、母屋の奥の仏間に、北枕で横たえられた。尚文は周到に手を打ち、死因は心臓麻痺ということになった。翌日、佳乃の両親も呼び寄せられ、急の出来事に驚いて駆けつけてきた。知らせを受けて京都へ行っていた胤文も令子達をつれて急ぎ帰宅した。

亜矢は最初の夜だけ佳乃の側に居たが、あとは離れにさがっていて、葬儀にも参列しなかった。それは他の使用人も同様であった。

佳乃の葬儀はとても簡素なもので、佳乃の親族七、八人と、胤文夫婦に尚文と令子のみであった。他は誰にも知らされなかった。それでも噂を伝え聞いて、二、三のものが訪ねて来た。佳乃の密葬はこうして何事もなく終わった。

二日、三日、音沙汰もなく、亜矢はひとり離れに居て、季節の移ろいをぼんやりとその眼裏にとらえていた。木洩れ陽が木の幹を照り返しているなど思うのだが、不思議に明るさは感じられなかった。

瞼の奥が熱い。顫顫が疼く。

もう、あんなことはこりこり……と思つてはみても、亜矢の身体の方はそうでもないらしい。身体中が、とりわけ身体を中心部が熱つ

ぽく、けだるい。手をやると、より一層燃えさかる。己が身体の不思議さを呪いながら、いつか亜矢は尚文の訪れを待ちこがれ、自らの身体を汚していた。

ひとつき  
一月も後の事だったろうか。昼間、ひよつ

こり尚文が訪ねて来た。尚文は来るなり亜矢を抱きよせて衣服の裾をめくり、花芯をまさぐりながら言った。

「全て事は終わった。わしがうまくはからつたから、怪しむ者とてなかったわい。だがわしにちよつと思案がある。お前をどうするかだが、他の端女と同じわけにはいくまい。女中頭に据えてやつてもよいが、以前、園の例もあるのではな、世間は疑つてかかるだろう」  
「園さんって、あの、旦那様の奥様おへやさまだった方？」

「そうだ。わしが、最初の妻貴子と、親のいうがままに式をあげたのは、十九の年であった。それから十年間、わしはおとなしゅう貴子と連れ添うていた。その頃は未だふた親とも健在であつたし、何より貴子は気位の高い女であつた。それに、その頃わしは未だ東京に居て、年に幾度しか家にもどらなかつた。つまり、未だ学生だった。帝大を出てからも

未だ二年ほど、家にはもどらなかつた。イギリスへ留学していたのだ。そんなふうだから貴子は嫁に來たというても、かれこれ五年近くも一人で、わしのかわりに親の面倒をみた。小作どものあつかいをしたりしていた。実際、貴子は役人どものあしらいや、小作人どもをうまくおさめるのにかけては、わしよりうまくやったほどだ。わしもほくほく喜んでいた。たまに帰る分には楚々としておとなしいし、容姿ともにあれだけの女はそう生活は、向学心に燃えていた一人の留学生を、獵奇趣味のサディストに変貌させていた。わしは夜な夜な、露地裏の娼婦の豊満な肢体を貪り、縛り、鞭打ち、本能のままに凌辱の限りを尽した。そこにいる女達は誰れも皆従順で愛らしく、わしを満足させてくれた。どんな要求にも喜々として従っていた。男の全てを受け入れ、背負ってくれる、これら娼婦こそ理想の女だ。わしはそう思った。二年間の留学生生活を終えて、家に帰り、貴子との生活をいざ始めてみると、何とも味気ない心地がしてならなかつた。それというのも、貴子は、一見、女のようにも、実はそうではなかつたのだ。」



「女ではない？どういふことですか」

「お前は、ほれ、ここをこうするとうれしうに身を捻るだろうが」

「あれっ、だ、旦那様。アアッ」

「男の手の中で欲びにふるえているのが女というものじゃ。ほれ、このように、男のなすがままに撓い、喘ぎ、妖しく溶けていくのが女というものじゃ。だが、貴子はそうではなかった。性エネルギーのまるでない、というよりは性エネルギーが全て大脳へ昇華するタイプの人間であった。生まれつき人を支配するために在る根っからの貴族だった。あれはわしの前でも、わしとのたった二人きりの寝屋の中でさえも、その優雅な振舞いをくずさうとはしなかった。折りたたんでもまるめこんでも、すぐにピンとはね返るバネのように、仕末に負えないものだった。それでもわしは、なんとか貴子を女にしようと懸命だった。毎日が青息吐息の連続だった。そうこうするうち、三年経ち、四年経っていった。長かった。わしは次第に癪癪持ちの気むづかしい性格に変わっていった。そんなある日、奉公に来てまもない園という端女中が、ささいな粗相をした。しきいにけつまづいて、茶をこぼしてしまったのだ。わしはころがっていた茶碗を

つかむと、園の眉間みけんに向かってなげつけた。

カツとなってついやってしまったのだが、それを見た園は、すっかり恐縮して痛みをこらえながらおどおどと取り乱していた。そんな園をみて、わしは園のなかに貴子にはない女の部分を感じてしまった。その時、園はわずか十六才であった。膝で後退りしながら恐怖の為にひきつった上眼使いの中に、ある種の媚がひそんでいるのを感じたのだ。わしは園の手をひつつかんでこの離れへ連れてくると、衣服を剥ぎ、後ろ手にキリキリと縛り上げて、鞭で打ちすえた。園は悲鳴をあげながらも、決してわしに逆おうとはせず、ただ、わずかに顔をそむけ、時折り、蚊のなくような声で『お許し下さいませ』というばかりだった。

絹を裂くような細かい声、涙に濡れた顔、しかもその顔は女と呼ぶには程遠いまだほんの童顔で、胸のふくらみもようやくそれと解る程度でさすがのわしも少し、痛々しい気がしないでもなかった。だが、耳元でうなる鞭の音は、わしの理性を狂わせた。園の髪をひつつかんで引き摺り回し

『許してほしいか。許してほしければ、そらわしのものを口にふくめ！』と言ひ様、既に熱くそそり立っている男根を、園の口にねじ

りこんだ。『ウグーッ』とうめいて、園は必死にのみ込もうとしているのだが、ともするとのどの奥につかえてしまい、『グウーッ』

と生理的な嘔吐を催して、舌をひきつらせている。必死な中にも従おうとする姿が感じ取れた。様子を見はからっては少し休みながら何度か繰り返した後、わしは園の口中へ熱い液をながしこんだ。次の瞬間、はき出そうとするのをおしとどめて、『のみ込め』といった。すると園は眼を固くつむってゴクンとのみ込んだ。『わしの精液を飲んだな。お前はこれからわしの女になれ。良いな。』そう言うのと、園はこっくりとうなづいた。『何でも言うことをきくな。』……はい、おっしゃるとおり致します。『わしの言うことならどんなことでもきくな！』『はい』『素直だ、それでいい。悪いようにはせん』『では、縄を解いてやろう。自由にしてやろう。うれしいか。ええっ？』『ありがとうございます』息もたえだえになってそう言うのと、園はうつぶせになってくずれていった。これで解放される、という安堵感がそうさせたのだろう。ほっと息をついている。だが、わしの楽しみはこれからだ。わかるだろう？ 亜矢。

「はい、私にしたのと同じことを園さんにも



なされたのですね」

「そうだ。わしはうつぶしている園をしりめ  
に、おもむろに縄の用意をして、もはや物体  
となつてしまった園の、まだ青い果実を、思  
う存分むさぼるためにひき起こした。」

「ああ、もう後生ですからおっしゃらないで  
下さいまし。そんなお話を聞いているだけで、  
亜矢はもう気が変になつてしまいそう」

「その場面を今、ここで思い起こしてみても  
いい。亜矢。」

と、言うなり、尚文は亜矢の手を取つて、  
引き起こした。そら、こうして、と、言いな  
がら、亜矢の身体に縄をかけていった。

「こうして縄をかけていったのだ。まだ十六  
の、胸のふくらみも充分でない娘の身体に縄  
は、生きてゐるが如くしめつけていった。あ  
られもなく股を広げて、女の大秘密の場  
所が全てさらけ出されている格好で足を縛ら  
れ、首をその股の間にさしこまされる、女と  
してはいちばん恥ずかしい姿のまま身動きも  
出来ないでゐる。あまりのことに抵抗すべき  
術も、言葉もなく、園は、苦痛に耐えながら  
大きく見開いた瞳に一筋、二筋、涙をうかべ  
ているばかりだった。園にしてみれば青天の  
霹靂以上のものだったろう。お前はどうか。

こんなふうになされて悲しいか、え」

「いいえ、旦那様。とてもうれしいです」

「そうだろう。わしに可愛いがられているの  
だ。よろこべ、もっと、もっとだ、声をあげ  
て、身をよじつてよろこべ」

「はい、亜矢は、とてもうれしゅうございま  
す。旦那様のお情を感じます。」

尚文は、全裸にされて神妙にうなだれてい  
る亜矢の身体に縄をかけ「菱縄」の形にしめ  
上げていった。一筋、二筋、縄がかけられる  
度に亜矢の理性は失われていく。亜矢の中  
の「女」が浮かび上がってくる。羞恥の心や自  
尊心の類が死に耐えていく。目を閉じる。唇  
をかみしめる。皮膚感覚だけを鋭敏に研ぎ澄  
ます。肉の化身となる。

尚文の手が下腹部の柔かい草の茂みの辺り  
を這うと、亜矢の身体はピクンと反応する。  
尚文は、亜矢の少しほころびかけて赤く潤っ  
ている花芯をおし開き、股縄をかけて強くし  
めつけた。

「アッ、フウーッ」

亜矢は思わずうめいた。うつすらと肌を紅  
に染め少しく眉間を寄せて、苦痛に耐えてい  
る風情は男でなくともゾクツとしてふるえが  
来るほど、妖しく美しかった。

尚文は「縛られた亜矢」を床に横たえたま  
まじいつと見入っていた。亜矢も眼を閉じた  
まま、じつとしていた。死んだもののよう  
に動かなかつた。長い間そうしていた。どれ  
だけの時が経つたろう。亜矢がげんそうに、  
うつすらと片目をあけて見やると、尚文は仁  
王立ちになりながら、何故か泣いているのだ  
つた。

亜矢はびっくりして声をかけた。

「あ、あの旦那様……」

どうなさつたの、と咽喉まで出かかつたと  
ころへ尚文の声がさえぎつた。

「何も言うな！ 亜矢、お前はただ黙つてそこ  
におれば良いのだ。死者のように人の言葉を  
話すな！」

言葉につまつてか、少し声が途切れる。や  
やあって、又、語りはじめた。

「良いか、亜矢。お前はすばらしい女だ。お  
前こそ本当の女だ。わしは今までお前のよう  
な女を探し続けて来た。貴子は妻だが、女で  
はなかつた。わしはあれをついに征服するこ  
とは出来なかつた。あれはわしの元にいた五  
年間ついに処女のままだつた。わしは園を手  
に入れた。そのいきおいである日、貴子を縛  
つたまま犯してやった。そうしたらその夜の



うちに出ていってしまった。わしは貴子を愛していたといえる。だがそれはつりそこねた魚は大きいと思うのと同じ事かもしれん。わしは狂気のように園をほしいまま凌辱した。園は幼なかった。それに素直だった。端た女だという意識もあつたかもしれんが、貴子を犯したいと思うその気持ちを園にぶつけた。わしの汚液を園の口の中へ入れてやった。園は顔をそむけてゲーゲーはいた。縄で縛ったまま浣腸をしてやったりもした。世間態もあつて、わしは園を厨から放して女中頭にすえ、わしの身の回りの世話をするという名目でわしの元に置いた。その実、わしは園の首に縄をつけ、部屋をひき回し、一步も外へ出させることなく、気が向けばあれのAと言わずVと言わずつきまぐった。園は程なく、意識も完全なわしの奴隷となった。園のふるまいは犬と同じものだった。わしの言葉通りに動いた。わしの命令で、ついにはその口で排泄の後仕末までできるようになった。だが、亜矢、わしはそんなに迄して隷属する園をいとは思えなんだ。ふくらみきつた風船の空気がぬけるように、園のあどけなく弾んでいた身体は、わしが手を加えれば加えるほど、しぼんでひからびていったのだ……。」

「お前も知っていよう。あの屋敷裏の小屋。あれはわしが園の為に作らせたものだ。あの中で園は、お前もはいつていたあの檻の中でわしの来るのを待つようになつていった。わしは園に、冬であつても衣服を付けさせなかつた。弱つていた園の身体はちよつとした風邪がもとで労咳を患つてしまった。わしはいましめを解いて衣服を付け、病院へ入院させようとしたが、園はそれをこぼんで、衣服を自らビリビリに引き裂き、こうして死んでも御側に居たいと泣き叫ぶように言つた。その瞬間、わしは園を愛しいと思つた。どんなに責めて責めぬいてもなお耐えてすがりついてくる女、そうでなければわしは愛しいとは思わん。園はやがて病いで死んでしまつたが、あの時の面貌が今も脳裏に焼き付いて離れんのだ。わしは病に犯された園を愛した。寝たきりの園の手を後ろに組ませて縄で縛り、その股の中へ顔を埋めてなめまわり、男根をつきたてた。あれは苦しい、つらいのを忘れられると涙を流しながら歓喜しておつた。誰にも知られず殺されるならいっそ本望だからどうぞ私を殺して下さい。ともいつた。わしはそれ以来、責めはしなかつたが、夜毎、日毎に肌を合わせ続けた。園の身体は次第に冷え

ていつた。そして春を待たずに園は死んでしまった。わしはそれからずいぶん長い間ひとりで居た。誰も居ない小屋の檻の中で終日閉じこもつておつたこともある。再びフラリと旅に出かけたこともある。わしが家を空けていた間に親は亡くなつてしまつていた。わしはたった一人になつてしまつたが、むしろせいせいいしたものだ。園のことは誰にもさげられることはなかつた。

だが、貴子に去られ、親を亡くしてしまつたわしの身を案じて、胤文らが妻をめとることをすすめてくれた。わしはそうした。だが、佳乃は少しも燃えない女だった。従順だが、ただそれだけで、夫に従うのが妻の務めというただそれだけで、わしのどんな責めにも耐えぬいた。耐えるという、その一事において、正に佳乃は希代のM女だった。だが、どんなにわしが責めても責めても、齒をくいしばり、身を硬くして、耐え忍ぶばかりで少しも打ち解けてこない。貴子のように厳として抵抗することはなかつたけれど、わしは貴子に接しているのと同じような空しさを感じておつた。荒縄で縛り、皮の鞭で打ちすえても佳乃は少しもたじろがなかつた。ただ、いわゆる羞恥責めというのか、股を開いたり、花



腔の中へ異物を押しこんだりするのは抵抗を示した。そこでわしは強いて佳乃のいやがる事ばかりをした。佳乃はそんなことをなさる位なら鞭で百遍ぶちのめされた方がましですといった。わしは折れて、そうした。次第にエスカレートしていった、ついにあんな事態になってしまった。責めが佳乃の肉体の限界をこえてしまったのだ。いったい、どうしてこうなるのだろう。わしは女を、愛そうとした。だが、女たちは次々にわしの掌の中からこぼれていってしまう。わしは愛を得たい。地位や名誉にはもうあきあきだ。そんなもののために集まり従う女もたくさんだ。わしはわしのために命をも投げ出して慕ってくれる女がほしいのだ。わしを竹草の当主としてではなく、一人の男として見てくれ、なおかつ命をもいとわぬほどにわしを愛して、身を投げ出してくれる女がほしいのだ。わかるか。亜矢、お前はわしを愛しているか。」

「はい、旦那様。」

「命にかえてもか。」

「はい、命にかえても、」

「佳乃のようになってわしを恨まぬか。」

「はい、恨むどころか、私は園さんと同じ気持ちです。あなた様の為なら、どんなにされ

ても、私は欲びの為にうちふるえていることでしょう。」

「ただの物のように、犬のようにあつかわれませんか。」

「はい、犬のようにされても……。むしろ欲んであなた様の首にじやれついてたわむれているでしょう。」

「わしの汚液をも飲めるか」

「はい」

「便所になるか」

「はい」

「園のように奴隷としてあつかわれても、悲しみはないか。虚しさはないか。」

「はい、あなた様の愛があれば……。それさえあれば……。むしろ殺されることをこそ……」

「死ぬ程にわしに尽くすか」

「はい」

「……そうか」

そう言ったまま、尚文は再び口を嚙み、亜矢に背を向けて暫時何事か思案にくれている態であった。

ややあって、亜矢の方へ向き直った尚文は今までにない優しい声色で亜矢に言った。

「よく判った。わしのやり方もまちがっていたのかもしれない。亜矢、お前は良い女になり

そうだ。わしはお前を大事にしたい。お前もわしについてきてくれ。今日はこれで止めよう。わしに考えがあるのだ。」

そう言うとき、亜矢の身体を抱き起こして、縄を解きはじめた。

「それから、亜矢、お前にひとつ頼みがある。旦那様と呼ぶのはもう止めてくれ。わしはお前を妻にしようと思っている。佳乃は最後まで旦那様と呼んでおったが、わしは好かん。普通の夫婦がいうように名を呼んでくれ、もしくはあなたと、お前、先刻はそういつてくれたな」

「はい、あなた、そう呼びますわ」

「そう、それで良い。それでは亜矢、お前一旦、親元へ帰れ」

「えっ……何故ですの。」

突然の事にびっくりして、亜矢は耳を疑った。思わず問いかけの言葉が口をついて出た。

「何故といつてもな……」

尚文が言いかけようとして皆まで言わぬうちに、亜矢が思いがけない語調の強さでたのみかけた。

「帰れと今さら言われても困ります。何故なら佐伯の娘なら、もうこの世にはいないからです。佐伯の娘はあの日の夜に、そうです、



あなたを始めて受け入れたあの夜に死んでしまいましたわ。ここに居るのは別の女。あなたに首ったけの、肉だけの、裸の女。今朝も私はあなたを思いこがれて、手淫してしまいました。そういう女が、どうして今さら親の前に何くわぬ顔して座ってなぞいられますよう。私はここで死ぬ覚悟して、あなたのお側にいるのですもの。どこへも行きたくありません。」

尚文は身をふるわせながらそういう亜矢を抱きすくめながら、こう言った。

「お前の気持ちは痛いほどよく解る。だが、だからな、このままではいかんのだ。一旦帰さんとな。お前はここへ家庭教師として来ておるのだからな、」

「そんな仕事なぞ、とうの昔に忘れてしまいました。私の頭はあなた様の事で頭がいっぱいで、他の事なぞ入る余地ありませんわ。」

「ま、ま、そこをこらえて、だ。しばらくでよいのだ。拠ろ無い理由でだ、牢屋へでもはいつておると思つてだな、一ト月……ひと月でよい。がまんして、人形のようにになって、親元でくらししてくれ。必ずわしがよいようにはからつてやる」

「牢屋へはいつている、気持ち……」

「そうだ、わしの罪をお前がかぶつてだな牢屋につながれる。ひと月の間。だが、お前は無実だから、やがて、解き放される。と、こういうわけだ。」

「わかりました。私があなた様にかわつて牢屋に閉じ込められるのですね。」

「そうだ、わしの為に……」

「あなた様の為に……」

半ばひとり言のようにつぶやくと、亜矢は自ら身体をかき抱いて、うっとり眉を寄せた。

「私、きつと耐えてみせますわ」

亜矢はそう言うのと静かに微笑んだ。

見上げた空に、晩夏の陽は翳り、薄く広がる雲が重くたれこめていた。昼下がり、とは言つても、午後の時刻をとうに過ぎて薄暮がしのびよる時刻、亜矢はスーツケース一つ片手に、人目をばかるように、竹草家を後にした。西の空に、奇妙な、鉱物破片のような茜雲が二つ、おき忘れられていた。

亜矢の父母は、長い間留守にしていた娘を迎えるには意外に平静な、さりげなさで亜矢を迎えた。

亜矢は、自室にこもりがちで、来る日も来る日も縁側に文机を出し、外の景色をながめやりながら過ごしていた。

秋が、亜矢を変えていったのか、じきに亜矢は本来のメランコリックな自分自身をとりもどしていった。

何が私をあんなに昂揚させたのか、——ひと月も経った頃にはようやく、「あの二年間」

の出来事を反芻してみる勇氣というか氣力のようなものが亜矢の心中にも生じてきていた。

二年前、はじめて竹草家を訪れた頃、そしてあの夜の出来事。佳乃の死。令子。——いったい竹草尚文とは何なのだろう。……私にとって……私にとって？ 私にとってと考えるほど、あの方は私にとって意味のある存在なのだろうか。……そう、おそらくは生涯、忘れ得ぬ程に。何故ならあの方は、過去のどんな出来事にも、女人にもかかわらず私を必要としてくれており、私の特性を理解してくれている。他の人とは違うあつかいをして下さる。私は特別の存在なのだわ、あの方にとって。だから、私との愛の行為も、世に又もない希有なものでなければならぬと思つていらつしやるのだ。私が、私の肉体をなくし、自我を亡くし、氣配だけになってあの方によ



りそう時、あの方は身体にまわりつく邪魔  
つけない世のしがらみを払拭し、純粹な精神と  
なつて私の氣配と交錯することが出来る。

その為に、私の肉体を縛り、鞭打つ。私の  
肉体は汚れたこの世のしがらみ、……至高の  
愛をこそめざすべきなのだわ。私はあの方を、  
精神世界で愛することが出来る。あの方は、  
その世界の、ただ一人の人。――

亜矢はそう思った。ひと息、息をする、そ  
の息の氣配と同じ位、尚文への思いが自分の  
体臭に染みついて濃厚に感じられるのだった。

秋も過ぎて、冬最中。十二月初旬の雪の日  
に、亜矢は再び竹草家の門をくぐった。白無  
垢の裃姿でうつむきがちなその様子は清純  
を絵に描いたようであった。

だが、列席した令子の眼は何故か鋭かった。  
令子はその年十四になっていた。十一の年に  
初めて会って以来、とてもなついていてくれ  
たことを思い、亜矢はいぶかしく思ったが、  
式の緊張感に粉れて、気にかけることなく過  
ぎていった。

式は三日三晩続いた。否、続いていたのだ  
ろう。式が終わって酒盛りが始ってから、三  
日の間、亜矢は打掛姿のまま控えの間にいて、

介添の者が来ると席をたつて挨拶に出るとい  
う動作をくり返した。その間、一睡も出来ず、  
四日目の朝、平素の着物に着替えて客を送り  
出した後は、ふらふらになって立っていられ  
ない程だった。介添の者が、終わりましたの  
で、少し離れでお休み下さい、といったのを  
汐に、一札をして離れに引き下がり、くずれ  
るように身体を横たえた亜矢は、そのまま翌  
日の朝まで眼を覚ますことなく寝入ってしま  
った。

翌朝、眼を覚ました亜矢は、念入りに化粧  
をして、尚文の来るのを待った。だが、その  
日、ついに尚文はやって来なかった。次の日、  
やはり昼すぎまで待っても尚文は来ない。母  
屋の方へ行ってみようかしら、と亜矢は思っ  
た。だが、言いようのない倦怠の心が禍いし  
て、そのまま離れにとどまった。

だが、次の日も、その次の日も尚文は来な  
かった。式をあげて十日目の朝になって亜矢  
は、意を決して、着替えをし、化粧を念入り  
にすませると、母屋へ向った。

母屋では尚文と令子が並んで朝食を取って  
いるところだった。亜矢は、この一週間一人  
で食事をしていたことを思いながら、間の悪  
い時に来たのかどうかを確かめようとして、

二人に声をかけた。

「おはようございます。だ……旦那様。おはよ  
うございます。令子さん。御食事中でしたの。  
失礼じゃなかったかしら。少しお話ししたか  
ったものだから……」

尚文が何も言わぬ間に、令子が箸を置いて  
高笑いしながら言った。

「あーらお母様、おはようございます。ずい  
分長くお休みでしたこと。六日も寝ていらし  
たのでは、お顔がむくみやしませんこと。」

しばらくして尚文が女中を呼んで言った。  
「亜矢のをこちらへ運ばせなさい。」

それを聞きつけて、令子がまた口をはさん  
だ。

「あーら、お母様が私達と一緒に食事なさ  
るんですって。私はまたお母様は私共と顔を  
合わせるのをおきらいなすってるとばかり思  
っていましたわ。ねえお母様、令子と一緒に  
お食事なんかなさるの、気づまりでおいやな  
んじゃなくって。」

「あらそんなことなくってよ。私、令子さん  
と早く以前のようによくお話しできるよう  
になればいいと思っていましたもの。一緒に  
お食事が出来るなんてとてもうれしいわ。」

亜矢がそう言うと、令子は眼をきらきらさ



せながら、声色だけは平静をよそおって、つきさすように言った。

「まあそうですわ。でもおかしいわ。私、今までお父様と二人きりで起伏おきふししてありましたのよ。お母様は嫉妬深い方だから、佳乃母様のようには私も殺されかねませんものね。きつと取り入って私を油断させといいて安心しきつたところを殺そうというおつもりなのかしら。おお桑原く。」

え!と、亜矢が驚きの声をあげるのと、令子!!と尚文が怒るのとほとんど同時であった。

令子が撫然とした面持ちで言う。

「お気にさわったなら、ごめんなさい。でも凶星でしょうよ!」

亜矢は顔面から血の気が引くような気がした。背筋がわなわなふるえはじめた。

その時、女中の一人が亜矢の膳を運んできた。心なしか女中のそぶりも冷たいもののように感じられる。亜矢は下を向いて唇をかみしめ、箸を取る気にもなれず、こらえていた。だが、ややあつて顔を上げ、微笑さえ浮かべながら、令子に向かって声かけた。

「令子さんは、何か感違いをなすっていらっしやるようね。佳乃さんは御病気でお亡くなりになったのよ。私のせいなどでは毛頭あり

ませんわ。まして私が殺したなどと。そんなふうには思っていないしやつたのでは、いつまでたつても私達仲良くなれませんわよ。私達これから親子になったのですもの。本当の親子以上に仲良くしていきたいでしょうよ。ですからそんな誤解を、もうなさらないで。」

すると令子は、初めて憎しみの感情をあらわにして、激しい口調で叫びたてた。

「何よ。以前は奥様くと言つてたくせにまあ今は『佳乃さん』ですって? いけずうずうしい。盗つ人ただけしいとはあなたのような人のことをいうのね。私はあなたと親子なんかになりたくないわ。私、はっきり覚えていることよ。あなたは家へ来てしばらくするとじきにお父様に妙になれなれしくしていたことよ。あなたは私やお母様からお父様を盗んだのよ。お母様だつて知つてらしたわ。時折憂鬱そうに溜息ついていらしたのを私、いつも気にかけて見ていたものよ。二年もの間、あなたは私やお母様をだまし続けて、とうとうこの夏、お母様が邪魔になつたあなたは私をだまして他へやつておいてから、お父様の目をかすめて、ちよつとのすきにお母様を殺してしまつたのよ。そうに違いないわ。お父様はご存知ないのよ。あなたにすっかりたぶ

らかされているのですもの。私もすっかりだまされてたわ。一見優しそうなあなたのうわべにだまされて、実の姉のように思つていた私、ほんとにバカだつたことよ。今思い返すだけで、くやしくて涙が出るわ。私、お母様が好きだつたのよ。本当のお母様じゃなかつたけれど、実の親以上によくして下すつたわ。それなのにあなたは、そのお母様を、殺したのよ!」

真実を言つて令子の誤解を解きたい、けれど真実を言えば尚文に迷惑をかけることになる——亜矢はじつと唇をかみしめてこらえた。尚文もうつむいたまま何も言わなかつた。それを見た令子は図に乗つて更に容赦なく追い打ちをかけてくる。

「ねえ、それで今度は竹草の正妻でございましてという顔して恥ずかしくもなく白無垢など着込んで、よくまあ家の門がくぐれたわね。お母様は今だにこの家にいらつしやるのよ。あなたの後ろにいらつしやるかもしれないのよ。よくこれたわね。おまけに家へ来てから何一つ家のことをしもしないで、離れに閉じこもつたきり。そんな奥様など、あると思うの。」

令子の口舌は未だ未だ際限もなく続くかに



「もう いい、令子。もう言うな。わしが悪かったのだ。黙っていることは、亜矢を落とすし込めることになるとは思わなかったのだ。」

令子、お前は園を知っているか」

「園というのは、な、わしが佳乃と一緒に  
る前にしばらく暮らしておった女だ。一緒に  
暮らすということが、男と女と一緒に暮らす

「.....？」

界へ、これから行くのではないか。」

尚文はそう言つと、怪訝そうに小首かしげ  
ている令子をせきたて、亜矢をともなつて、  
例の小屋の方へ歩いていった。木立ちをかき  
わけ、屋敷の裏手に回ると、池の向こうの更  
にうっそうと茂っている林にわけいって目ざ  
す小屋の扉前にきた。

「いいえ、こんな小屋があることなど、今まで気がつきませんでしたわ。」

「これはわしが園の為に建てたものだ。園はここでわしと暮らした。死ぬ直前までこの中に居た。」

そう言いながら、小屋の戸をあけた。令子  
は小屋の中へ一歩入って、啞然とした。

「お父様、これは……」

「責め道具だ。男が女を責めるありとあらゆる道具のコレクションだ。壁にかかっているものもある。棚に並べてあるものもある。このように、天井から吊り下げてある太い鎖や滑車もある。鞭、縄、針、何でもある。園はな、そして佳乃もだ、亜矢もそうだ。こうして……」

と言いつつ、亜矢の身体に手をかけ、話しながら、いきなりくるくると帯を解いて着物を脱がせ、濡粋姿の上から縄をかけていった。

「縛られながら……こうして鞭打たれながら、ほら、ここが女のほどだ。ここを熱く濡らして歓びにふるえながら男のそそりたつものをくわえこむのだ。ほら、こうして……」

尚文は自らの既にたくましくなっているものを引きずり出し、令子に見せつけるように



しながら、亜矢の花芯につき立てた。

「あつ、あなた……令子さんが、令子さんが見ていらっしやるのに……後生ですからやめて下さいまし。二人だけの時でしたら、どんな御命令でも従いますう。でも令子さんの前でなさるのだけはやめて……」

「いやあーっ！」

亜矢が皆まで言い終わらないうちに、令子はそのすごい悲鳴をあげて両手で顔を被った。

「いやっ。いやあつ。やめて、やめてよ。」

無意味にいやいやを繰り返しながら、まるで駄々っ子のように泣きじやくりながら令子は顔を真赤に染めながらすわり込んでしまっていた。

尚文はなおもみだらに腰をつかいながら、「令子、ほれ見ろ。このように佳乃もされていたのだ。このように縄をかけられてな。わしは園を佳乃を、思うさま責め、いたぶった。こうしてな。」

亜矢の襦袢を引き裂いた。二つの乳房があらわになった。襦袢の裾もからげてしまった。恥毛が、そしてその奥のものがすっかりあらさまになった。尚文は乳房をもみしだき、その恥毛の下を指でかき回した。それからつきとばすように横にさせ、足も縛ってしま

ローソクに火をつけた。あつい涙蠟を手に亜矢の背に切りつけるようにふりかけながら

「このように責めた。又、こうして鞭打った。責めて、責めて、責めぬいて、そうして二人とも死んでいったのだ。亜矢のせいでは決してない。わしが殺したのだ。亜矢はむしろわしにこうして毎夜責められていたのだ。わかるか、令子。」

亜矢は「ヒイツ」という絹を裂くような悲鳴をあげていた。

令子は次第に顔を被ったその指のすき間からのぞくようにしながら、ふるえる声でしゃくり上げながら尚文に言った。

「お父様、どうしてそんな、そんな恐いことをなさるの。令子ももう十四。男と女のすること位、おぼろげながら判ります。でも私、やさしく抱き合っているのが愛することだと思ひますのに……。お父様はお母様を、また……。その亜矢さんを、愛してはいないのですか。」

「愛しているよ。愛しているから、いとしいと思うから、こうするのだよ。」

「解りません……。いやです。お母様が……。それに亜矢さんがかわいそうです。」

「お前は亜矢が憎いのではなかったのか。」

「ええ、憎い。憎いわ。お父様を私からうばったのですもの。例えお母様を殺したのではなかったにしても、私の大好きなお父様の心をひとり召めにしているのですもの。憎らしいったらないわ。」

「でもお前は亜矢を好きだったろう。それなのに亜矢はお前一人をではなくこのわしもむしろわしをこそ一等愛しているのだと知って、愛が憎悪に変わったのだらう。それは愛のうらがえしなのだ。お前の亜矢に対する憎悪はいつでも愛にとって代わる性質のものなのだよ。」

尚文は静かにさすように令子に言ってきた。だが令子は首を横にふって言った。

「いいえ、憎い、憎いわ。どうしたって憎いわよ。私の信賴を裏切ったのですもの。」

「そんなに憎いか。亜矢はここにこうしてこんな不様な格好で横たわっているだけだというのに……。では令子、お前の心のままに、この憎い亜矢の身体を思うさま打ちのめしてみるのがいい。」

「ええっ……。私が？」

「そうだ、この鞭をこうしてふるってみよ。そうすれば、ここにいる亜矢がお前の思っている、憎いと思っている亜矢とは別の生物で



あるのに気付くだろう。さあ……」

令子は恐る恐る鞭をうけとった。しばらくためらっている風に、自分の手の中の皮製の黒光りしている物をじっとみすえていた。

やにわに、ヒュンと音たてて一振り空を打つてみた。それから横たわっている亜矢の半裸の姿をみおろした。瞳の奥でキラッと閃光が走った。

「これっ、この盗人猫、黙ってないでニヤンとかいっておなきっ」

ビシッと音がして亜矢のわき腹に鞭がはいった。

「クウーッ」

と、うめいて、耐えていたが、たて続けに三度四度鞭で打ちすえられ、

「さあ、猫なら猫らしく、四つん這いになってお歩き、ニヤーンと猫らしくないておみせたら」

「れ、令子さん……」

「お嬢さまとお言い。失礼な」

「お、お嬢さま……」

「何よっ、早く四つん這いにお歩きっ」

「は、はいっ、お嬢さま。おっしゃる通りに致します。亜矢は猫になればよいのですね。」

私はお嬢さまのおっしゃることでしたら何で

も御命令に従いますよ。可愛がって下さいましね。ほら四つん這いに歩きましょう。ニヤ

ーン、もっと？ニヤーン……ニヤーン。猫みたいに見えます？ああ、私は小猫、あなたを恋しがって身もだえしている秋扇という名の猫。お情をほしいあまりに、どんな芸でもしてみせますわ。私がほしいのはお嬢さま。あなた様の思いやり。もっとなきましようか。ほらニヤーン、ニヤーン……ニヤアアン……」

「フン。私の言うことは何でも聞くというの。じゃあ、馬のようになって私を背にのせ部屋中を回っておみせ」

「はいお嬢さま。」

「もっとちゃんとゆらさないようにお歩き。」

「はいお嬢さま」

「もっと、もっとよ」

令子は言い様、手にした鞭でバシッと亜矢の尻を打ちすえる。

「ウグーッ」と思わず顔をしかめて耐える。

尚文が側から声をかける。

「令子、もっと気のすむまで鞭打ってごらん。そう、一定のリズムを持って、初めはおさえて、段々強く、もっと強く、そうだ。どんな感じがする？」

「なんだか、この女、縛られているにもかか

わらず、鞭打つ度に、鞭の先にすがりついて来るような、そんな感じが致します。まるで私の身体にすがりついてくるようで、気味の悪い気がします。いったいこの女は打ちすえる度に悲鳴をあげてはいますが本当に痛いのでしょうか。まるで楽しんでいるような……」

「そうだ、このようにうっとりとして、お前の愛撫に酔いしれておるのだ。亜矢が先刻言っていたらう。『私は貴女の情が欲しい』のだと。亜矢はだから、お前のくれるものは全してお前の思いやりだと思いい入んでいる。お前の憎悪から出る鞭も、亜矢にとっては優しい愛撫の手なのだ。だからどんな仕打ちにもあまんじて身をさらし、受け入れる。わしとの愛も、つまりそういう愛だ。思い入れが強い強すぎるのだ、とでも言おうか。わしの全てのしうちが、愛の故だと思いい入っている。だから、全てを受け入れる。それが女というものだ。みていろよ、令子」

尚文はそう言うのと、うなづく令子をそこに残して、亜矢の身体を引き起こした。

「さあ、立て、亜矢。よいな」

「はい、旦那様、どのようにでもなさって下さいまし。」

一旦かけた縄を外し、まもっていた襦袢を



いなかった亜矢に力をたくわえさせ、それから更に尚文は様々な責めをくり広げていった。

尚文は縛りの様々な型を展開して行き、その合い間に、あろうことか令子を見ている前で放尿シーンや浣腸シーンをも亜矢に強いた。これにはさすがの亜矢も抵抗せざるを得ない。だが尚文の鞭は、亜矢の最後の羞恥をも放棄させていった。

浣腸されて、洗面器の中に汚物を排泄しながら亜矢はポツリとつぶやいた。

「……ああ、こんな、浣腸までされて、私だけしかない恥ずかしい姿を、一番いい人に見られているのだわ。こんな姿をあなたの方は良しと、いといいと、美しいと、言っ

て下さるのかしら。」  
亜矢の脳裏には、もう令子の姿は映っていなかった。ひたすら尚文のこのみあるのだった。この身は縄に縛られていても、幻影の尚文を追い求め、追いつき、つかんで放さぬ息ごみであらゆる責めにむしろ進んで向かっていった。最早、亜矢には恥ずべきことなどなくなっていた。顔を横ざまになぐられこづかれても、それがかえってうれしかった。尚文の放出する精液をおいしそうに飲み干した。そして更に、他の液をも……。亜矢に

とつてもうどちらも区別がつかないのだった。それほどに、嗜虐への耽溺は深まっていた。

身体中に愛液を塗りたくられ、針でちくちくとさしつらぬかれた。時に深く刺されて、ほんの少し血が滲んだ。

「ああーあ！」

突然、亜矢は感に耐えぬように喘ぎはじめた。

「お願い、どうにかして、つらいわ、苦しいのよ。何が何だか解らないわ。気が狂いそう。どうにかして、死にそうよ。もう引導をわたしてしまっ

て下さいな。お願い。あなたのもので、私を思いきり引き裂いてしまっ

て、私を思いのままにして、おしつぶして！ お願い、お願いよ、ああっ！」

尚文は、そんな亜矢の様子を見て、おもむろに縄をほどきはじめた。ゆっくりと床におろすと、蠟でふさがれていたその部分をパリパリとはがし、しばらく指でさすって、それから赤く濡れそぼっているところをかき回した。

亜矢は悦楽の叫び声をあげた。

「ああっ！あなた、あなた、来て、来て」

気狂いのように興奮し、求める亜矢に尚文はのしかかり、己の熱い笏杖をすっぱりとう

めこんだ。そして四方八方はね回るように腰を旋回しているうちに、ついに二人とも頂点に達し、耐えきれずにばったりと倒れてしま

い、そのまま寝穢く、寝込んでしまった。

傍らで、令子独り、眼を剥き、口から泡を吹いて、佇んでいた。

令子是一部始終を見ていた。二人が寄り添うようにして寝込んでからもなお、じつとみすえているのだった。令子はたつたまま動かない。

どれだけの時が経ったろう。令子は何事かわめいたと思うと、二人の側へかけより、亜矢の身体をけとばし、おしのけ、自ら衣服をかなぐりすてて、尚文の傍らに横たわると、小さく萎えてしまった物を自分の手の中にいれて、愛撫した。それはじきに大きく固く、ふくれあがって来た。かと思うと令子はそれを自らの秘所に一生懸命のみ込もうとした。令子の花芯は未だ小さく、ようやくこのごろ恥毛がはえそろったばかりであった。仲々入らぬのも道理である。令子が四苦八苦しているにもかかわらず尚文はついぞ眼が覚めない。そうこくするうち、とうとうその大きなものがすっぱりと令子の中に納まってしまった。



脱がせて、手を前に出させた。両手首を太縄で手錠のようにぐるぐる巻きに締めつけ、縄尻を持って引きずりまわしたあげく、それを傍らの柱に手首だけ固定して縛りつけた。手首の他は一切縄をまといていない。亜矢にはそれが返って異様に感じられ、身のおきどころもないようないたたまれない思いをさそうのだった。

「さあ、足をもっとよく開くのだ。お前の自慢のものを、もっとわしによく見せてくれ。さあ。」

「お許し下さい、恥ずかしい。」

「出来ないのかね。ではこうしたら出来るようになるだろう。」

尚文はいっぱいにたまっている蠟をビシャツと亜矢の腹部にあびせかけた。「ウツ」と押し殺した呻き声がもれる。

「未だ開かないかね。ではもう少しやろうかね。」

などと言いつつ、喉から乳頭へ乳頭から乳房全体へ、それから腹部へ、若草の茂みの中へ、花の奥へ、熱蠟が次々に襲いかかっているのをニヤニヤしながらながめている。

「どうだ、つらいか」

「ツライワ、トテモ、ツライワ」

「ではもっと足を広げなさい」  
「ハ、ハイ……」

亜矢は自ら股を大きく広げて乱らなポーズを取る。咲きはこる花のように赤い口を広げて花芯の中まで見えている。尚文はその部分にことさらに赤い蠟をしたたらせる。「ツウーッ」熱さに耐えかねて、身をよじっているうちに身体が逆さまになってしまった。その背中へも尚文は容赦なく蠟をあびせかける。

「ヒイーッ」足をバタバタさせはじめた。尚文はその足を左右にひっぱり、結わえつけてしまう。もうこれで身動きがとれない。ひとしきり蠟の雨を降らせ、充分堪能した後今度は鞭で打ちすすめる。グツタリとして幾分正気を失いかけた頃、足と柱の縄をほいて小休止したが、縄手錠だけはかけたままで、床にころがされた。そうしておいて今度は、縄尻を鴨居に吊り下げてひっぱり、両足を斜め上にひき上げ、大の字に結わえられた。

奇妙な恰好で吊り下げられた亜矢はその女陰に様々な異物をおしこめられ、果ては美しい薔薇の造花をつきさされてしまった。

「美しい、美しいぞ、どんな名画よりも美しい。清水も有田も志乃も、どんな名高い焼物も、生きた女体の花瓶の美しさにはかなうま

いて。なあ、亜矢。お前の姿態をそっくりうつす鏡があったらな、お前に見せてやりたいのだが、お前の白い肌と太い黒い縄、それに真赤な薔薇のコントラスト……仕上げに美しいスポットライトをあててやろうな」  
そう言い様、火のついた蠟燭を亜矢の口にくわえさせた。

蠟燭の灯はゆらゆらとゆれて、かわりはてた亜矢の顔に微妙な陰翳を作り出した。

亜矢はもう浅ましいほどに唇をふるわせ、口端から唾液がしたたるのをぬぐうことも出さず、汗と蠟と愛液とで秘所をぐしょぐしょに濡らしながら、必死にこの獣のような吊り責めに耐えていた。

吊り下げられてどれだけの時が経ったろう。あるいはそんなには経っていないかったのかもしれぬ。ようやく解き放たれて床に放置された亜矢は、しばらくすると意識を取りもどし、疲れた身体を横たえてぐったりとしていた。

ところが、それで終わりかと思っていたらとんでもない。むしろ亜矢にとって本当の試練はこれからなのだった。

しばらく休んで亜矢の体力が回復したと見ると、呆然とつたつて見ていた令子を使い、にやうて食物を運んでこさせ、朝食も食べて



令子は苦痛に顔をゆがめながら歓喜のあまり「ウォーッ」と吠え声をあげたのであった。

— 続 —

小説「桃子」も佳境に入り、秋間塔子女史のM女性としての実体験を加え、只の空想小説にない「実感」を随所に見ることができま

す。  
亜矢の数奇な運命、出会いが「愛」を覚え  
そして、別の「女」を内から誕生させます。  
次号を御期待下さい。

## 読者原稿募集

### ★体験・告白手記

実践家のみならず、本誌内容にふさわしい体験・経験をなさった方、読者の皆様の偽りなき真実の告白手記をお寄せ下さい。文の稚拙等は問いません。

### ★映画・演劇・雑誌感想

映画・演劇を鑑賞し、雑誌を読み、特に興味を持ち、関心を引いた場面等についての感想をお寄せ下さい。但し、何を見、何を読んだのか、出处については必ず明記願います。

### ★アイデア・提言

本誌に将来企画して欲しい事項について、内容を具体的に記したものをお寄せください。また、独自のアイデアをお持ちの方もそのアイデアを具体的に書いてお寄せ下さい。

### ★カット・イラスト

本誌にふさわしい図柄であれば、内容の如何を問いません。荒唐無稽、奇抜なイメージ画でも歓迎します。

### ★写真

自作の写真をお寄せ下さい。写真の映り、ピントの甘いものでも結構です。カラー、白黒、リバーサルを問いません。但し、盗作、複写等の自作の写真はお断わり致します。未現像フィルムのみまでも結構です。弊社にて実費で現像し、御返送します。但し、その写真に関する簡単な説明を必ず附記して下さい。

### ★読者風信

皆様の為の気軽なサロンとして御利用下さい。本誌掲載内容についての御意見、御要望等でも結構です。読者風信を通じての読者交流のお手伝いも致します。

★読者風信への投稿を除く皆さまから寄せられた原稿に関しては、弊社特写の写真を洩れなく贈呈致します。但し、寄せられた原稿内容に応じての増減はあります。

※写真贈呈が不必要な方は、その旨をお書き添え下さい。



実践

# 縄縛術

②

白河 壮

## 立菱縄

前号で志摩紫光氏が、比較的簡単に縛ることができ、長時間そのまま放置可能な縛り方を紹介されていた。それに刺激されたというわけでもないが、私好みの縛り方も知っていたかどうかと考え、実践縄縛術の二回目は私に担当させていただいた。

この立菱縄もそう難しい縄掛けではないので、実践されてみては如何だろう。





縄の長さは八メートル程あればよく。それを真ん中から二つ折りつまり、二本の縄にする。まず、両手を後ろで交差させ、そこに縄を通し、一卷きする。やや肩口に引き上げ気味にして縄を首にまわし、後手に交差させたところまで縄を下ろす。そこで更に手首へ縄をまわして増締めし、固定する。

固定し終えた縄を写真のように外側から、右上腕部にまわし、腋の下をくぐらせる。

腕にまわした縄の位置だが、縛りの経験が少ない方は、何処に縄を掛け、締めようと関係無い———そう思われているようだ。実際には大違いで、筋肉の上に掛けたり関節部に喰い込む縄の勢いに任せての縛りは、事故の因になる。





右上腕部に掛けた縄と同位置に縄掛けをする。左上腕部の外側から縄をまわし、腋の下を通した縄は肩甲骨の下辺りのところで交差させ、両腕を背の方向へ引き絞るような形で縄を締める。これだけで縄を結び終えてしまってもおかしくはないが、立菱縄にはならない。写真を見て下されば、縄の流れがおわかりいただけよう。

肩甲骨で結んだ縄を垂直に下ろし、尻の割れ目に喰いこませ、股間をくぐらせて臍の上、双の乳房の真ん中を通し、首にかかっている縄につなげる。まだ、この段階では、縄に力を入れて引く必要はない。

首の縄につなげた縄は、ここで左右一本ずつの縄に分け、左右の乳房の上を通して背にまわす。





背にまわした繩は肩甲骨の下でひと巻きし、両脇腹のところを通して体の前にもってきて、臍の上を通っている二本の繩を左右に分けて引っ張る。左右に分けて引っ張ることにより、股間への喰い込みをより強めることができる。これで立菱繩ができ上がったことになる。後は、余った繩を結べばよい。

それを後ろから見ると上記の写真のような繩の形になる。  
繩のバランスは左右対象の図柄よりしくならざるを得ない。相互の繩が均衡を保ち、且つ、効果的な締め具合を保持することによって緊縛感をかもし出すことになるようだ。やはり片寄った繩掛けは、筋や筋肉を痛めることにもなるので注意をしたい。





# 本 縄

今度紹介するのは、江戸時代の罪人によく見られた「本縄」と呼ばれる縛り方である。

菱縄に似た縛りだが、前述の立菱縄のように、菱はひとつだけで簡素な縛りに見えるが、ポイントを押さえた実効率の高い縄掛けといえる。

使う縄の長さは九メートルのもの。それを真ん中から二つ折りにし、女の前から首に掛け、結び目をひとつ作る。位置は胸元辺りとし、続いて臍の直ぐ下辺りにもうひとつの結び目をつくる。小さな菱がいくつも欲しい時は、この結び目の間隔を狭め、いくつもつくれば、小菱がそれに応じてできることになる。



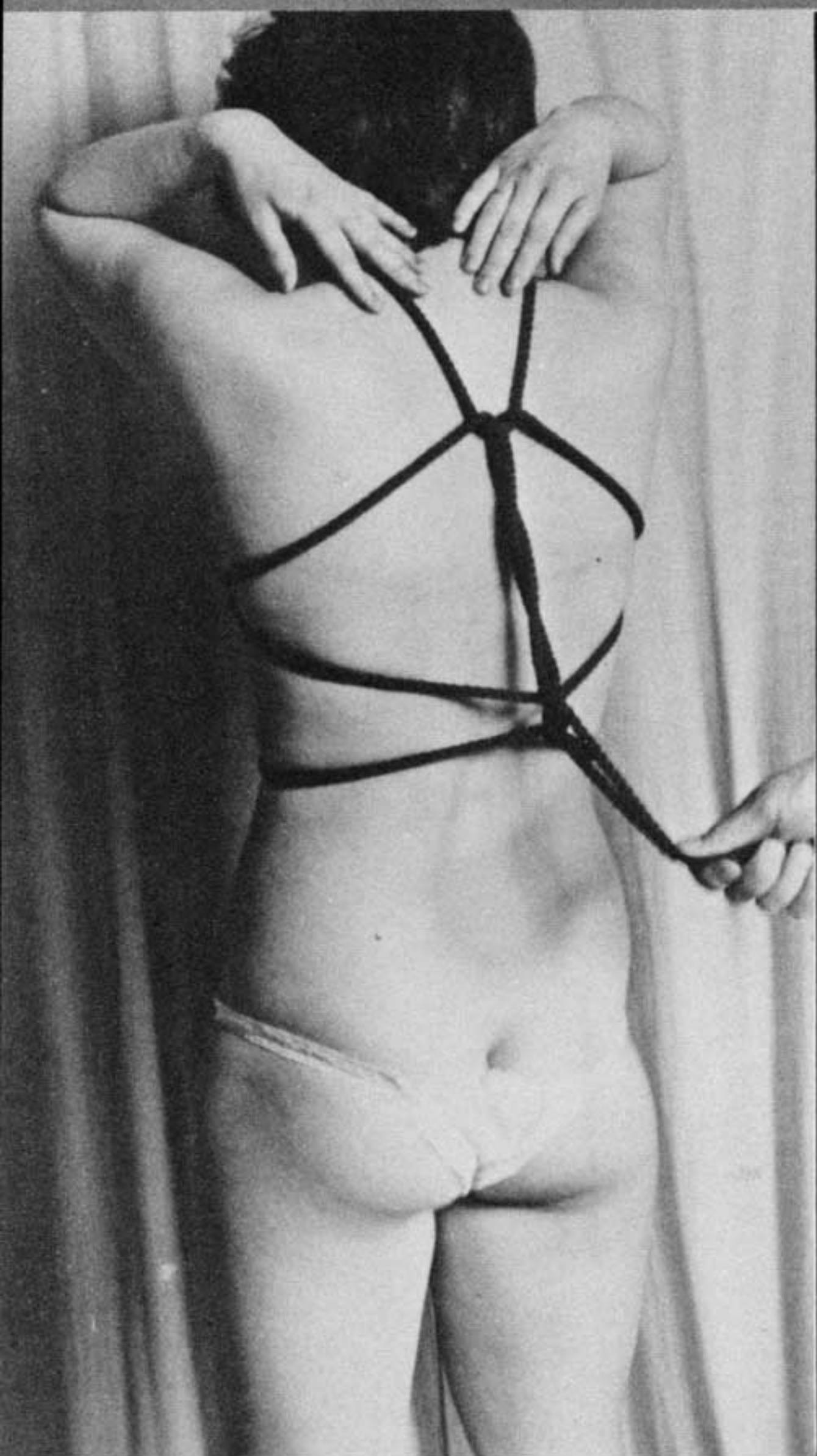


臍下で結び目を作ったならば、そこで繩を一本ずつ左右に分け、腰の上をまわして、背骨のところで交差させる。この腰という部位は繩を固定しておきにくく、左右又は、上下等に引っ張りながら固定する場合はともかく、こうした繩の掛け方はずれやすい。それを頭に入れながら繩を掛けられるようにされたい。

腰で交差させた繩は、背骨の上を辿って、首にまわっている繩に結びつけてくぐらす。このあたりまではグイグイと力を入れて引っ張るような必要はない。

話しは横道に外れるが、緊縛というところから満身の力を込めて締めつけていかなばならないかのように思い込んでいる人があるようだが決してそうではない。





最初は余裕を持って縛り、ポイントさえ決めれば、後は縄数を増やす度に締めていき、縛り終えた時点で縄が張っていいのである。それが縛る上でのひとつのポイントになるのではないだろうか。

話を元に戻そう。首にまわっている縄にくぐらせた後、再び一本ずつ左右に分けて前にまわす。

前にまわした縄は胸元と臍の下の二箇所結び目をつくった縄の中間辺りに縄をかけ、左右に引っ張り、引っ張った後、背骨のところ、腰骨の上十五、十八センチ位のところで結び目のポイントを決める。

ここまでは肉体への縄掛けであって、手足の拘束は次の段階で入る。





結び目のポイントを決めたところから再々度一本ずつの縄にし、左右の上腕部に二巻きする。敢えて二巻きにしなければならぬ理由はないが、一卷きだけだと一卷きした縄がずり落ち易く、見た目の緊縛感も無くて弱々しい印象を受けるようだ。そうした点を考え合わせれば、縄は二巻き、あるいは三巻き位した方が望しい。

両上腕部に縄を巻きつけ、絞人氣味にするこの辺から縄は女体への喰い込みを見せてくる。逆にいえば、縄掛けが八割方決まったところ位から、女体の各部に当たっている縄の緩みや、位置のズレを直すのが好ましい。

もちろん、女体の柔軟さ、体調を考慮した上で臨機応変に行うこととはいう迄もない。





両上腕部に二巻きした夫々の繩は、背骨上を通る繩に結びつけ、固定した後に、両手首を深く交差させ、そのところを縛る。その場合、繩をグルグル巻きつけられ、いという粗雑な括り方ではなく、繩を並べるようにして縛るべきである。それは、手首の関節に細く強く喰い込むのを防ぐ為と、長く縛ったままにしておく為である。

これで本繩のでき上がりと相成る。

同じ「菱」を使った縛り方であっても、立菱繩と随分違うことがわかる。菱の中から豊かな双の乳房がこぼれるというのも乙なものである。

体に掛っている繩数もそう多くなく、女体への責めの障害になることも無い。





九メートルの縄を使っているの  
で、未だ十分な縄の余りがある。  
その余した縄の使い途のひとつ  
たつを紹介しよう。

まず、胡坐縛りをする、後手  
を結んだ縄尻を腰から左右に分け  
て前にもってきて、胡坐に組んだ  
部分に縄を掛ける。女が自分で体  
を曲げられるぎりぎりのところま  
で持ってくるのがコツである。

自分で曲げられるぎりぎりのと  
ころに、上から力を加えて更に体  
を曲げさせることができるが、そ  
うした状態から各種の責めに持つ  
ていっても、長時間の同一姿勢で  
は難しい。そこまでしなくても、  
その姿勢で縛られ、固定されるの  
は結構苦しいもの。

また、この程度の胡坐縛りのま  
ま、乳房をいたぶるのも一興。





もうひとつは、手首で結んだ繩の余りを尻の方へ持っていていき、股間を通して体の前に持ってくる。そして、臍のところで左右に分かれて、繩に架けて引く。その引き具合如何で恥骨に喰いこむ度合いも異ってくる。

あるいは、花芯に当る部分に結び目をつくっておけば、繩を引くことによって結び目が喰いこむ。

そうした存分な責めを行った後で、今度は前から後ろへと股間に繩がくいこむようにして結び、部屋中を走らせてみたり、竿や、電気掃除機の柄等を使って、繩が喰い込んだ股間にあて、更に責めてみるのも方法だろう。あるいは、写真のように乳房を揉みしごく、それを避けようと身を反らす。それが股間の繩を締める事になる。



## 隷女志願の恋文

# 続・『御主人様へ…』

## —牝犬美代子の手紙—

わたし……、毎日いけないことばかりしています。御主人様のことばかり考えているから……。御主人様の腕の中で、自分がわからなくなるまでめちやくちやにされてみたい。それから……。とても言葉に出来ないような恥しいことを一杯されて……。そんなことを考えていると、どうしても……。手が……。知らない間に、いけない事をしているんです。やめなくっちゃとは思っただけ……。やっぱり、どうしても……。しちゃうんです。恥しい事だけれど、この気持ちをどうする事も出来ない。一日でも早く、御主人様に会いたい。

### ○美代子より四通目

前略、御主人様からのお手紙を受け取り、とてもうれしい気持ちです。それから、前の手紙の事なんです、私への返事なんかこないと思って、手紙には短く書きよいうように書いてしまっただけに、ごめんなさいネ。でも、





私のこと不真面目な女の子と思わないで下さいネ。(今は毎日予備校に通っている真面目な学生です。)

昨日、おこずかいが入りましたので、カメラを買ったんですネ。そして、お手紙にあるようなポーズで、写真を写すだけ写したんですが、とても同封するような勇氣は持てません。何だか写真を送ったら、御主人様の期待外れで、次からお手紙いただけないような気がして……。御主人様は、三十二歳の若さで容姿も良い方とのこと、私のような者(色白でもないし、肌も美しくありませんので……)を、いくらメス犬としてでも、気に入っていただけるかどうか心配でなりません。

お手紙には、旅費のこととか、別府に住めば、なお良いと書いてありましたが、御主人様は、私のことを若くてかわいい女の子だと思つてのことだと思います。実際に私に会つた時、失望されるのではと大変心配です。もし御主人様が、期待外れでいいという考えでしたら、私の方は少しでも早くお会いしてみたいと思っています。出来れば、十一月十日金曜日ぐらいが、私の方は良いのですが、詳しい事は、その時、電話で出来ればと思います。(だから、この前の手紙のことは無いこ





とにして下さい) 御主人様からの連絡、お待ちしております。(出来れば、家族のいない午後三時から五時ぐらいにお願いしますネ。) 私の方からも一度、お電話するようにします。お会い出来た日、お話しするだけで日帰りするか、私を裸にしメス犬として教育して下さい。さるかは、御主人様の自由です。ただ、私は貴方様のメス犬だから、アヌス、乳房、秘所、その他の部分も、御主人様の思いのままに扱って下さることを望んでおります。又、お会いする前に、御主人様の好みの女性(肉体的にも)のタイプと、私の身体をどのように教育して下さいのか、(好みのプレイの例を教えてください) お聞かせ下さい。

貴方様からのお手紙(お電話)、まっております。(文章がバラバラで、ごめんなさいネ)

御主人様

メス犬 美代子

私、もうだめになってしまいそうです。今日、御主人様への手紙を書いてるだけで濡れて来てしまうんですもの。毎日、ひとりでい





ると恥しいことばかり考えてしまっんです。  
いやらしい所にすぐ伸びるこの手が、御主人様の手だったら……、思いつきり恥しいことをしてもらいたい。めっちゃうちゃに黽られたい。

### ○美代子より五通目

前略、御主人様からのお電話、大変嬉しく思いました。

もう文通も出来ないだろうと思い悔みましたが、しかたがないと諦めておりました。でも、やっぱり御主人様に、この身体を黽ってもらいたいという思いは忘れられませんでした。

この前のお電話、もっと長く話して下さいばと思っていたんです。あの時、一人で留守番していたので、全裸で自分の身体に悪戯していたんです。だから、もっと声を聞いていたかたのですが……。今度は、電話で私の身体を黽っていただけないでしょうか。御主人様の言うとおりにしますので、お願い聞いていただけますか。この頃、男の人（スゴク





イヤな人なんですが）から、しつこく電話がかかってきて両親が変に思っています。もし、お電話くださるのでしたら、私一人じゃない時に、御主人様から電話があってもお話しすることが出来ませんので、これからは、出来るだけ火曜日と木曜日の午後二時～四時の間（お母さんが、習いごとに行っていますので）にお電話下さればと思います。

二十六日の日曜日の昼からは、私が一人なので、よければお電話かけて下さい。それで、もっと親しくなればと思います。又、これからお電話下さった時、私が一人じゃなかったら「イエ、ちがいます」って、お返事しますので、すぐに切って下さればと思います。それでは、二十六日待っていますので（お手紙は、郵便局留めにして下さいネ。よろしくお願いします。）

御主人様

メス犬 美代子

部屋の中で、ぼんやりしているといつのまにか、自分が責められている姿を想像してし





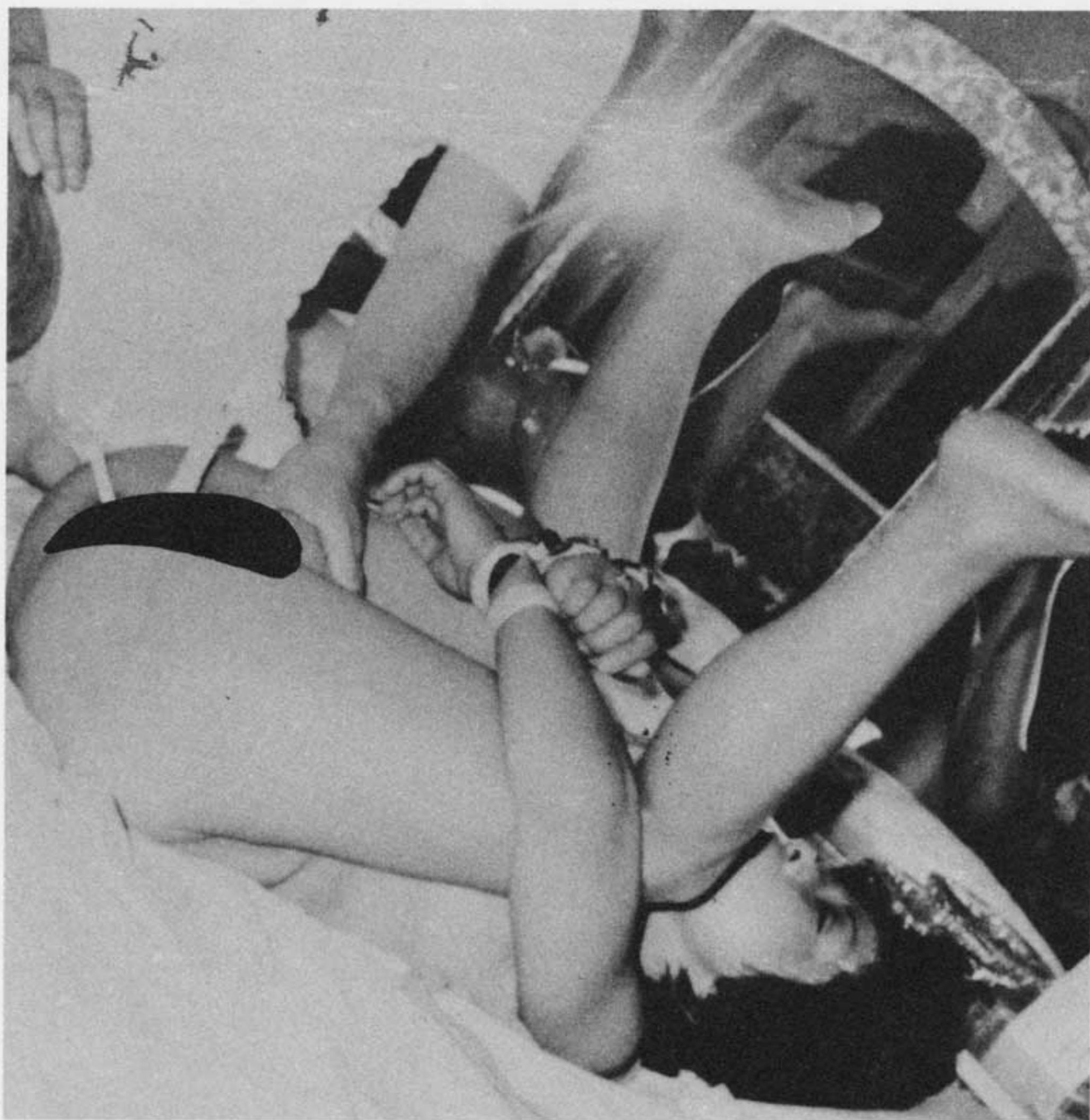
まうんです。自然に体が熱くなって来て、着ている洋服をすべて取り外したくなって……。

### ○美代子より六通目

前略、御主人様。お電話あらがとうございました。別府へは、十一月四日土曜日に行こうと思っています。それで、御主人様の好意に甘えて悪いんですが、お金の都合がつきませんので、出来ましたら旅費を十一月四日までに送って下さるようお願いします。それから、ホテルの事なんですが、予約して下さいさなくてかまいません。モーターのようなホテルの方がいいので……。それから、やっぱり七時間余りもかかるのはイヤなので、少し不安ですが、飛行機で行くことにしましたので、だいたいの時間に合わせて、身体をあけておいて下さいね。土曜日の午後三時頃、こちらを出ますので、着きしだいお電話するようにいたします。

御主人様とお会いする前に知っておいてもらいたいのですが、前の手紙にも書いた通り容姿はごく普通ですが、身体は奇麗ではあり





ません、特に性器とアヌスは、自分で見てもグロテスクで、排出器管としか思えないし、そのまわりも黒ずんだ感じですよ。又、ヒップも妖美な色気がある、女の人らしい白くつるつるしている綺麗なヒップとは、全く違うので、そう思っておいて下さいね。以上のような事を考えに入れて、嫌な思いしないように、会うか会わないか決めて下さい。旅費などは、御主人様に出していただくのですから、醜いメス犬でもよかったですら返事下さい。

私は、性病のことと赤ちゃんのことが（避妊の意味です）一番心配なのです。その辺のことは、御主人様のことを信用してもよいのでしょうか。教えて下さい。（私の方は、全く安心出来ますので）お返事、十一月四日までに届くようにお願いしますネ。

御主人様

メス犬 美代子

私、初めて裸のまま眠ったんです。昨夜、洋服を脱いだままベッドの中で、胸やアソコに悪戯してたの。ほてった体をシーツに沈め





ると、ヒヤッとして気持ちよくて……。シーツに体をこすり付けていたんです。知らない間に眠っちゃったようなんです。朝、目が覚めたら何も着ていないんでびっくり、何んだかくすぐったいような感じでした。でも、何にも着ないで眠るのって気持ちいいなって思いました。これからも何も着ないで、眠ろうかしら。

※編集部に送られて来た美代子さんからの御手紙は、残念ながら六通目で終わっています。編集部では、美代子さんからの御手紙のように読者の皆さんの御主人様にあてた手紙、及び、皆さんに送られて来たプレイメイトからの手紙などを募集しています。どしどしお寄せ下さい。

§

§

§





プレイ体験記

縛りの森の旅人





# 大沢理恵

縛られる、その言葉を聞くと昔から胸が怪しく高鳴りました。まだ「性」の世界について何も知らぬ頃からなぜだか、縄で縛られて身動きのできない自分を想像すると、不思議な感覚にとらわれ、身体が火照ってしまうのです。

それは一つ違いの兄との、幼ない頃からの怪しい遊びが原因しているのでしょうか。兄妹というのは、お互いの性の嗜好を補完するような仕組になっているのか、兄は攻撃的な性格で自分より弱い者を苛めるのが何より好きでした。

その兄との怪しい遊び、そう呼ぶと何か近親相姦のように聞こえますが、そうではなく、もっとイメージ的なものを楽しむ遊び、それが始まったのは私が幼稚園のときからです。タオル二本を用意して兄と押入れに入りこみます。今と違って古い家造りなので、押入





れも広く、小さな私達が中で遊び回っても十分な大きさでした。

そのタオルで兄は、私に猿轡をかませ、もう一本で後手に縛ります。最初は暗い所に閉じこめられた恐ろしさと縛られた悲しさで、随分と泣きじゃくった私でしたが、兄は一向に介せず、

「そんなに泣いたら悪い奴が聞きつけて、おまえをさらいにくるんだから。そしたら僕は知らないよ」

などと言って私を脅かすのです。

「おとなしくしてたら、僕が正義の味方を連れて来てやる。待ってるんだぞ」

そう言うのと暗闇の中へ縛られた私を置き去りにして、押し入れから出て行ってしまします。再び兄が戻ってくるまでの間、その夢うつつのひとときに、子供ながらエクスタシーを垣間見ることができるのでした。その気持ちはちよつとうまく説明することが出来ません。身体の奥底の方からジーンと痺れが来るような感じで、その後スーッと力が抜けてゆくのです。

やがて変装を凝らして兄がやって来ます。それからは悪役と正義の味方の二役を兄が演じます。隠密剣士の時は刀を腰に差し、エイ

トマンの時はマントを羽織って。

悪役になった兄はさまざまなセリフで、縛られたままの私に詰め寄るのです。

「お前は可愛いから、このままサーカスへ売り飛ばしてやる」

とか、

「このままさらって、俺のウチの娘になるんだ」

などと言いながら。私は何だか恐しくて、「いやーっ。助けてえ」

と泣き叫ぶのですが、妙にゾクゾクする気分なのです。兄もそんな私の様子を見ながら、興奮して楽しんでいるようでした。

善悪の価値など分からぬ年頃でしたけど、親に見つかるかと怒られるに違いない、という判断が何となくあって、いつも必ず両親の留守を見計らってしていたように記憶しています。

その遊びを私たちは私が中学二年になる頃まで続けました。年を経るにつれてストーリーは変化し、性的なイメージが強くなってゆきました。

場所も押し入れという訳には行かず、家族が寝静まった深夜、一緒に勉強をするふりを





して兄の部屋で、その怪しい遊びを楽しんだのです。私を縛るものもタオルから本格的な麻縄になって、兄の嗜虐性も段々と増していったようです。

私が異性を意識するようになる十一、二歳の頃から、羞恥責めというか、私の洋服を脱がせて、下着姿にさせて、私が羞かしさで泣き出すのを楽しむのです。

「お前、何でそんなに頭が悪いんだ？ もしかしたら俺の本当の妹じゃないかもしれないぞ。」

よし、ちよっと調べてやる。服を脱いでみ

ろ」

「お兄ちゃん、いやよオ。あたし、本当にお母ちゃんの子供だもん。なんで脱がなきゃいけないの」

私の抗いも兄の欲望を刺激するだけで、威丈高に強制されると仕方なしに、スカートを脱ぎ、ブラウスを脱いで、兄の前で下着姿になります。私のスリッパ姿を見て、

「ふん。勉強もしないくせに、身体ばかり大人になりやがって。おっぱいもふくらんできたじゃないか」

などと言っていたぶるのです。それから麻

縄を取り出すと、

「さあ、お前は今、番長たちにつかまって、これからリンチをされるんだぞ」

と、私の両手首に縄を巻き、鴨居に縛りつけます。その後はまた、兄の一人二役の始まりです。不良たちに囲まれ、エッチな事を言われたり、おっぱいやパンティに触られたりした後、まる裸にされそうになると、必ず正義の味方が出現します。

その頃になると、それはTVのヒーローなどではなく、兄が創り上げた架空の人物になり、兄はその人物の説明を口で言いながら登場するのです。

こうして書いていると、馬鹿馬鹿しくて思わず笑ってしまうのですが、当時は二人とも真険に自分の役を演じたのです。

兄は私とセックスをするつもりはなかったと思います。私は兄のことが好きでしたから、奪われるものなら与えてもいいと考えていましたが、兄にとって私は退屈しのぎに虐める対象にすぎなかったのでしょう。

「遊び」を終えて部屋に帰り一人になると、先程の興奮がまだ鎮まらず、ついオナニーを始めてしまいます。そんなとき空想にあらわれるのは架空の人物ではなく、実在する兄に





他なりません。

このように私は兄によって、「遊び」を通して縄の味を教えられ、翻られる快感を悟らされたのです。恋人とのセックスで得る絶頂感よりも、押し入れて、または兄の部屋で繰り返されたあの「遊び」、性的な接触は無くてもどこかしら淫靡で背德的な、その刺激の方がはるかに素晴らしく、忘れ難いのです。

兄は町の高校へ入り、親戚の所で下宿を始めたので、自然にその機会も失せてしまい、また、ガールフレンドに恵まれた高校生活をエンジョイしていたらしく、私を虐めて欲ぶ

気にもならなくなったのか、それ以来途絶えてしまいました。

それから、心の片隅にはいつも悩ましい記憶として、兄との事が存在していたのですが、たまに帰省して来る兄を見ても、そんな事は笑い話としてお互い済ませていました。高校を卒業した私は、洋裁の専門学校へ入ったのですが、寮生活の緊張した雰囲気や毎日出される宿題に追いまくられて、自分の片寄った性癖の事などもすっかり忘れてしまいました。やがて私にも彼氏ができ、週末に彼のアパ

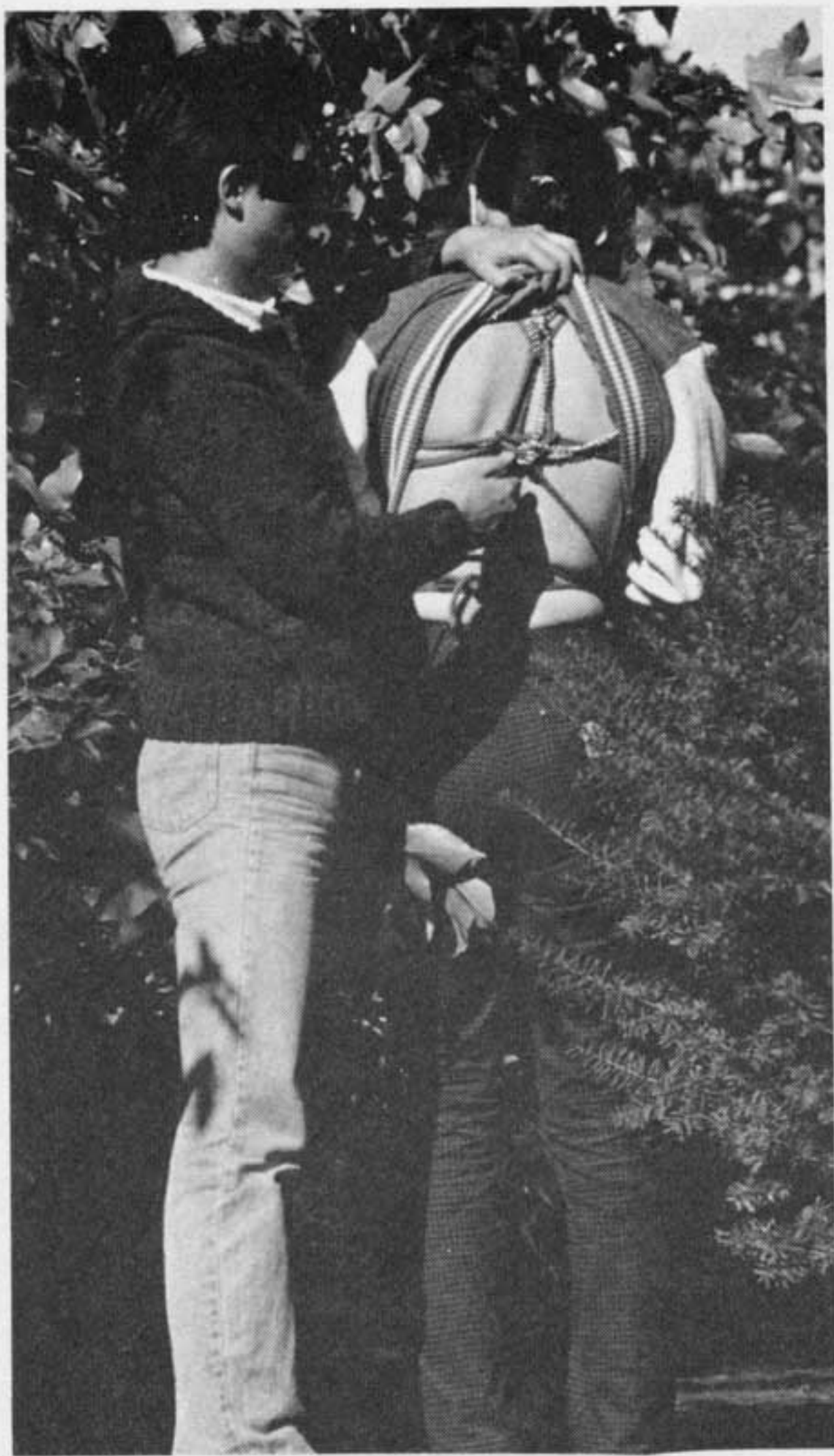
ートで一緒に過ごすことが多くなりました。彼は朗らかで優しく、私は傍にいただけで、学校での辛い事など忘れることができたのです。もちろん純潔も彼に捧げ、求められるままに身をまかせていました。彼はセックスの時も優しく包むように、私の身体をいたわってくれました。

そんなある晩、彼の部屋でお酒を飲みながら、一緒にぼんやりとテレビの深夜映画を見ていた時です。私の、あの忘れたと思っていた衝動が、揺り戻され、生々しく蘇えってしまったのです。

映画はカトリーヌ・ドヌーブ主演の「昼顔」でした。すでに皆様ご周知の映画だと思いましたが、私はロマンチックなメロドラマとばかり思い、見ていたので、ストーリーの意外な進行に戸惑い、あまりの強い刺激に言葉も失ってしまいました。

特に、ドヌーブが夫と共に馬車に乗って森を抜けてゆく場面での、ドヌーブの淫らな幻想シーン、ドヌーブが夫と馴者に引きたてられて森の中へ連れこまれ、大きな木の枝に両手を縛られて責めを受ける、その場面を見た時の衝撃。夫と馴者は縛られたドヌーブの上衣を剥ぎ、純白のブラジャーだけになった、





むき出しの上半身に、何か羞かしい事を言い続けながら鞭を振うのです。

ドヌーブの妖しい美貌と被虐を求める心の葛藤に見とれながら、私は決定的なものを見てしまったと感じました。もう私はこの衝動から一生逃れられないのだ、そう思うと今こうして彼と安穏なときを過ごしている自分がとても欺瞞的に思え、居ても立っても居られなくなったのです。

へこの人はなぜ私を虐めてくれないのだろうか

彼の、少し酔いのまわった、穏やかそうな横顔を見ながら私はそう呟きました。映画を見終えると彼は、

「へへッ。俺、何だか興奮しちゃった」

そう照れ笑いしながら、私の胸へ手を伸ばし首筋に唇をつけて、チュツチュツと音を立てて舐めるのです。私は何か新しい事が起こりそうな予感に震えて、

「抱いて。今すぐ」

と上気した顔で告げました。そのまま畳に

押し倒され、服を脱がされて、あっという間にお互い裸になって、愛し合いました。

放出を終えて、呼吸を整えながら私の髪を愛撫する彼の指先、その感触が哀しくて涙があふれ出します。

へねえ、なんでもっとメチャクチャにしてくれないの。縛ったりしなくてもいい。でも、奴隷のように扱ってほしいのに。羞かしいことや意地悪なこと言って、虐めてほしい。そうでなければ私たち、ダメになっちゃうかもしれない……」

期待された事は何も起こらなかった。激しく欲情した分だけ早く、彼は果ててしまったのです。

へああ、どうしちゃったんだろう。いつもだったらこうやって髪を撫でてもらうだけで、満ち足りるのに。こんなにいい人の、どこが不満なんだろう」

そう自問しながら、彼に悟られぬよう平静を努めたのですが、うっすらと浮んだ涙を見られてしまい、随分と心配をさせたものです。結局そんな事があってから、彼とはしつくり行かなくなってしまう、私は自虐的な気分で彼の元を去ってしまったのです。

「虐めてほしい！」





その一言をとうとう口に出せなかった私。  
いえ、例えそう伝えたとしても、気質的に彼  
には私を虐めることなど、できなかったに違  
いありません。

それから今思えば、あの映画のこと。あれ  
はちよつとしたキツカケに過ぎず、もしかして心の奥深い所で彼への愛情に空洞があつて、その隙間に昔の懐しい陶酔が入りこみ、根を張っていったのかもしれない。

今私は二十三歳、クラブのホステスをして  
います。彼との件があつて以来、急速に洋裁  
に対する熱意も失せて専門学校を中退し、寮  
を出て自活するようになったのです。以来こ  
の三年あまりの間、事務員、ウエイトレス、  
スナックのアルバイトなどをやりながら、そ  
の日暮らしを続けてきました。今のクラブ勤  
めはかれこれ半年になります。

恐らくここまで読んでこられた方は、自活  
後の職歴から判断して、SM的な愛欲に溺れ  
ていったのではと思われるかもしれません。  
確かに私は心の中で、被虐的な願望を充足し  
てくれるような相手を、求め続けて来ました。  
でもなかなかそういった男性にはめぐり会え  
ず、かと言って全くのマニアの人は何だか恐



しくて、お付き合いもこちらから敬遠してしまうのです。

それでも、かつてウエイトレスをしていた喫茶店のマスターと、一時期付き合っていたことがあります。妻子ある中年の人で、大変な色事師でした。私の他にも片っ端からウエイトレスに手を付けていたようです。口髭をたくわえた重厚な風貌で一見フェミニスト風の店の女性客にもかなりのファンがいました。その外見とは裏腹に、内面では他人を冷たく突き放し、自分に対してもニヒルで、そのクールさに魅かれ、他の店員や奥さんの目を盗んで密会を続けました。

そのマスターが熱心なSM誌の愛読者で、市販されているものは大低目を通していて、私も無理矢理読ませられ、感想を報告しなければなりません。どちらからと言うと、絵空事の多い小説集にはあまり興味を持てず、読者や愛好家の方のナマの声が載せてある、本誌のような傾向に興味を覚えました。

いろんなSM誌をパラパラとめくっているうちに、私は自分の嗜好が何と幼稚で空想的なものかをつくづく驚いてしまいました。それまで私はセックスの経験と言っても、二、三の体位を知っている程度で、アヌスのこと

やフェラチオなどもほとんど知らなかったのです。と当時に、私は決してM女のタイプではないな、と気付いたりしました。生理的に、体内の中へ器具や異物を挿入されるのが嫌ですし、豚のようになって男性に尽したりするのも耐え難ったからです。

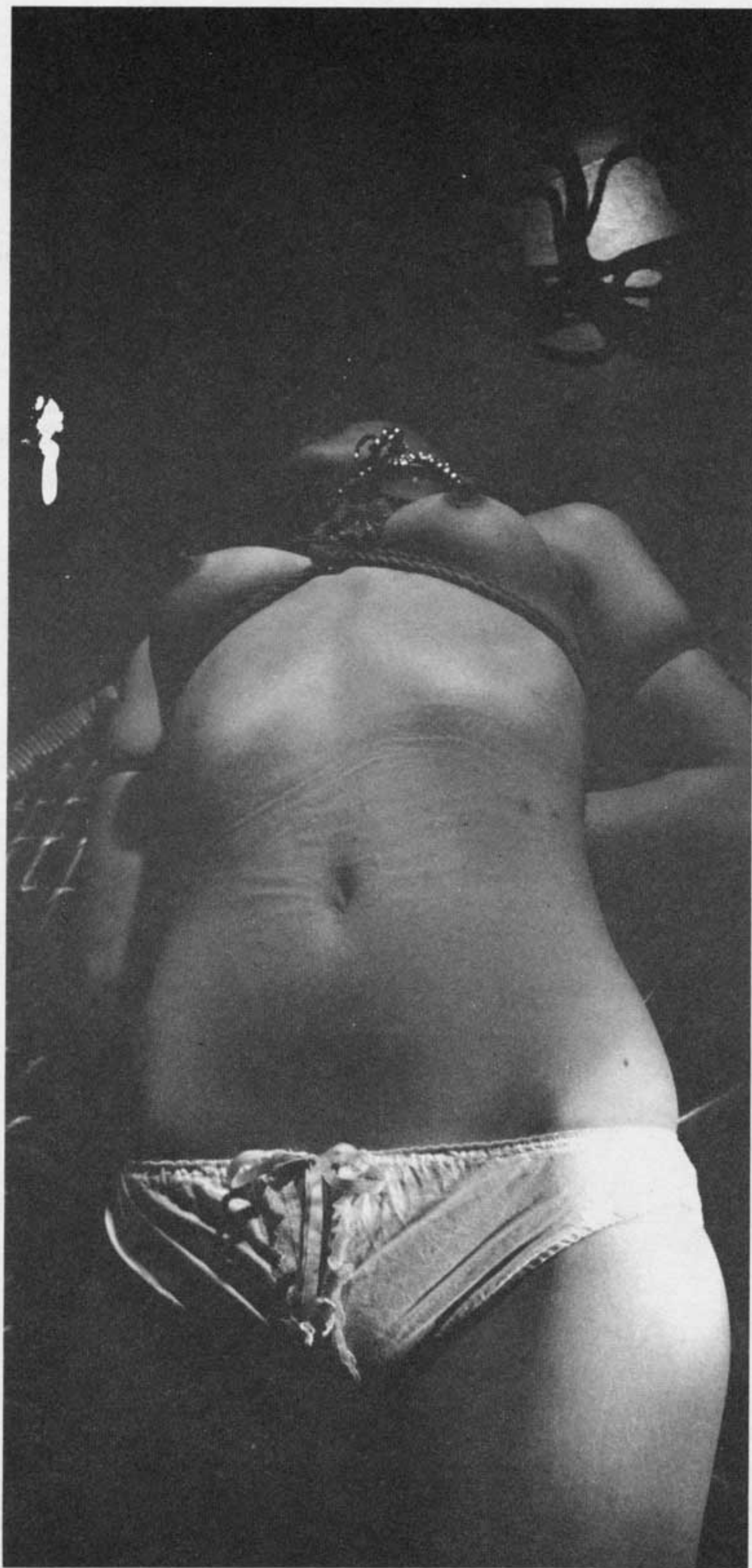
けれどもマゾヒズムというのは、もっといろんな種類があるし、ひとつの定義では説明できないのではないのでしょうか。信頼し、敬慕する人に縛られ、罵られ、それから甘い味のするセックスをしてもらいたい、そう思うのもマゾの一種だと私は思います。そして、

そういう相手の方が実際いらっしゃるのでしたら、一人に限らず、数人の方とでもお付き合いをして見たいとも思います。

そのマスターはすぐに私の中にあるM性を見抜いてしまいました。そして絶好のプレイメイトを得たとはかり、私の身体を実験台にして、むごいような責めをどんどん実行しようとしたのです。前にも述べたように彼は内面的に人を突き放した所があり、その醒めた視線はまるで産婦人科の医者のようにでした。不本意ながらも彼の魔力に魅入られていた私は、いやで死にたくなるほどでしたが、アヌ







スをかなり調教されてしまいました。

最初はもう痛みだけが走り、また彼は物でも扱うように乱暴に器具を挿入したりするので、恥かしい話ですが後でおトイレの時に、随分と辛い思いをしました。それでも時にはくやしいことに、アヌスを責められると体が

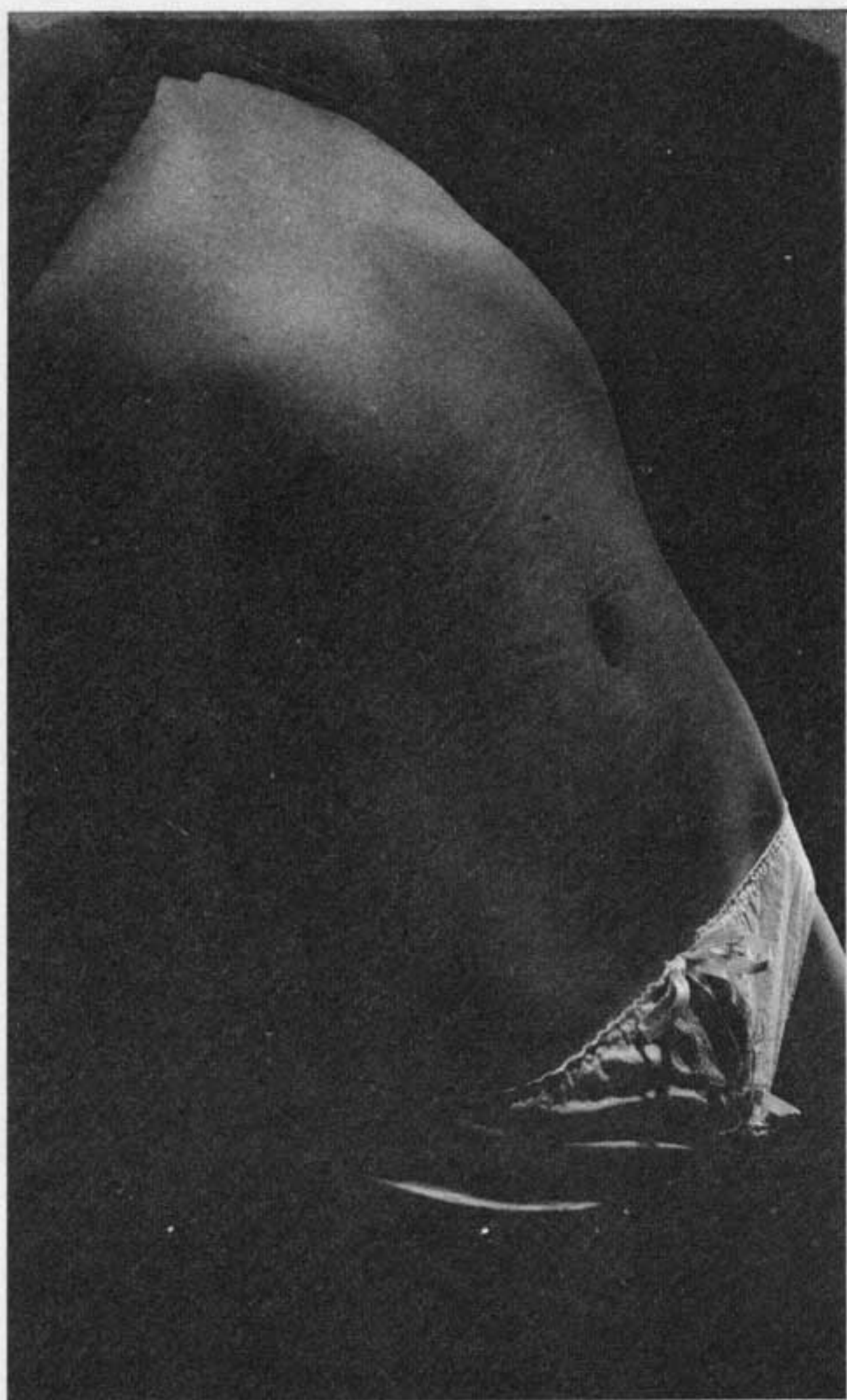
ボーツとなつてしまい、どうしようもなくなる  
ことがありました。

彼とそうして四ヶ月ほど付き合い、しまいには身体がボロボロに懷されてしまう、そう思うと恐くなって逃げだしました。私はアヌス責めを許してしまったものの、他の調教、

例えば剃毛、蠟責め、尿道責め等は頑くなに拒絶しました。今もこの気持ちは変わりません。

今現在、私は、クラブのお客で来ていた人と月に二回ほど会って、食事をしたり、気が向いたらセックスをする程度のお付き合いを





しています。

彼は多少Sの気がありますが、あくまで私の官能を満足させることを前提にしてくれ、また私も昔のように一途ではなく、ある距離をおいて接することができるので、よい友達としていつまでも居たいと思っています。ただ、お互い結婚する気は毛頭なく、今より以上に親しくなるのも避けています。

ある日、酔った勢いで彼に、兄との「遊び」

のことを話してしまいました。もちろんそれまで誰にも口外したことはなく、一生大事にしまっておこうと思っていたので、自分ながら呆れてしまいました。ただ、そのことが他人の目から見ても、どんな風に映るのか、ちょっと知りたくもあったのです。

結果的には話してよかったと思います。兄の幻影にいつまでもこだわって、自分の将来までも閉ざしてしまうのは、愚かなことだと

思うからです。

彼はじつと黙って聞き終えた後、

「うん。よく分かるなあ。俺にとってもそのイメージって、ちょっと刺激的なもの」

と、しきりに頷きながら泣きました。そしてちよつとためらった後、

「よかったら今度二人で、その真似してみたいなことをやってみない？俺、お兄さんのようには出来ないと思うけど、また違った味わいがあるかもしれないし」

と提案するのです。彼は前述のマスターとの一件も知らず、それまで私にMの気があることも気づかずセックスをしていました。私は自分の心理の綾をこれ以上覗かれるのを恐れもし、又ちよつと嬉しいような複雑な気分でした。

結局彼に押し切られ、次回に会ったときに、ホテルで試してみようということになったのです。彼は団鬼六風ストーリーの展開を考えているようでした。もちろん昔と違って、正義の味方の出番はなく、悪者に思うさま翻られ凌辱されて終わってしまうわけです。ですから昔のような陶醉とは異なり、よりM性を重視した演技が必要となります。

この時に彼は今まで隠していたS性を、心





ならずも私に吐露してしまい、大いに照れたのですが、私は彼がより身近に感じられて、幾分ホッとしたものです。次回会う日を二週間後と決め、その日は別れました。

そして当日。待ち合わせの喫茶店で、照れながらも描いてきたイメージを私に説明する彼の顔を見ながら、胸がワクワクしました。話を聞いているうちに、私も前からそういうイメージでオナニーを楽しんでいたのではないかと考えたりもしました。

ストーリーは氾濫するSM小説の踏襲で、次のような他愛のないものです。

《私は高校教師。教え子である女生徒が不良

学生やちんぴらに誘拐され、監禁されてしまう。

私は彼女を救うために不良たちのアジトへ赴き、彼らと交渉をする。彼らの条件は私が全裸のストリップをすれば、女生徒を解放するということだった。

私はやむを得ず、不良たちの前で身につけているものを、一枚ずつ脱いでゆく。パンティ一枚の姿となったときに、やくざの幹部が現われ、私を縄で縛って奥の密室へ連れこんでしまう。

それからその男に羞恥の限りに凌辱を受け、やがて被虐の欲びに目覚めた私は、転落して

やくざの情婦になってしまう》

彼とホテルへ向う道で、私はそのイメージをあれこれと膨らませ、ホテルの部屋へ入る頃にはもう当の女教師に成りきっていました。

彼は不良学生、ちんぴら、やくざの幹部など複数の役を実に巧みにこなし、そのあまりのリアルさに、時には恐怖のあまり泣き出してしまいました。

クライマックスで、やくざの幹部に後手に縛り上げられたまま凌辱される所では、子供の頃から求めていた快楽はこれだったのではないかと、と思うほど激しく絶頂に達したのです。



ただ何となく白けてしまうのは、二人が同時に果てたあと、彼が夢から醒めたように優しくなってしまうこと。私はもつと夢を見続けていたいのに。

考えてみれば兄との遊びはセックスを伴わず、それゆえに果てることもなくイメージとしていつまでも、体の中に残っていたのでしよう。

とにかくこうやってお互いの垣根を取り払ってしまった私たちは、それから様々な試みを思いつくままに始めました。彼の方は、私を「O嬢」のように責めてみたいとの事でした。そして私の調教過程を写真で撮ってゆきたいと言うのです。

写真を撮られるというのはかなり抵抗があ

りましたが、その反面、快樂の余韻を色褪せることなく保存することができるという魅力もあり、しばらく考えた末に了承しました。

ぬけるような青空がひろがる秋の一日、私たちは郊外へ車で出かけ、最初の写真を撮りました。その時の写真がこれです。強い風が吹きぬける林の中を、衣服の下に縄を縛られたまま歩きました。揺れる深緑の向うにある空の蒼さを眩しくみつめながら、兄の呪縛から飛び立つ自分をそのとき感じたのです。

これから私は過去と訣別し、未来へ向って歩いてゆけそうな気がします。そして私の快樂の成長過程は、彼との写真の中に残されてゆくでしょう。



## 分譲 女性モデル募集！ 写真用

※本誌では、愛読者の為の分譲写真専用女性モデルを募集しています。

※本誌を理解してくださる女性の方でしたら、年令、未婚、既婚、遠近等を問いません。

※分譲写真専用ですから、誌上掲載致しません。掲載可能であれば尚結構です。M性を持つ女性に限らず、S女性の方からの応募も歓迎します。

※特に妊婦資料作成に御協力いただける御婦人を求めています。母胎共に十分な配慮をした上で、資料作成に協力していただきますので、撮影可能な受胎五カ月以上の御婦人の方は、遠近にかかわらず御一報下さるようお願いいたします。

※切腹、女相撲に興味、関心のある女性の方も求めています。御照会下さい。

※御応募の方は、年令、身長、体重、バスト、ウエスト、ヒップの各サイズを記入の上、スペシャリース&M編集部迄ご郵送下さい。詳細を折り返しご連絡致します。

宛先

東京都新宿区西早稲田2-16-9

株式会社 大共社内

スペシャリース&M編集部

※文書でお申し込み願いたいのですが、お電話でのお問い合わせにも応じます。

TEL

(03) 204-2709

担当 山谷又は志摩



## 読者投稿手記

# 妻隸、多美子を紹介します

滝沢文芳

貴誌を愛読して早いもので、もう二年になります。田舎に住んでおります関係でなかなか決断もつかないのですが、今度、勇気をふるって、投稿原稿を書きました。

原稿には一応、本名を書きましたが、出来

れば名前を変えて頂きたいと思っています。

なにせ地方都市に住んでいますので、他人の目を必要以上に気にしなければなりません。実は、ヘモデル募集の記事がありました、私の妻でも大丈夫でしょうか。私達の場合、

夫婦の秘め事を、貴誌に投稿するか否かについて、妻（今後「多美子」とします）の強度の抵抗もあり随分迷い続けました。

この度ようやく、多美子も秘密を守ることが前提とするならばという事で承した次第です。

最近写した写真を同封しますので編集長殿くれぐれもよろしく願います。

私の妻「多美子」は、

年齢—二五才。

身長—一六三センチ。

体重—四八キロ。

好みの傾向は（これは私自身も含む）、縛られての羞恥責め、秘具による歓喜からの愛情交換のようです。縛りばかりでなく、浣腸、ローソク、ムチ打ちetc…も一応こなしましたが、最近、音が外部にもれるといけなという心配から、ムチ打ちの方はあまりし





なくなりました。

私達夫婦の間にはまだ子供がありませんので、家庭での気兼ねのないSMプレイが、当然の事ながらマンネリの壁に突き当たり、より以上の刺激を求めようという欲求が、今回、多美子の「ヘモデル応募」という形になりました。私達夫婦の状況を告白する事により、私と同じ性癖を持つ方々とも語り合えるだろうと期待し、多美子を私以外の男性の手で責めさせ、夫婦のマンネリ打破、私達夫婦のSMプレイの刺激剤に活用させていただけたらと考えております。

週末の夜、私がテナーサックスのジャズ音楽をステレオ放送にスイッチオンした時からが夫婦プレイの合図で、私がバッグに一まとめにしてある浣腸器具を取り出すことによりその日のSMプレイが始まります。

大きいものから私は順に取り出します。

黒い嘴管のついた一〇〇〇CCイルリガートル、五〇〇CC硝子製浣腸器、五〇CC硝子製浣腸器、エネマシリンジ、イチジク浣腸洗面器、バイブレーター、コケシ人形、ローソク、ロープetc。

「浣腸」に対して、多美子はいつも、  
「恥かしい、恥かしいからイヤ……」

といいながらも、そのアナルは心の昂まりを如実に表わすかの様で、私が両手で押しひろげると、菊花が風にふかれるようにうごめき、私の心の鼓動はドキッ、ドキッと早まってくるのです。

多美子は、私に言われるままに全身の力を抜いて、尻を高く掲げたポーズをとり、ゆるく目を閉じ、心持ち唇を開き、畳の上について

た掌で指先に力を入れて、いつも私に見られている安堵感からリラックスした状態で私の準備が終るのを待っています。

ボボボ——と鳴るステレオサウンドを背にして、私は五〇CCの硝子製浣腸器を準備し、浴室から持ってきた石鹼液の白い泡を満たした洗面器に五〇CCポンプを吸い上げては押し出し、洗面器の中の石鹼の泡を攪拌し





ます。

そして五〇CCポンプにそれをたっぷり吸引し、右手に浣腸器を持ち、左手でアナルを押しひろげ、多美子の小作りの菊花に嘴管をさしこみ、ポンプに圧力をかけると、白い液体は吸い込まれて目に見えて減量し、多美子の腹腔が微かに鳴ってくるのがわかります。

更にポンプに追加注入し、計三回、一五〇CCを多美子の体内に吸い込ませます。

三分ばかりの間、多美子は尻をつき立てた浣腸ポーズのリラックスした状態で平静でいました。が、やがて、

「ああ、あなた、お腹が痛くなってきたわ……もう辛抱できない。カンニンして」

と哀願します。

「何を言ってるんだ。まだ三分しかたっていないよ。これからだよ」

「ああ、あああ、もう駄目。駄目だわ」

「弱音を吐くんじやないよ。がんばって、がんばって」

「早くして、お願い。出てしまおうわ。あああ、お腹が……」

五分経過。多美子の忍耐力も限度に達してきます。

「イイイイ、行かせて。トイレへ、行かせて。」

お願い！」

脇腹が大きく波打ち、太腿のあたりが鳥肌立ってきました。多美子の我慢も限界でしう。

トイレへ行って排泄をすませてきた多美子に、私は尋ねます。

「どうだ。沢山出たか？」

「イヤ、そんな事言うの。でも苦しかったわ……。便秘ぎみだったからよかったけど」

私は入浴する事を命じて、いよいよ、本格的な多美子への責めが始まるわけであります。

今夜は多美子を緊縛してから、身体検査を試みようと考えました。青いロープを手にして、

私は多美子に告げます。

「さあ、これから責めるゾ」

「ハイ」

多美子は、すでに諦めきったように観念し自分の身に加えられようとする責め、歓喜を待っています。

私は多美子を高手小手に縛り上げました。手首は何の抵抗もなく思いのままに、やわやわと背中の中首すじ近くまであがります。

多美子の片方の足首に縄を括り、あぐら縛りにし、浣腸で洗い浄められたその部分が露

呈するように横だおしにし、身体検査を行なったのです。

「どうだ、コケシ人形でかわいがって上げようか？」

私は言葉で意地悪く、いたぶります。

「イヤ」と言っても、心からの拒否でないということは、股間の反応を見るだけでわかります。いわば甘えているのです。

私は面白半分に、わざとエッチな言葉をかけて、それに対する多美子の反応をうかがいました。

「いや、そんなこと言っちゃ」

多美子は言葉とはうらはらに、満更でもなさそうな態度で、その体を反応させます。

その詳細については、いずれ機会を改めて投稿させてもらいます。私がどんな小道具を用いたり、どのような身体検査をやったか？  
etc……

今後、「スペシャリーS&M」を通じて、夫婦プレイのマンネリ化に悩む同好の夫婦の方へ、呼びかけを続けることを約束してこのへんでつたない一文の筆をおきます。

《追記》

心から親しく私達夫婦と交際して頂ける方々の出現をお待ちしています。



## 夫婦

## プレイへの目覚め

初めてお便りします。御誌をいつも楽しく拝見させて頂いてます。

私は東京近郊の私鉄沿線に住む三十一才のサラリーマンです。妻は二十七才、中肉中背の平凡な主婦です。

私達夫婦は、結婚三年目ぐらいから、夫婦生活もマンネリ化して、何かもの足りなさを感じていました。

今から一年程前の事です。そのもの足りなさを打ち破るきっかけが、偶然おとずれたのです。

それが、今も妻と秘かに楽しんでいる私達夫婦のS&Mプレイです。プレイと言ってもまったく初歩的なものですが……。

その夜は、晩秋の月が窓辺を照らして、美しい夜でした。私は友人から贈られた、シクラメンの鉢を窓辺に持ち出し、月の光に映える花を眺めながら、鉢を手にとってじっと見入っていました。

その時、妻がそっと寄り添って来て、いつ

もとは違う、なまめかしく、まるで挑戦する

ような素振りでした。私はその妻の気持を察し、応じるべきでしたが、その夜は何故か気分がのらず、あいまいな態度で、受け流していたのです。シクラメンの花の香りと冴え渡る月光が、静かに憩う一時を教えていたからかもしれません。妻は何とか相手にさせようと絡みつき、駄々をこねるようになっているうち、シクラメンの鉢を窓辺から落とし、割ってしまいました。鉢を割られた花は、見るも無残な程でした。

私には、それがどうしても妻の故意の行為にしか思えず、つい、カーツとなってしまい無意識のうちに、

「ばかやろう」

と言ひ様、殴ってしまいました。

妻はその場に泣きくげれて、せきこんでいましたが、私としては、腹立たしさと、殴った後味の悪さに、その場をつくろう術もなく、ただぼんやりしていました。

しかし、内心では、可哀そうな事をしてし





まった、殴ってすまなかった、と思っていましたが、それを表現できぬままでしたのです。それから二十〜三十分ほど経った頃に、それまで泣きじやくっていた妻は、むっくり起き上がると、私の方をうらめしげに見つめながら、

「私はいけない女でしょ……」

気がすむことなら、どんなことでもしていいわ。」

と、言いだしたのです。

私は、その妻の言葉を聞いてドキッとしたが、そういう妻の真意は何処にあるのかはかりかねていたというのが本音です。

はたして、どのような言葉を返すべきか、私は暫くためらっていましたが、ふとその時今まで長い間心の奥に秘めていた、S & Mプ

レイの願望が脳裏によみ返ってきたのです。

私はおもいきって妻に、

「どんなことをしてもいいって、いったな。それなら、おまえを縛って、お仕置きをしてやる」

と言うと、一瞬、けげんな顔をしていましたが、

「こっくり」

と、うなづいたのです。私は、はやる気持で妻に挑みかかりました。

あいにく、家にはロープなどの持ち合わせがなかったので、普段使用している妻の腰紐で、両手首を背中が高々と括りつけ、そのまま畳の上にむりやり押し倒し、足首もぐるぐる巻きに縛りました。

羞かしげに身をくねらせ、芋虫のように横たわっている妻の体を、足で踏みつけたり、ゴロゴロと転がしたり、抱きかかえてみたりしました。

唯それだけの行為でしたが、私の昂ぶりは異常な程でした。無抵抗の女体を弄ぶことのできるよろこびに、心は唯、緊縛された妻の姿体に集中していました。

短い時間でしたが、胸の奥につかえていたものがとれたようで、何とも言えない程の感

激を得ることができました。

その日以来、私達夫婦の秘かなプレイは始まり、現在は毎週のように行われています。最初の頃は、しかたなく我慢をしながら、恨めしげに耐えているようでしたが、次第に言われるままに（と言うより彼女の方がむしろ積極的に）ポーズをとるようになり、妻の性癖にマゾの素質があつたのかと思われるようなほど、最近では、縄目を受けることを待ち望んでいるように思われてなりません。

最近の私は、少し馴れてきたせいか、今夜はどのように責めてやろうか、縛りは、吊りは……と責めの構想が、無限に広がってきます。この思索のひと時は実に楽しいものです。

風呂上りの火照った肌をバスタオルで包み、鏡の前で化粧している妻を横目で見ながら、私はロープを準備して待っています。しかし、次第に待ちきれなくなってきた、まだ化粧の終わってない妻を無理に引き立て、バスタオルを取り去ってプレイを開始します。

手を後ろに組ませ、胸から腕にかけて、何本もの縄目を走らせます。その上、太腿から足首までキツチリと縄で締め上げます。

そんないましめのまま、座らせた妻を、急



に抱きあげると、縄目は深く肌に食い込み、手はよじれ、激しい痛みを妻に与えます。だんだんと、妻の鼻息が荒くなり、鼻腔を閉じたり開いたりしています。

「腕がしまりすぎて痛い、痛い、ねえ、お願い、もう少しゆるめて。」

と妻はあえぎながら言います。私は手首や腕の縄を心もち緩めてやります。気持ちが昂ぶって締め上げたものですから、縄は強くしまり、緩めるのに手こずるくらいです。

次に足の紐をほどき、部屋の中を愈々引き廻します。妻は打ちしおれて、よろよろと歩を進めていきます。羞恥心は、いやがうえにも昂ぶり、恍惚から快楽の境地へと追い込まれていく様です。おぼつかない足取りで、前後左右に揺れながら、身をくねらせ、忍耐の限りをつくして歩をはこびますが、とうとう耐えられなくなり、その場にしゃがみ込んでしまします。それを無理にもう一回廻らせ、鏡の前に立たせます。縛られた裸身を鏡に覗き込んだ妻は、恥らいを含んだ上気した目で私の方を振り返ります。

私はズボンのベルトを手にして、妻の裸身に鞭打ちを加えます。初めての鞭打ちで、どうも加減がわからず、強弱ばらばらの打ち方

になってしまします。

しかし、腹、胸、腰、太腿と次々に打っていくと、妻の悶えもだんだん激しくなっていく、全身を波打たせるように大きくゆれてきます。

執拗にベルトを打ちおろしていると、妻の叫び声は、いつしか熱い吐息に変わり、かすれたようになってしましました。

私は何もかも忘れて、妻を抱きかかえ、彼女の口に熱い口づけをします。私は妻の縄をゆっくりとほどき、鞭の跡がほんのりとピンクに色づいている肌をやさしくなでさすり、唇からうなじ、顎と、キスをゆっくり繰り返します。乳房をもみしごき、乳首を口に含み舌をまわします。もう充分に興奮した私と妻は、フィニッシュへとむかいます。

今までのところ、この程度までのプレイですが、充実した日々を送っています。

私は最近、妻とのプレイを写真に撮りはじめました。時には構成に興味を持ち、毎回何か新しい責め等を考えながら、撮影するのが楽しみです。女性の緊縛の中には、言い様のない美が含まれていて、ヌードでも、着衣のままでも、その妖美がある限り、私は妻を縛り続けていきたいと思っています。





# 智子調教旅行記録

(協力)

大阪 桜宮 ホテルエンペラー

## 浪速に燃えた炎縄娘

志摩柴光



カタカターン

カタカターン

カタターン

単調なレールの響きに似合わぬように鋼鉄の車体が左右に揺れ、時折りバウンドして体を浮き上がらせる。

正午過ぎに東京駅を発車した新幹線ひかりは、小春日和のやわらかな陽光の中を気ぜわしく走り抜けていく。紅葉の名残りを感じさせる山合いを、林の横を駆け抜ける度に色付いた木の葉を振り落とし、舞い散らせて走る様に、生を断つ無常な冷たさを感じずにはいられなかった。

紅く、黄色く色付いた葉は自然に散って



く運命を持っているとはいえ、自ずから散るのではなく、他の力によって余命を奪われる姿に、もののあわれを覚えていた。

三重になっている新幹線の窓からは、外の音は伝ってこないが、風を切って走る鋼鉄の音だけは絶えることなく聞こえている。快適である筈の新幹線が何か疎ましく思えてならない。

人間がより速く、より快適に旅行する為につくられた新幹線だが、その新幹線が自然の中で息づく生命を奪い、破壊していく姿には抵抗を覚える。それは決して季節が為したもので無く、生命の愛しみからだと思ふ。

そんな事を一人胸中に覚えては、どうしてやりようもない自分の無力感を感じていた。

「フーツ」

大きなタメ息をひとつついて窓外に向けていた顔を車内に転じ、智子の手を握り、力を込めてみた。

責めの為の力ではなく、愛しい女へ強く秘めた情熱を伝える為に込めた力である。

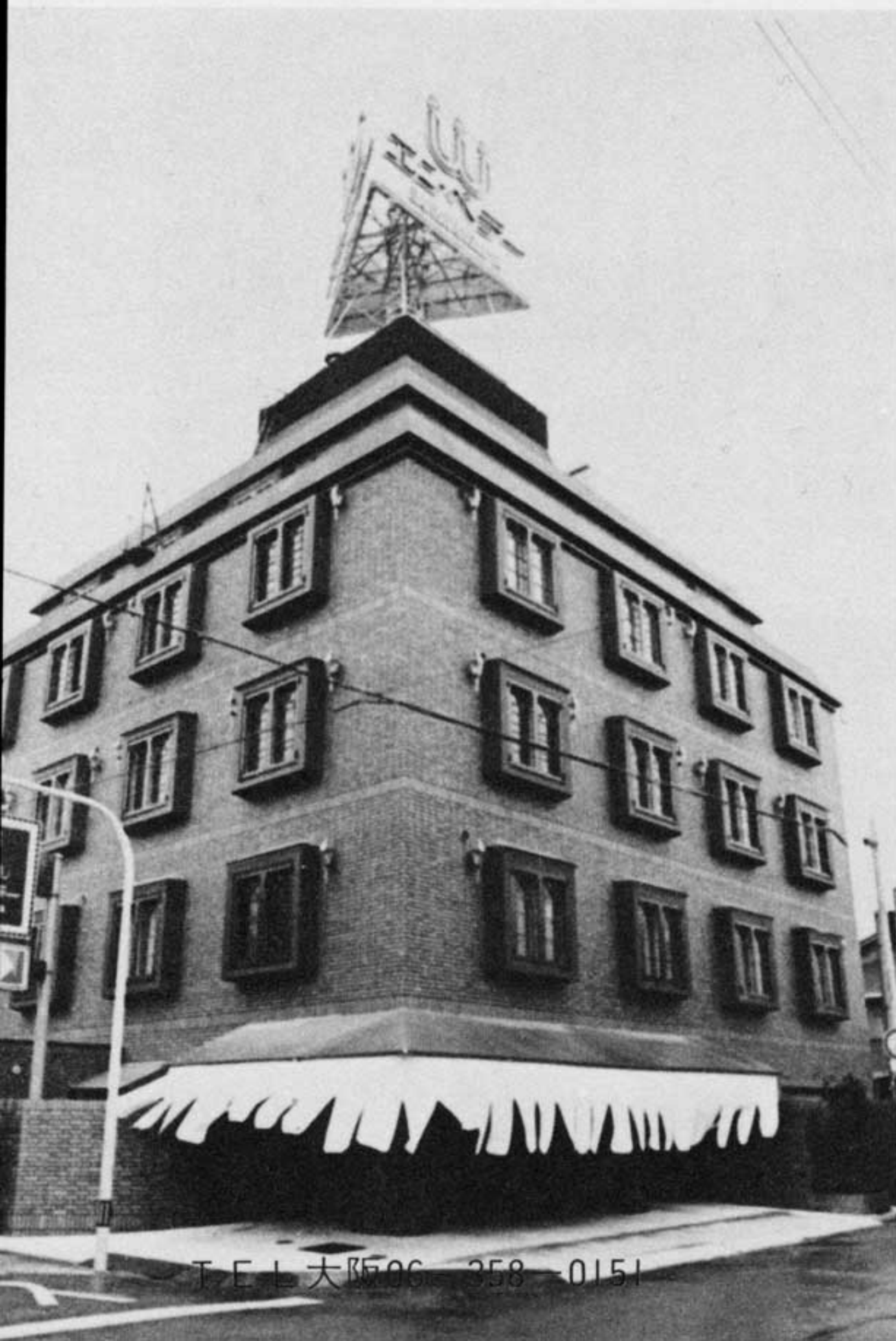
キラキラと燃える瞳に若さを感じさせる智子とは三度目のプレイ旅行になる。隸女と呼ぶには未だ早すぎる感もあるが、とまどいながらもS&Mラブプレイに溶け込んで見よう

とする姿を随処に感じる事ができる。とはいっても、常にではなく、むしろ牝豹のように鋭く切り返してくる面と、駄々をこね、拗ねて見せる面をたくみに使いわけてくる才女である。それが私にはたまらぬ魅力であり、ジャジャ馬馴らしの醍醐味を味わせてくれる数少ない女の一人である。

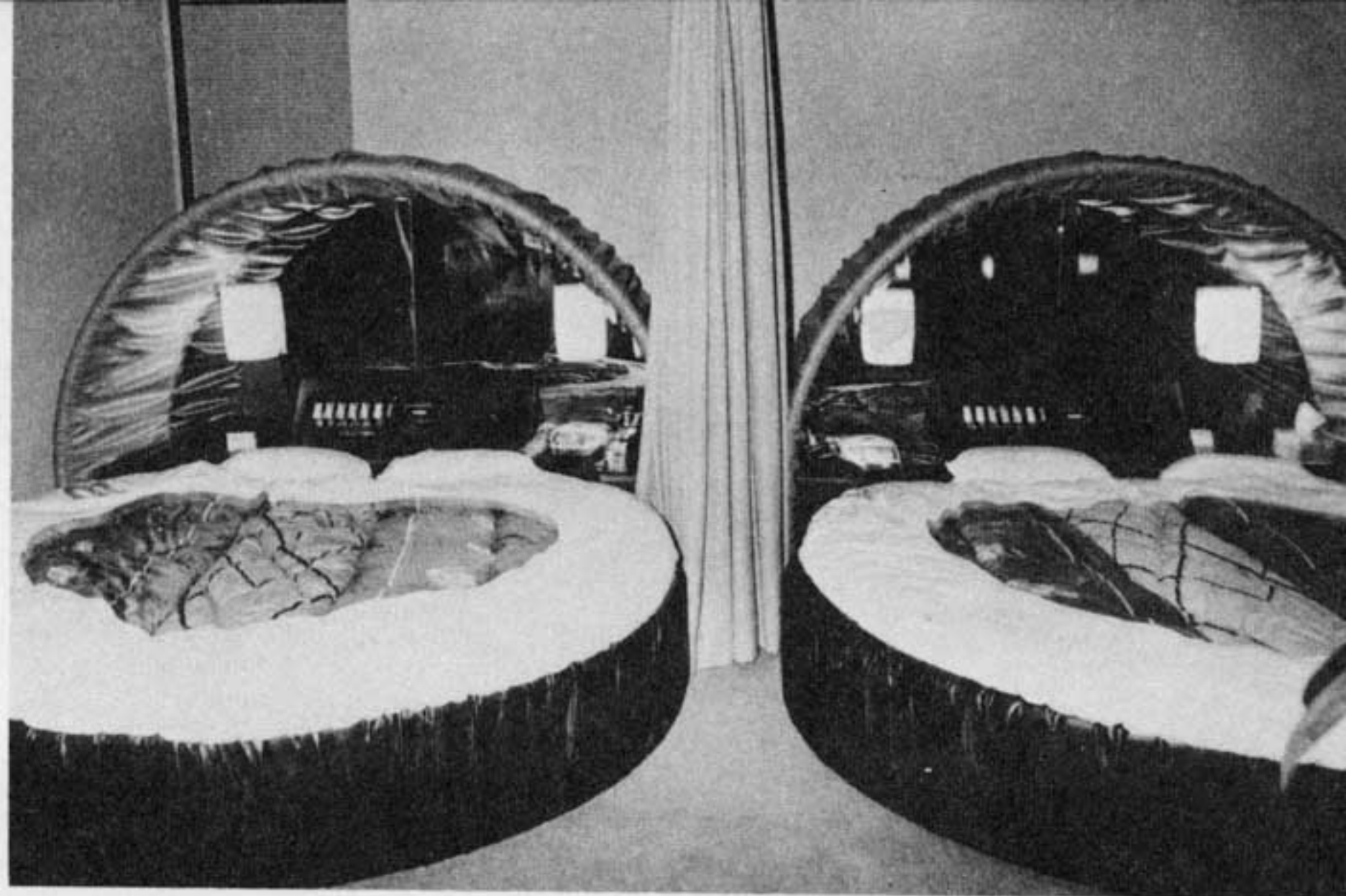
手を握られた瞬間、反射的に避けようとし

ながら、何の意図で手を握ってきたのかわからうと光る目で私を見据える。女豹の目そのものである。

新幹線に乗る時からすでに今回の調教は開始している。モスグリーンの地に、大柄な縞の入ったスカートに合ったセーターの下は素肌のままであり、スカートの下も同様にしてある。







## スワップブルームの寝室

若さを象徴するかのような形のよい丸い乳房がセーターに密着して浮き上がり、乳首の突起が新幹線の揺れでセーターにこすれ、その位置を明確にしている。

豊かで柔らかな髪からのぞく顔立ちも、彫りが深く、唇には熟れた女を感じさせる。それだけで、周囲の視線を集めるに十分といえた。

もし、私が横に座っていなければ、下車駅の新大阪に着く間に何人の男性に声を掛けられたろうか。そんな事を思わずにいられない程、横を通り、あるいは椅子の位置をわざわざ変えて智子を見易いようにする乗客の姿から察することができた。

智子もそうした他の男性の目を感じ、それが嫌でたまらず、焦立った気持ちだったのだろう。そこへ私が手を握り、力をこめたのだから、それらの鬱積が私に向けられた恰好になったのは止むを得ない事情といえた。

その時の私の表情が単に好色にあったのならば、きつい言葉か、露骨な反発がきた事は容易に推測がつく。

事実、何か言葉をぶつけようとして私を見やっただ目には挑むかのような鋭さすら感じられた。

それがとまどいの表情になり、早とちりをして失敗した子供の顔になり、安心した優しい目になる迄に暫くの時間がかかった。  
「どうかしたの？」

やや、ぶっきらぼうに、照れをかくして尋ねる。

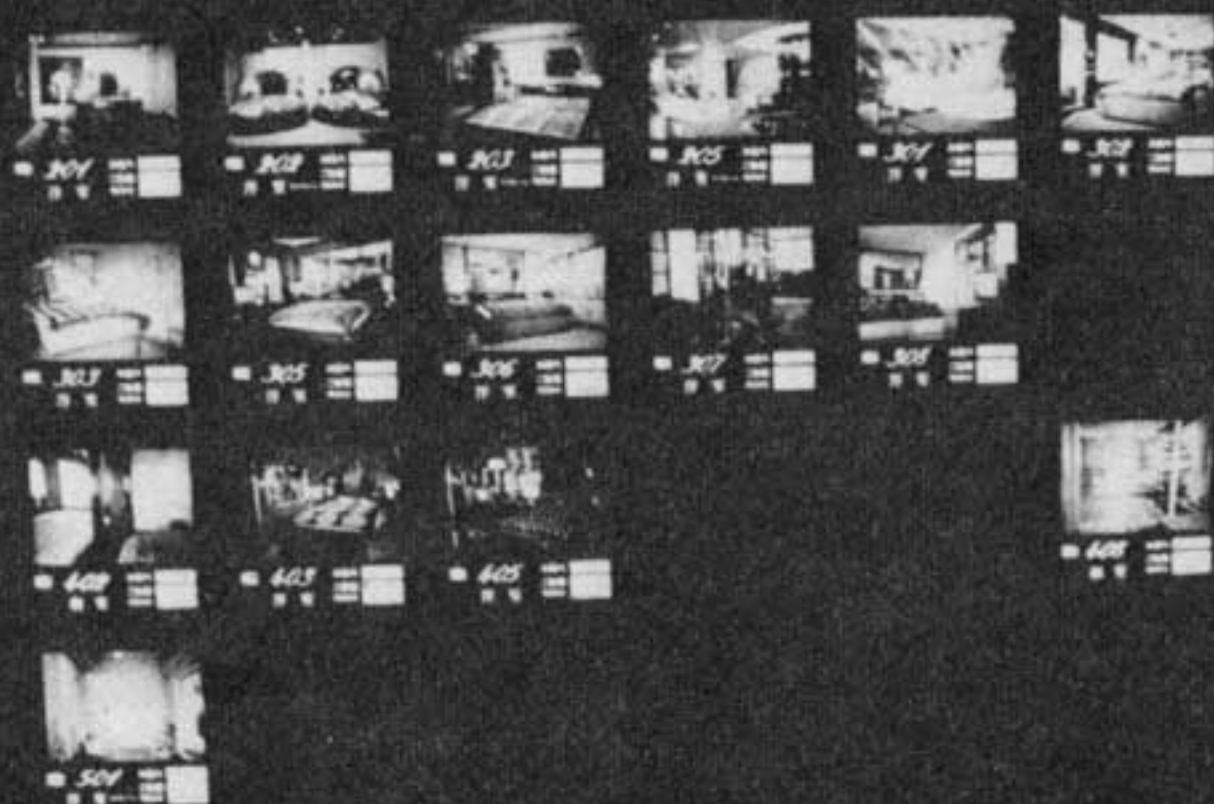
「いいや」

「何を考えてたの？」

## 各室の案内板

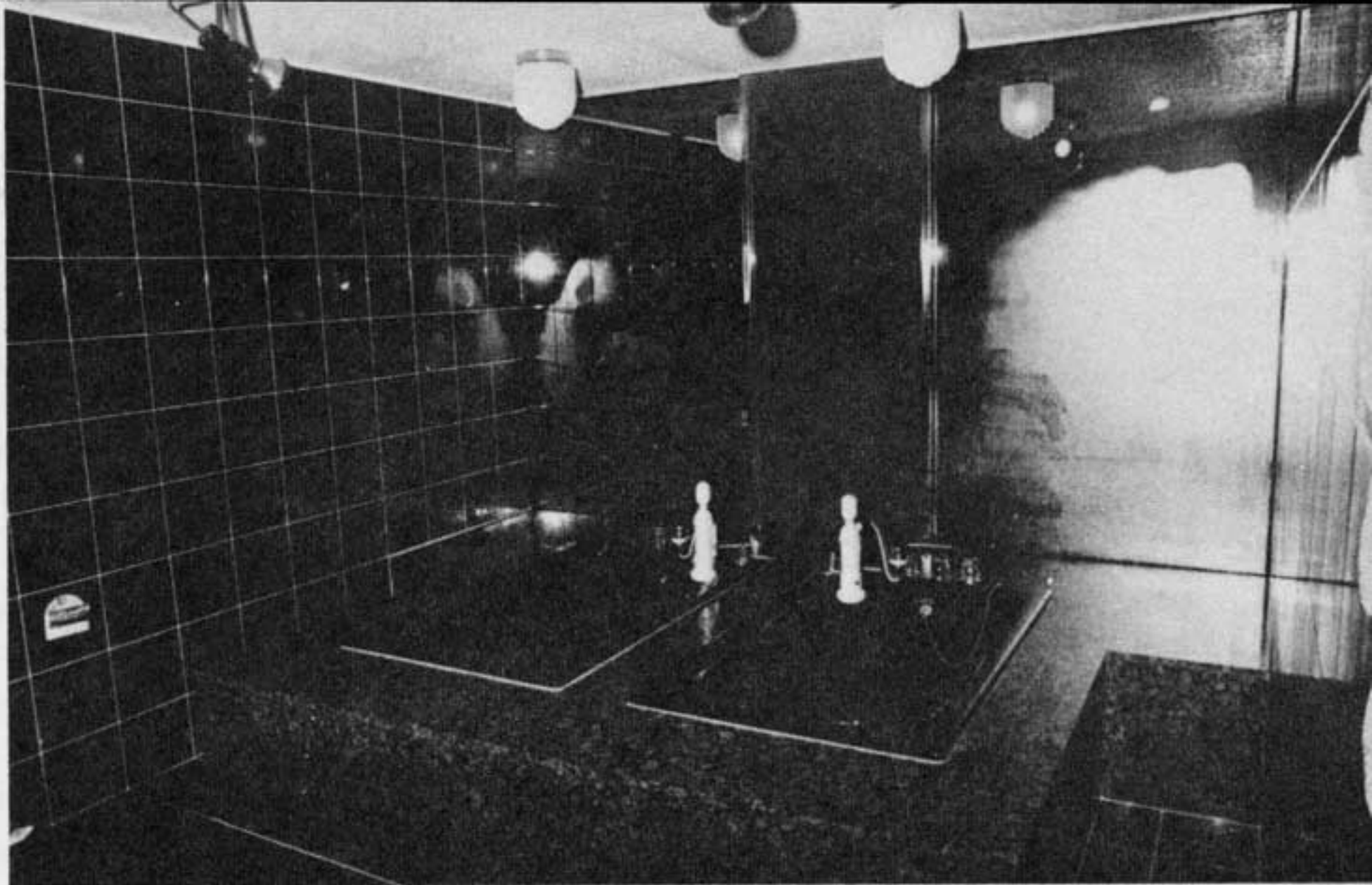
### ご あ ん な い

灯りのついている中からお好きな部屋を選び  
ミドリ色のボタンをお押しください。



Wエンペー





# スワップルームの浴室

「別に……」

「嘘。ねえ、何を考えてたの？ 教えてくれた  
っていいでしょっ」

「智子は美人だなんて考えていただけさ」

「何よ、ごまかして！」

「智子の心をどうしたら独占できるか考えて  
ただけだよ」

「そんな事じゃないでしょ」

「じゃあ何だと思う」

「彼女のことかな？」

「そう、智子のことさ」

「フン、どうせ私のことは馬鹿にしてるんで  
しょ」

「そう。馬鹿だから一生飼い殺しにして面倒  
見てやろうと思ってたんだ」

「お生憎様。志摩さんに面倒見てもらわなく  
とも私の好きな人は自分で探します」

「探せるかな？」

「探せます！」

「賭けようか？」

「いいわ」

「何賭ける？」

「何でも」

「彼が見つからなかったら、一生奴隷として  
仕えろ」

「見つかったら？」

「その彼と一緒に智子を奴隷としてこき使う  
ことにする」

「何よ。そんな賭けなんかするわけないでし



「よ」

「ハハハハ……」

いつもはこんな他愛もない会話をする智子  
ではないが、焦立ちも手伝って私の行為を邪





推し、それから温和な心に戻る迄の表情が気恥ずかしかったのだろう。気取りや鋭さを拭った素直な女を満身であらわしている。

私にしてみれば、全く違った智子という女の一面を知った思いで、新鮮な印象を強く受けた。

この一時ばかりは、素肌の上にセーターとスカートだけしか身につけていないという惨めな自分を忘れていたようだ。

新幹線ひかりは名古屋を過ぎ、次の停車駅京都へ向かっていった。やがて街並が窓に映ってくる、ひかりは速度を落とし、ゆるやかなレールの響きに変わっていったと思うのも束の間で、京都駅へと滑るように入り、静かに停車した。

京都は被虐の麗女、本間明子夫人の住む街であり、その時のプレイは昨日のここのように鮮明に覚えている。

今日はこの京都駅で降りるのではなく、未完成ながらも、隷女として調教中の智子を伴ったプレイ旅行である。被虐の麗女として完成された明子夫人であれば、私が行うどの様な責めにも耐え、その中で陶醉していくだろうが、抵抗する力を内に秘めた智子はどこ迄被虐の淵に沈むことができるか全く不明である。それが又、楽しみでもある今回の旅行なのだ。

SMブームは映画、写真、本だけでなく、ホテルにまでその範囲を拡げつつある。

二人の密やかな愛の形であったS&Mプレイは、ホテル備え付けの座椅子やテーブル、柱を使って工夫をしていたものだが、今では革拘束具、鞭、鎖、各種の責め具迄も備えたSMルームが誕生し、全館、全室SMの間というホテルすら出現している。

SMプレイといっても、プレイ内容、趣向は各人共異なりプレイ歴十年を超えるベテランから、縛れる恋人を得たばかりという初心者迄さまざまである。ただ、その多くは愛ある故の行為であり、プレイというより「ゲーム」に形態を酷似させている。幼い頃に誰れしもが経験した「お医者さんごっこ」「泥棒ごっこ」「探偵ごっこ」等の「ごっこ」に近



いといったら語弊があるだろうか。

そのこととは若干異なるが、SMプレイといっても、愛を根底にしてのプレイばかりでなく、相手のことを無視して、個人の愉悦としてのみ行うプレイがあることも事実である。

何れにせよ、プレイそのものの醍醐味は、それを行い、味わった者でなければ知り得ない妙味といっている。何の趣味にも増す高尚な趣味でもある。

新大阪駅から大阪駅迄電車に乗り、そこで環状線に乗り換えて二つ目の桜の宮駅で下車する。東京都内を走る山手線の各駅に比べれば小さく、私鉄の郊外の駅であるかのような印象を受ける。それでも浪速の香りがそこはかとなくしてくる。

そんな浪速の香りの中をゆっくりと歩を進めていくと五分程でホテル街で形成されている中野町二丁目に着く。

東京と違い、大阪のホテル入口はキャバレーの入口ではないかと思うような明るさである。浪速ではホテル利用は二人の密会場所ではなく、堂々と入るビジネスホテル位に考えているのだろうか。

智子を伴ってプレイをしようというホテルもそうなのだろうかと不安になったが、その

懸念は杞憂に終わった。

入口にケバケバしさは無く、人目を忍んで入るに抵抗を覚えない配慮があつて、外観以上内装、設備に金をかけていることが素人目にもわかる。

昨年十一月四日にオープンしたばかりのホテルエンペラーだが、その設備と内容のユニークさは浪速随一といっているだろう。

小さいながらもよく手入れされてある植込みの小径を通って館内に入ると全二十三室の趣向をこらした室内を映し出しているパネルが目にとまる。点灯して、室内を映し出しているパネルの中から、好みの部屋をリクエストすることができ。

部屋は和風、洋風の二タイプのSMルームから、スワップ（夫婦交換）専用ルーム、十人程の男女が一堂に介してディスクを踊り、乱交パーティーもできそうなフロアを備えたディスプレイルームが目につく。この三種類の部屋がホテルエンペラーのスペシャルルームという。

もう少し詳しく説明すると、スワップルームは寝室に円型のダブルベッドが二つ並び、枕元には照明の点灯、照度を好みにコントロールできる光量調節装置。洒落たデザインの

電話に、バイブレーターが置かれ、ムードミュージックの流れる中でスワップを楽しみたい人には適当な音量が調節できる装置も使い易いようにセットされている。

また、四十二インチの大型スクリーンを持つテレビがベッドから見易い位置にあつて、テレビ番組はもちろんのこと、スペシャルルームに限らず、全室で、好みのビデオを選択し、見る事ができる。そのビデオテープも現在百種が完備しており、SMから娯楽もの迄レパートリーは豊富にあつて、単にベッドインのみの目的で利用する時代は去り、新たな活用法をエンジョイする時代に入っているようだ。

バスルームも広く、黒いホーローの浴槽が大理石の幅広い縁に囲まれて二槽が並んでいて、落ち着いた雰囲気の中にも煽情的な気分をかもし出す。洗い場も広くとってあり、七八人が同時に入浴してちょうどいい。

スワップルームが夫婦の落ち着いた年令にふさわしい雰囲気ならば、同じスペシャルルームでも、ディスプレイルームは、若者の部屋といえる。六、七人が楽に踊れるフロアの上にミラーボールが回り、ネオンが点滅をくり返し、フロア横の壁は鏡状になっていて踊りま





くるのに何の不足もない。

フロア横にはデイスコミュージックの入ったジュークボックスがあり、カウンターから椅子、ビデオカメラ迄が使用できるようになっている。大阪、いや、日本広しといえど、

ホテルにデイスコルームを備えているのはここホテルエンペラーだけだろう。

もちろんホテルである以上、ベッドルームも備わっているのは当然で、大きな円型ベッドが壁をへだてた隣りの部屋にあって、床は柔らかなジュウタン敷きである。

バスルームもデイスコで踊り、汗をかいだ全員が入れる程のスペースがあり、浴槽は黒のホーロー製で円形型である。

生まれたままの姿でデイスコを踊り、気の合った男女が絡み合い、乱れる様はバックカスの饗宴を彷彿させるものがある。もちろんソシアルダンスやチークダンスを楽しむこともできるし、使い途によっては、女体競り市の舞台にしてみても面白い。周囲に男性を配し縄掛けされた女を競り合うのである。ミラーボールが回り、スポットライトを浴びた女体が白く浮き上がる様は異様であり、興奮を呼ぶことは間違いない。

どうも全てをSMプレイに関連付けて考えってしまう癖が私にはあるようだ。

好みの部屋の映し出されているパネルのところにあるスイッチを押すと案内板の文字が点灯し、その部屋までを誘導する矢印が点滅する。その矢印の示す方向に進んでいけば、

選んだ好みの部屋に入れるシステムになっている。

ホテルの従業員と顔を合わせる必要がないようにできているのも、利用し易い原因のひとつのようだ。

SMルームは五階にあり、501号室と506号室の二部屋である。501号室が洋風SMルームで、506号室が和風SMルームとなっている。

プレイルームには各種の責め道具が揃っていると聞いてきたが、やはり、いつも使い慣れている小道具や縄には愛着も強く、持参してきた。

私自身としては和風の風情ある部屋や調度品を使い、黒髪の長い女を縄で締め上げ、時間をかけて責めるのが好きなのだが、智子にはそうした日本古来の女の持つ風情は無く、現代的な好き嫌いののはっきりした女のイメージが強い。

私は迷うことなく洋風SMルームを選び、パネルのスイッチを押した。

五階に案内する文字が点灯し、文字が記すままにエレベーターで上へ行き、矢印の点滅する方向へ歩き、目指す部屋へと到着する。

智子は新幹線を降り、目指すホテルエンペ



ラーが近付くに連れて無口になり、S M ルームに入る頃は観念した囚人のように寡黙と化していた。

ただ、目だけは隙あらば挑んでいくぞというような輝きを失っていない。

反発、反抗心のある女を思いのままに従わせるといのは調教の醍醐味といえよう。それも鞭だけで従わせるのではなく、愛という甘い餌との使い分けで意のままにするのが調教する人間の腕である。

私は疲労をとり、筋肉を柔らかくし、皮膚を敏感にさせる事を目的に、必ずといっていい程、女に入浴をさせる。

もちろん、汗等で汚れた肌をきれいにし、仕える男性の為に淋浴するのが隷女のつとめであり、常識だと言いつくかしているが、その実は、先に述べた事由によるもので、緊張感をほぐす効果も兼ね備えていることは言うまでもない。

「風呂へ入ってこい」

そう命じた後、私は洋風S M ルームの設備や備品に目をやり、これからはじめようとするプレイの構想、筋書きを練りはじめる。

プレイルームとベッドルームの境には鉄格子が嵌め込まれ、煉瓦模様の壁には革製の真

新しい拘束具が架けられ、平井の太い染には吊りができるように鉄輪が打ち込まれ、その下にはレザー張りの木馬が置かれ、その横には羞恥責めに使う為のミラーが磨きこまれてある。長方形のプレイルームの一方には洋式便器があり、その斜め後ろの壁にはシャワーが設備されている。床は水を流してもいいようにアクリル樹脂製になっているものの、水を流すと滑り易い為、注意が必要だ。

壁には木製の十字架が手枷、足枷の革具を装着してある。

鞭も一枚皮の平たく長いものから、九尾の猫鞭に似たもの、乗馬鞭、丸鞭と種類もあつ

て、鞭好きなマニアにはこたえられない。

ベッドルームに置かれてあるベッドは正方形で枕もとの照明、音量、テレビ操作盤の一边を除き、三辺にはステンレス製パイプが張られ、ベッドで女体を固定できるようになっている。

一通り見てまわった私はバッグから縄と蠟燭、バイブレーターを取り出し、準備に取っ

かかった。智子がバスルームから出てきたのはこの時で肌は艶やかに光り、顔は赤く上気して、スリムな肢体が若さを感じさせている。

「さっきのセーターとスカートだけ着けてプ





レイルームの中へ入りなさい」

「素晴らしいおいて必要な小道具を持った私は  
智子の後に続くようにして鉄格子の中へ入っ  
ていった。」

鉄格子を閉め、十字架の前に立っている智  
子を正座させると、誓いの言葉を暗誦させる  
べく、その前に立った。

「智子は御主人様の命令に従い、服従する事  
を誓います。何でも御命じ下さい」

目をつむり、何でもないのでのように暗誦す  
る智子の表情だが、感情を押し殺している様  
子が伝ってくる。

それが気付かぬような振りをして智子を立  
たせ、着衣のまま十字架の手枷、足枷に繋ぎ  
とめる。その姿を眺めながら、俯向き加減に  
して口を閉じている桜色の唇を強引に割って  
縄轡を噛ませてみた。きれいに並んだ白い歯  
の間を縄が入り、被虐感を昂める。その時の  
智子の表情は観念しきった女を感じさせ、愛  
しさと嗜虐心を掻き立てずにはいられない。

私はセーターをたくし上げ、細身の体にし  
ては大きな乳房を露出させ、やおら手の平に  
包みこみ、揉みしだいて見る。固く張りのあ  
る乳房の感触がそのまま伝ってくるのも心楽  
しい。柔らかく、時には力をこめて揉む事十

数分で次第に息遣いが荒く乱れてくるのがわ  
かる。

それを確めながらスカートをまくり、下半  
身をいきなり掴み、力を加えて指を動かして  
みた。

「ウヤツ（イヤツ）」

といい、首を左右に振って拒否する。

「うるさい！これ位で何だ！」

「素晴らしい様、スカートを乱暴に外し、豊か  
な双の乳房に平手打ちを加えた。」

「ウイヤツ（痛っ）」

「そう声を上げ、顔を外向けた智子の髪を掴  
み、」

「未だ素直になり切れないようだな」

といいながら、両手首の枷を外し、セー  
ターを脱がせると、革製の乳房狭窄を目的とし  
た革製ブラジャーを装着し、再度十字架に両  
手首を固定した。

富士山麓に泊まりがけでプレイ旅行をした  
時に剃毛した恥毛は生え揃いかけている。

「無駄毛が生えてきているようだな」

「そう言いながら開脚固定されたままの下腹  
部に手をやり、生え具合を見るかのように  
まさぐり、生え際を辿ってみる。やや固めの  
恥毛が指の腹にあたり、決して手ざわりがよ  
いとはいえない。」

「智子は私のこうした言葉や行為が何の意味  
しているのかを察知し、不安げに私を見、体  
の動かせる範囲で身をよじって、私が次に行  
動しようとする事が、嫌であるとの意志表示  
をする。」

私はその姿を無視し、ベッドルーム横に置  
いたバッグの脇からT字型のカミソリを取り  
出し、シェービングクリームの容器と共に隠  
す術もない智子の前に立って見せつける。

眉をひそめ、轡をはめられた不自由な唇を





寄せて、このおぞましいものが失くなってしまえばいい——といわんばかりに見下す。

剃毛は羞恥責めとしての効果を持つ。恥毛があることによって隠されている花芯が露わになる羞しさばかりでなく、剃られてしまうことに対する畏怖感も加わって、惨めな自分を否応無しに見せつけられることになる。

自身で剃るならばともかく、男性に時間をかけて剃り上げられるのは、歳若い女にとって、これ程の屈辱感を覚えることは他に無いのではなからうか。

ジリリッ、ジリ、ジリ、T字カミソリが動く度に切りとられた恥毛がシェービングクリームの中に浮き上がり、丸味を帯びた肌が露出してくる。

「体を動かすんじゃない。動けば切れてしまうこと位知ってるだろう」

冷たく言い放って剃り終えたばかりの肌をつまみ上げ、深奥部が剃り易いように手前左へ寄せる。

時間にすれば十分とかかっていたはずだが、智子にしてみれば一時間にも相当したようだ。

私はわざと花芯中央部の周囲だけを剃り残し、毛先を同じような長さに鋏で薙りそろえ

た。上から押せばチクチクとする位の長さである。即ち、股間に通した縄や、責め具があたり、その責めの効果が倍加することになる。

「奴隷のくせに御主人様のした事を不満に思ってるようだな」

隷女であれば、そんなつもりはありませんお許し下さい——という態度になるのだが、調教中の智子はその迄従順になり切れない。恨みともつかぬ目で私を見る。

「お前がその気なら、素直になる迄調教を続けなくてはならんな。そうだろう。ええっ、どうなんだ」

横を向き、それに答えようとしないう智子の乳房を中心にSMルーム備えつけの鞭で右から、左からの区別なく叩きつける。

ビツ、ビシツと鞭の先端が肌に当たる度、乾いた音を立てて部屋に響く。

「ウツ、ウウツ、ンツ、ウグツ」

唇にくいこんだ縄を噛み、痛みに耐えながらも素直に従う気配は見せない。智子の白い肌は鞭が当たる度に湯上がり肌の肌を思わせるように、鞭の形通りに赤くなっている。

自由に動かせる首、肩、腰だけが踊っているかのようには左右に振られ、半円を描く。

ハッ、ハッ、ハッと息遣いが荒くなっている。見ると、手枷の先の手首は固く握られ、爪が喰い込んでいる親指のつけ根は白くなっている。鞭の痛みに耐えた様子が伺える。

ひとしきり鞭で打ち据えた私は、蠟責をする事にした。熱蠟といっても、炎のすぐ横に押しつけるように滴らす場合は別にして、ある程度の距離を置けば思う程熱くないが、鞭で打たれた肌は傷口のように刺激には敏感となっている。特に痛みや、熱に対しての皮膚感覚は鋭敏である。

それを十二分に承知して蠟責を行おうというのである。

息遣いの荒い智子の顔の直ぐ横で赤い蠟燭に火を点け、芯の周りの蠟が溶けるのを見守りながら、液状になった蠟を無表情のまま、革製ブラジャーから押し出されるようにして突き出ている乳房の上へと滴らせた。

「アウーイッ（熱ーいっ）」

声と同時に鎖も切れよと渾身の力を込めて逃げようとする。想像以上に熱く、肌にこたえたのだろう。

「どうだ、智子、少しは素直になる気になったか？」

そう言いながら熱蠟から逃げようとする智



子の乳房を中心に次々と蠟を滴らせた。

「アウイツ（熱い）、ウヤツ（嫌っ）ウヤツ（嫌っ）」

一心に逃げようとする智子の額からは汗が滲み出し、手足を引っ張っている鎖はギシギシと音を立て臨場感を盛り上げる。

私は滴る蠟燭を片手に持ち、もう一方の手で智子の髪を掴んで引き起こした。

「どうだ智子、素直になるか？」

「フー、フー、フーッ、フイツ（ハイッ）」

「よし、そうか。本当にそうかどうか試してやる」

火の点いた蠟燭を床に立て、智子の両手、両足を繋ぎ留めてある枷を外し、床に崩れ落ちようとする体を抱きとめ、後ろ向きに立たせ、両手両足を先程のように大の字に繋ぎ留める。

「尻をもっと突き出すんだ」

私は床に立てて置いた先程の蠟燭を手に持ち、突き出した尻に蠟を滴らせた。

「ウウツ、アウイツ（熱いっ）」

悲鳴は上げるが、抵抗の気配はない。

「ようし、嘘じゃないようだな。さあ、解いてやろう」

そう言いながら手枷、足枷の順に外し、し

ばしの休息を与えてやる。

横座りのまま、片手で上体を支え、息付く女の姿態は美しい。

首をガクツと前に倒し、肩で息する姿は女故に色っぽい。

「智子、立てっ」

そう命じながら智子の腕を掴み、シャワーの下へ押しやるようにして立たせ、革製のブラジャー姿のまま、体に温水シャワーを浴びせ、肌に張りついたままの蠟を剥させる。

体には先程の鞭跡が生々しく残っている。

「そんな蠟位さっさと剥せなくてどうするんだ」

「はい……」

そういう智子の目は心なしか潤んでいるようだ。

私はバスタオルを持ってきて智子の体を拭いてやり、ひと通り拭き終えたとバスタオルを体に巻きつけるようにして、そのまま抱きしめてやる。

目から涙が溢れて流れ落ちるさまは女になり切れない幼さを感じずにはいられない。

「まだお前の調教は終わってないぞ」

の声に、コクンとうなづく仕草は愛しさを覚えずにいられない。

「さあ、脚を開いて」

「ハイ……」

「もっと開くんだ」

私は智子の脚の付け根を押し開くようにして卵型パイプを花芯奥に埋めこみ、壁にかかっていた革製の貞操帯をはかせ、両手は後手に組んで縛り上げ、卵型パイプのスイッチを入れた。

ブーンと鈍い振動音が響いているのがわかる。

「アアッ……」

小さな鳴咽が形よい唇から洩れてくる。

「こっちへ来るんだ」

振動に耐えながら立ちすくんでいる智子の首筋を掴み、レザー張りの木馬の横に連れてくる。

「ここへ乗るんだ」

そう言いざま智子の腰を抱くようにして木馬の背にまたがらせる。

股間が馬の背というよりも首筋にあたり、時代劇によく見られる、女が前に乗り、男がその女を抱えるようにして後ろにまたがれる雰囲気である。

馬の轡にかかっている足枷をはめると体の重心はいやでも股間でとらねばなくなる





子である。

「そんなに動くんじゃない！」

わざと冷淡に言い放ち、サーカスの猛獣使いが用いる一本の丸鞭をブレイルールの壁から外し、空を切ってみる。

ヒュツと鳴くような音が部屋に響く。その空を切り裂く鋭い音に弾じかれるように私の元を体を捻じって見た瞬間、次の打ちすえる獲物を探して宙に舞っていた鞭が柔らかな智子の背から腹へ絡みつくように音を立てて吸いついていった。

「痛ーっ」

「もう一回だ」

「アウツ、クーツ……」

「それっ」

「アア、イツウ……」

さすがにこの鞭の痛打力は大きい。卵型パイプの振動等はどこかに忘れたかのような痛みが体中に走ったようだ。

「どうだ、こたえたか。ええっ？」

「ハ、ハイ」

私は智子の背後から腕をまわし、顎にかけて後ろへ引き倒す。馬の背に寝るようになった形だ。

「どうれ」

といって私は鞍の代わりに智子の太腿に手をかけ、はずみをつけてまたがってみる。ちやうど智子の腰の上あたりが私の尻の下になった。

「ウウツ」

嘆息とも、喘ぎともつかぬ声が洩れ、その響きが私の尻に伝ってくる。

「ソレッ、ソレッ」

馬に声をかけるかのようにして、わざとはずんでみせる。その度に呻く声がして私の尻に伝う。七十キロの体がきしゃやな智子の腹の上ではずむのだから相当こたえたようだ。

智子を木馬から降ろし、革拘束具を外してやる。いい加減こたえたのだろう。私の為すがままである。

ぐったりしている智子の体を乱暴に起こし容赦なく縄をかける。やはり私は縄派なのだろう。一本の縄が綾なす紋様は智子の白い肌と相俟て美しい。

縄掛けといっても夫々に趣向があるように雁字搦めを好む人もいれば、私のように女体の特長を活かすような効果的な縛りを好む人もいる。

やはりプレイを行う中にも、女体を玩弄する事を取り入れてみたい——そう思うからか

のは当然である。また、体重が一番加わるのも股間で、そこに卵型パイプが微妙な震動をしているのだから、それだけでも疼くような責めになっている事は間違いない。

それを裏付けるように腰を右に、左へと動かしながら、疼きを回避しようとしている智





もしれないが、玩弄するに邪魔となる縄は掛けようとはしない。

智子もどちらかといえば縄による拘束が肌に合うのではないだろうか。縛り易いように自ら体を動かし、腕を動かす。

縛り終えて床に転がる智子を改めて眺めると、縄の間からこぼれる乳房が前のブレイに比べ、ひととき大きく広がっているようだ。それを確かめてから乳房の片方を掴んでみる。

乳房の中のしこりの固さを今更ながら感じる。掴んだ力を柔らげ、揉むようにしてまさぐると確かに大きくなっているのが手の平の感触を通してわかる。手の平で包み切れないほどのふくらみは男の欲情をそそる恰好の材料である。

疲れ切っている智子を見捨てるかのようにパワーアップした男根型のバイブレーターを取り出し、スイッチを入れ、更に強弱スイッチを強にする。

グイングイングインと力強い振動音を響かせて伸縮を繰り返す。

私は片手を智子の肌にあてがい、優しく愛撫をはじめ。その指にからみつくような智子の肌がしっとりと濡れてくるのにそう時間はかからなかった。首を無意識に右へ、左へ

と振るようにして、唇は心もち開き、白い歯が濡れて光り、時折り、嗚咽に似た声と共に淡紅色の舌が動く。

忘我境への道を辿りはじめた智子を確認した私は静かに挿入をしていた。一瞬、ピクンと体を震わせたまま、バイブを深く飲みこむと体は小刻みに動き出し、いつか腰を浮き上がらせて円を描くようにして振り出す。それが徐々に激しく動いてくる。

私は智子の顔を両膝ではさみ、動かぬように固定すると唇を開けさせ、腰を落としていく。

「ウウツ、ウグツ」

「舌を使うんだ」

そう命じて体を重ね、バイブの振動が最も敏感な部分に当たるように位置を直す。強力バイブの振動が私の目の前にあって、目と耳がそれを感じる。

智子は必死に舌を動かし、吸い、舐めまわす。こんなに上手かったかと思う程の舌技である。

喘ぎと激しく身を揉む音が一段と昂まり、そして静寂が訪れた。

バイブの音だけが残っていた――。



# 

- ★ 愉芽サロンに投稿される方はこの投稿原稿用紙を御利用下さい。縦書きで、。は1字分として使用願います。
- ★ 同好の士の交歓交流の場として開放します。但し、掲載不適當と思われるものについては掲載致しません。



|      |   |         |  |    |  |    |       |
|------|---|---------|--|----|--|----|-------|
| 本名   |   | 年令      |  | 職種 |  | 現在 | 独身・既婚 |
| 住所   |   |         |  |    |  | 〒  |       |
| プレイ歴 | 年 | 嗜好プレイ内容 |  |    |  |    |       |



# 読者風信



## ●写真の角度を工夫して

埼玉 中田和也

前略。私、二十九歳の独身男性です。以前から、貴誌拝読いたしております。

後に御意見、御要望とありましたので、お願いを書いてみました。

私は、モデル希望のM男です。SM歴十年ですが、おもに一人でプレイしておりました。モデ

ル体験、雑誌掲載等のプレイ経験は5回ほどあります。

好みのプレイは、逆さ吊りと緊縛プレイです。他の人が手がかさなければ、自分ひとりではどうすることも出来ないプレイはぞくぞくさせられます。

今まで、女性運がないことを残念に思い過ごしていましたが、雑誌で自分と同じ気持ちの人がいることを知り、嬉しく思いました。

全裸にされ、男たちに見られ

黷られる女性、うらやましく思います。私もあのようにされて、自分も縛られたい。しかし、内気なためか自分の心の中だけで罪悪感にかられ、変態なのだと思ひ込み、悩んでいたこともありました。今では、SMという言葉も知られ、同好の士も増えて喜こんでいます。

貴誌の群虐創刊三号は、モデルも良く、全体にまとまっているという感じなのですが、今一つという気がします。写真の角

度が、やや下からのものが多いという感じで、この場合、逆さ吊りにされた女性の全体が入っていない、足が切れているのが多いのが残念です。そして逆さ吊りの場合の手の縛り方ですが後ろ手にされている方が迫力があり良いと思う。他誌の吊りと比べて、高台に吊られて良いと思うのですが、あまり縄をかけるカッツもほしいと思う。

貴誌にお願いいたします。モデル、その他助手なんでもやります。私の車で、埼玉の山中の撮影所へも御案内させていただきます。とりとめなく書いてしまいましたが、ぜひ御返事を下さい。心よりお待ちいたしております。

## ●細工なしの写真を

吹田市 小谷公一

前略。今度貴社発行のSMグラフィ誌を購入いたしましたので、大



変喜んでおりますが、残念ながら細工のあとが邪魔をして、折角の良い所が見えません。

他社にしても、貴社同様なのですが、その事情は良くわかっております。しかしながら、愛好者にとってみれば、たとえそのものズバリでなくて、透かして見える物であってもやはり、興覚めしてしまいます。

他社製品に対して、このように御無理な御願いを致しまして、二、三心よくお受け頂いた所も御座居ます。すなわち、細工のしていない無修整の写真がほしい訳です。御手許に、この種の写真及び、写真集等数多く有ると存じます。細工のしていない写真御分け頂きたく存じます。御値段等詳細御知らせ下さい。出来ますれば、写真見本供よろしく御願い申し上げます。

当方、一人で楽しんでいる者、他意はありません。御安心下さい。是非よろしく。

\*

※このように、写真分譲を願う手紙が届けられますが、残念ながら御希望に添いかねます。当社では、無修整写真の販売は致しておりません。

### ●フェティシズム主義者

山口 秋吉 学

編集部の方へ。別冊スペシャリーS&M群虐創刊3号を見ました。中でよかったのは、隷女同性愛虐馴致中の所と、鼎責両花芯晒し、野外調教への出達の最初の五頁です。

私達は、フェティシズム主義者ですが、(フェティシズムとは、異性の衣類・装身具などによって性欲を刺激する事)男の多くはそう言うことが出来るでしょう。そのうち多いのが、下着、靴、衣類、鞆類なのです。

ただ、女の裸を縛ったのでは一度で見飽きます。読む方とし

ては、女に衣服を汚させたり、靴を汚させたり、それで責めたりするものを期待しています。

たとえば、隷女同性愛虐馴致中や野外調教出達などのように、女に衣服を着せ、パンプスやサンダルを最初から最後まで履いたままのプレーはどうでしょうか。パンティやパンストが、足首の所で丸まっているのは性欲を刺激します。責め道具も、女性の身につけているもので、やってみたらどうでしょうか。

ワンピースやブラウスをロープ代わりに、性を締めつけたり、衣服で捏回したりしてはいかがでしょうか。パンプスやサンダルは、つま先やヒールのかかとを使うのはどうですか。

場所は、夜の山中・夜の納屋夜の土間・夜の公園の共同トイレなど性欲をそそるような所でやってほしい。

衣服は、ワンピース・ブラウス・スカートにかぎる。同封の

写真のようなOL風の衣装で、男が見て汚して見たいと思う可愛いもの、パンプスやサンダルも性欲をそそる色形を選ぶ。

衣装は人数の倍用意し、一組は責め道具に使う。浣腸排便の時は、パンプスを下に置きその中にさせる。バイブレーターに代わりに、ヒールで捏回す。靴はアルコールで消毒すれば、害はなく最高の責め道具となると思います。

気に入ったOLを、その子の衣服や靴などで、嫌がるのを無理に責めてみたり、無理矢理放尿などで汚させて見たいと思っています。しかし、現実には出来ない。そう言った話を、時々聞くことがあります。それで思い切って投書してみました。私たち個人として、現実には出来ないけれど、せめて本の中だけでも実現させてください。お返事をお待ちしています。



## ●女角力に感激

大分 宮沢和浩

スペシャリーS&M13号を、知人のところで拝見いたしました。素晴らしい女角力のフォトが出ていたので、是非欲しくなりました。

しかし、当地のような田舎では、なかなか売っていない様です。

ビニール袋に入っているの、内容はよくわからないけれど、知人も表紙に「女角力」とあったので買うことが出来たと言っていました。13号以外に、女角力の出ている号はあるのでしょうか？

今後も、女角力の記事やフォトが出たら買いたいと思います。が、何しろ北九州か福岡へ出かけて探さねばならない有様です。女角力には以前から興味を持ち色々探しているのですが、な

かなかありません。六尺禪のフトなどが出ると、その本を買っています。今一つ面白くありません。その点、スペシャリーS&M13号のフォトは、素晴らしいと思いました。禪(まわし)が、大変良いと思います。また、禪のずれ上っているところが、いかにも女らしく感じました。

## ●女角力ファン

高槻 M・K生

山谷秋人様。

スペシャリーS&Mの第13号に女角力が出ていて、非常にいいものでしたのでお手紙しました。スミなどで書くのと老年のようですが、そうではありません。

女角力は、奇譚クラブ廃刊以後真面目に取り上げてくれるところがなく、ナンセンス物で六尺禪の写真など出ておりますが不満なものでした。13号の場所といい女力士嬢といい、雰

囲気といい、誠にすぐれたものです。とくに六尺禪でなく、締めている禪がまことに角力として立派で、こういうものはかつての「奇ク」の分譲写真にしかなかった貴重なものです。その他公刊物では、団鬼六氏監修の「愛奴・I」(芳賀書店)のものが、正式に角力禪を締めたものは出ていません。非常に貴重なものです。

小生、スペシャリーS&Mは毎号見かけなのですが、ビニール袋で包んで売っており中味が判りません。どうか今後も、こういう女角力を取り上げてほしいのですが、その時は表紙に、その記事、写真のあることを印刷して下さるようお願いいたします。

同封のイラストは同好の先輩が入手しているものをコピーしたもので、御参考までにお送りします。

御発展を祈ります。

※現在までの処、スペシャリーS&M13号以外に、女角力を掲載しているものはありません。女角力に関しては、大分の宮沢様や、高槻のM・K生様のようになんまりの御意見を頂き、編集部一同、誠に嬉しく思いました。今後、順次に女角力の記事を掲載していこうと思っておりますので御期待下さい。

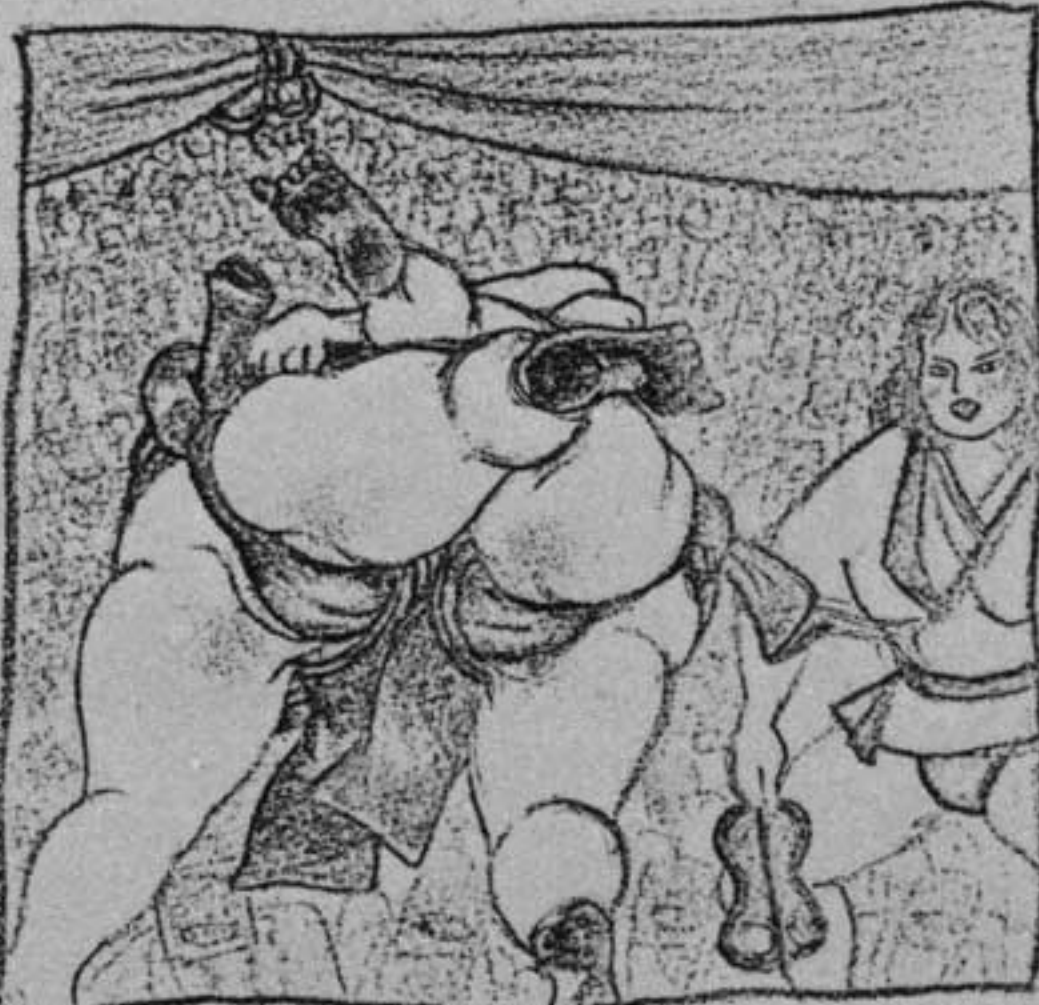
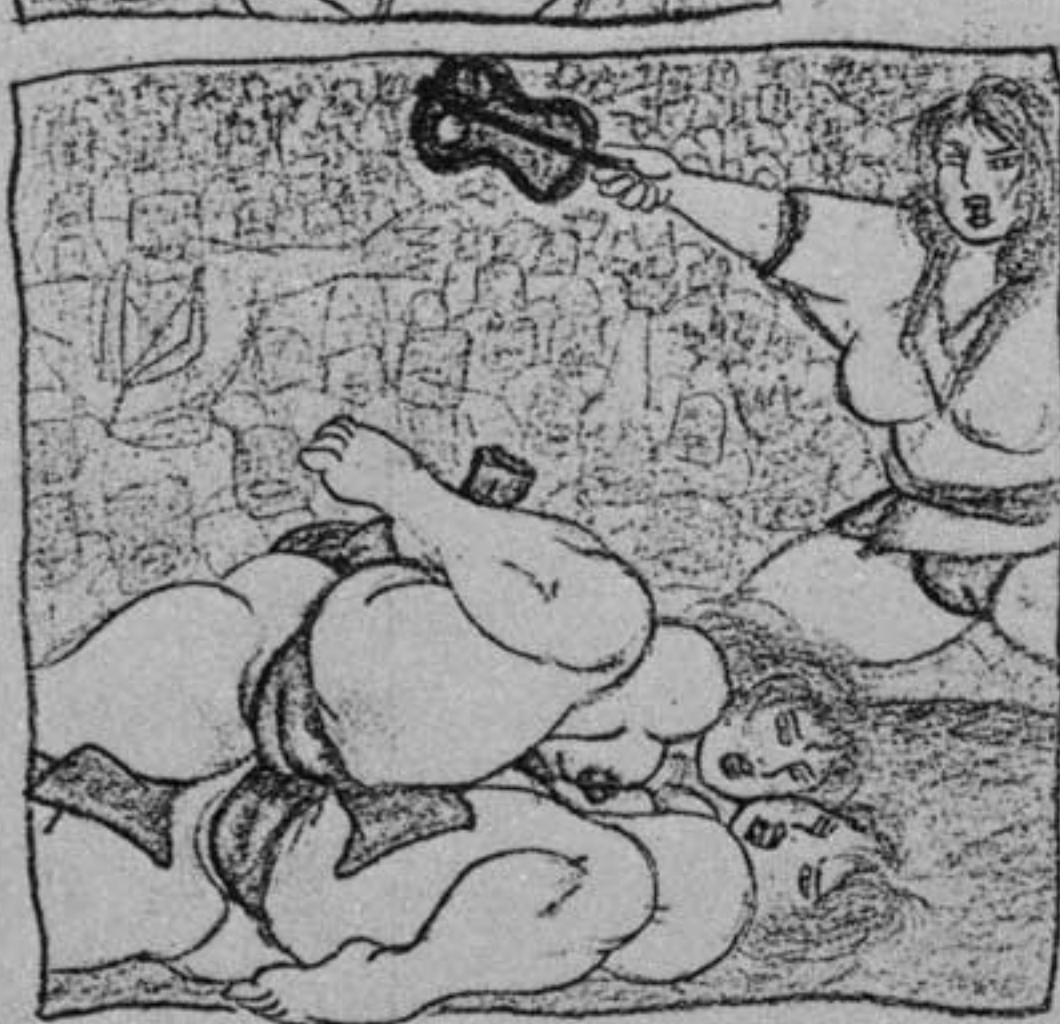
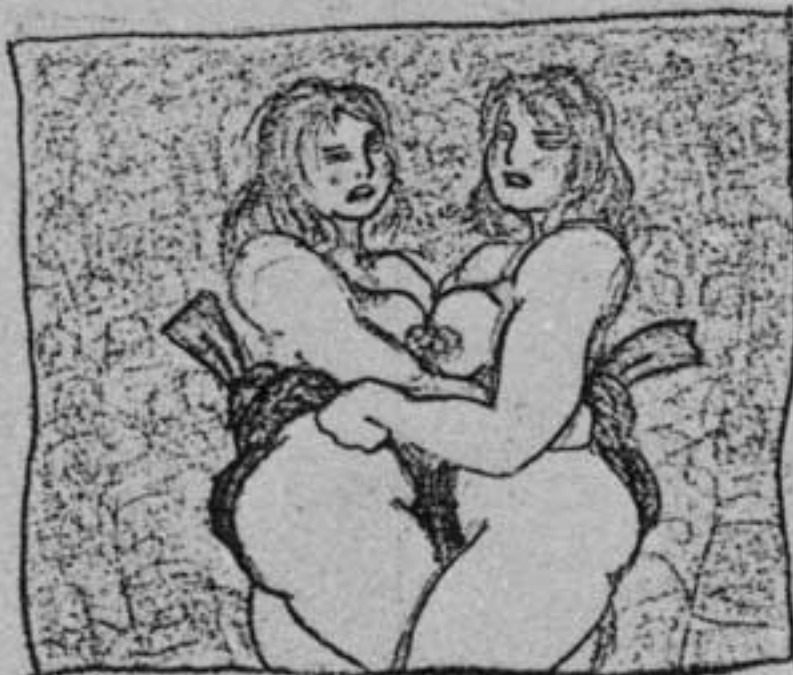
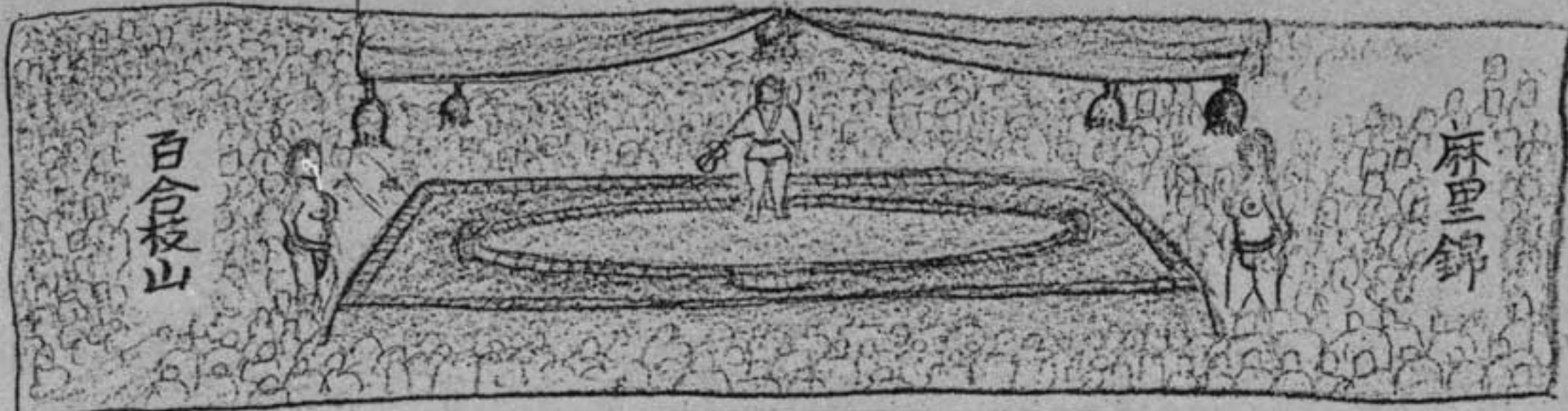
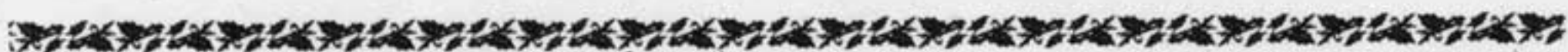
## ●ごまかしでなく本物を

旭川の孤独なブ男

前略。私は二十七歳の男性で、ビニール本の大ファンです。アドバイスをしたのですが、是非聞いてもらいたくペンを取りました。

女性が小便をしている本を何冊か講入しましたが、どれも後ろからホースを引き、さも本物のように見せていますが、ごまかしはすぐわかります。今のところ女性自身まる出しは禁止で







すが、隠していれば本物の小便を大胆なポーズでも差し支えないのではないのでしょうか。それともモデルがいやがるのでしょうか。なお一層の興奮をさせていただきたくお願いしたいと思います。そして、可愛くてスタイルのいい女性を起用してほしい。

又、私はマゾ的な要素があるようです。是非だれもがオナペットにしたくなるような若くて可愛くスタイルのいい女性を起用して、男が女の足先等に舌を直接当てたり、口に含んでいたりとといったポーズや、女性自身やアヌスに本当に舌を当てたり、口に含んでいるところとか、アヌスの穴を指で広げているところをアップで撮ってほしい。女性が男性をまたいで立っていたり、しゃがんだりしたポーズを撮って下さい。

また、本当に小便を顔にかけられたり、男性が仰向けになり

口に受けているところや、顔を踏つけているところ、胸などにながって立ったり座ったりしたポーズ。男の口の部分にまともに女性器やアヌスを当てて、後ろ向きや前向きに腰かけていたり、男の首を片手あるいは両手で締めながら女性器やアヌスをなめさせたりしてほしい。(可愛くスタイルのいい女性二、三



人がかりでもよい。) 男性の顔や口の中につばきをはき掛けたり、男の喉仏をけとばしているところや、本物の下痢を男の胸の上などでしているところを写してほしい。たしかに、男性には大変だと思いがトイレや浴室ならすぐ洗い流せると思う。

又、少女ヌードの本が出てくるようだが、毛がはえていないと無修整でもいいようですね。そこを見込んで、なるべく成長した可愛くスタイルのいい子を起用し、(なるべく日本人で)、大股を開けているところとか、あそこを指で広げてオシッコをしているところなどは是非お願いしたい。

最後をお願いしたいのは、ポルノ云々という、昨今のチャンスを利用し、早く女性器が堂々と載ることを期待すると同時に、貴会社もこの種のものを扱っている以上は是非とも奮起し、こ

の要望に沿えられますよう切にお願いしたい。又、価格も極力抑えていただき多くの読者に愛され、ますます繁盛されますよう願ってやみません。

乱筆乱文、お詫び申し上げますと共に宜しくお願い致します。

● 獣姦物を……

兵庫 上田俊雄

前略。初めて手紙を差し上げます。私は三十歳の男性です。スペシャリーS&M及び、貴社の出版物の愛読者です。以前は「奇ク」を愛読していましたが、現在貴誌スペシャリーS&Mの一号以来愛読しています。これから今まで同様に「実」の有る出版物をお願い致します。

貴誌への希望を、一つ二つ記してみようと思います。まず、以前の様に、獣姦の手記並びにフォトも多く取り上げて下さい。レスビ안의SM物も企画して



下さい。編集部の方々に御願  
致します。

私も、何年か前からSMプレ  
イに酔いしれています。今のと  
ころ、相手は妻のみですが、マ  
ンネリ解消へと努力して居ます。  
又、妻の許しが出れば、プレイ  
中に取りました写真もお送り致  
します。又、妻並びに私も、ス  
ペシャルーS&Mの同好の一員  
に加えて下さい。今後、御指導

の方をお願い致します。

乱筆乱文で申し分け有ません。  
今後とも、現代SM誌の草分け  
として、御発展を祈ります。

●片隅にでも掲載して！

四国 佐渡生

ソフトSM愛好家で、モノク  
ロDPEで楽しんでいますが、  
これを機会に愚作ですが、写真



の投稿などお願いしたいと考え  
て同封してみました。貴誌の片  
隅にでも載せて頂ければ光栄で  
す。

貴誌の益々の御発展をお祈り  
します。

●初心に帰って

兵庫 真行寺勝

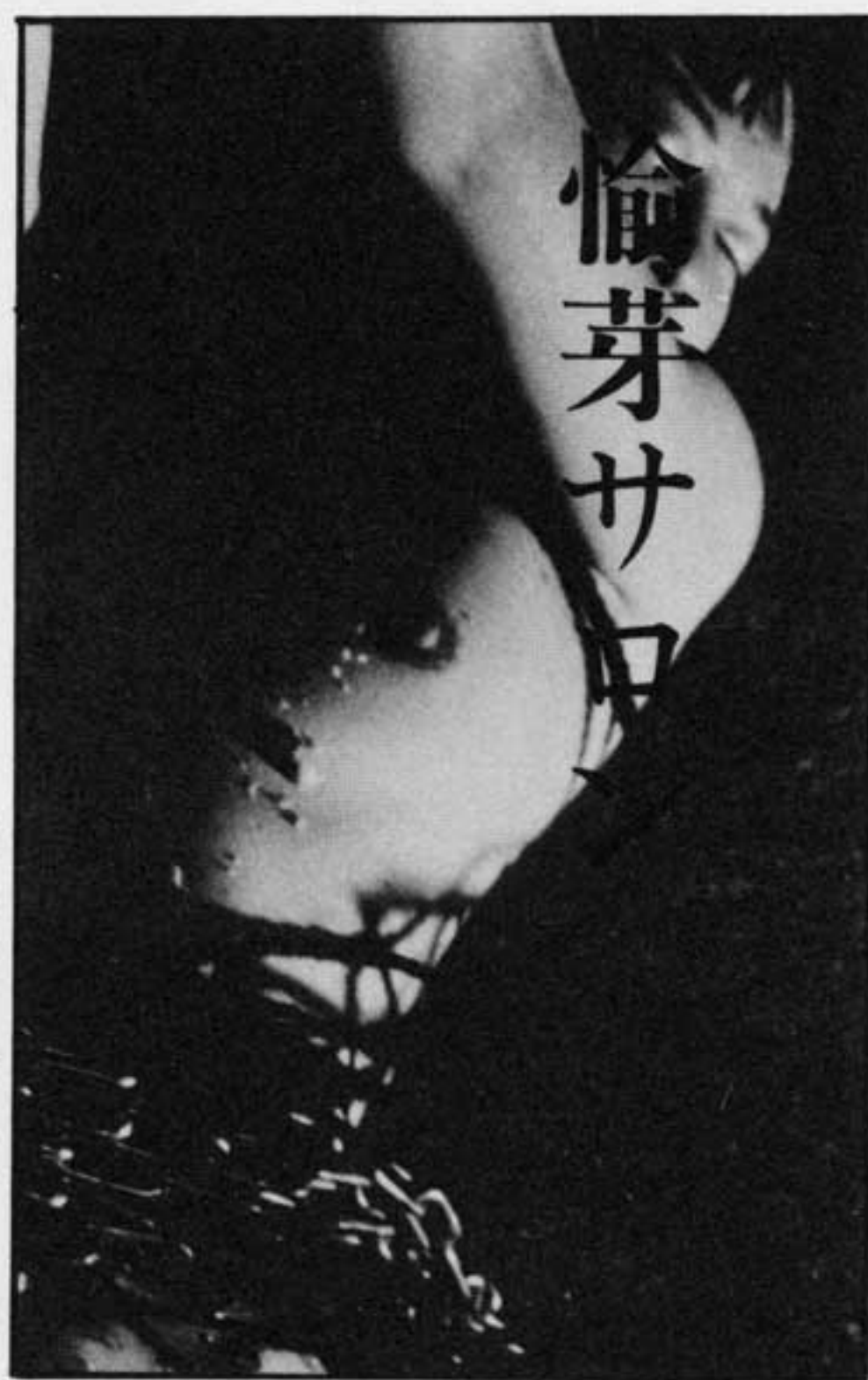
前略。

最近、スペシャルーS&Mで、  
小説掲載を始めたようですが、  
はつきり言って反対です。やは  
り昔のように、初心に帰って、  
本来の愉芽の追求をして下さい。  
今後を期待致します。

❖  
❖  
❖  
❖







広くSMの友人を……

堺市 大川恵三

私は、三十八歳。何よりもSMの好きな男性です。⑧のフォト及び、ビデオ他資料も多数有ります。近郊の御夫婦、又SMを経験してみたい女性の方からの御一報お待ち致します。私は自由業ですので時間は自由にできます。広くSMの友人を得たいと思つて居ります。13号フォ

ト交換希望の新川純一様他、フト交換希望の方からの練絡もお待ち致して居ります。尚、私の妻は3Pのみ経験済みです。

写真交換希望

三重 望月百合子

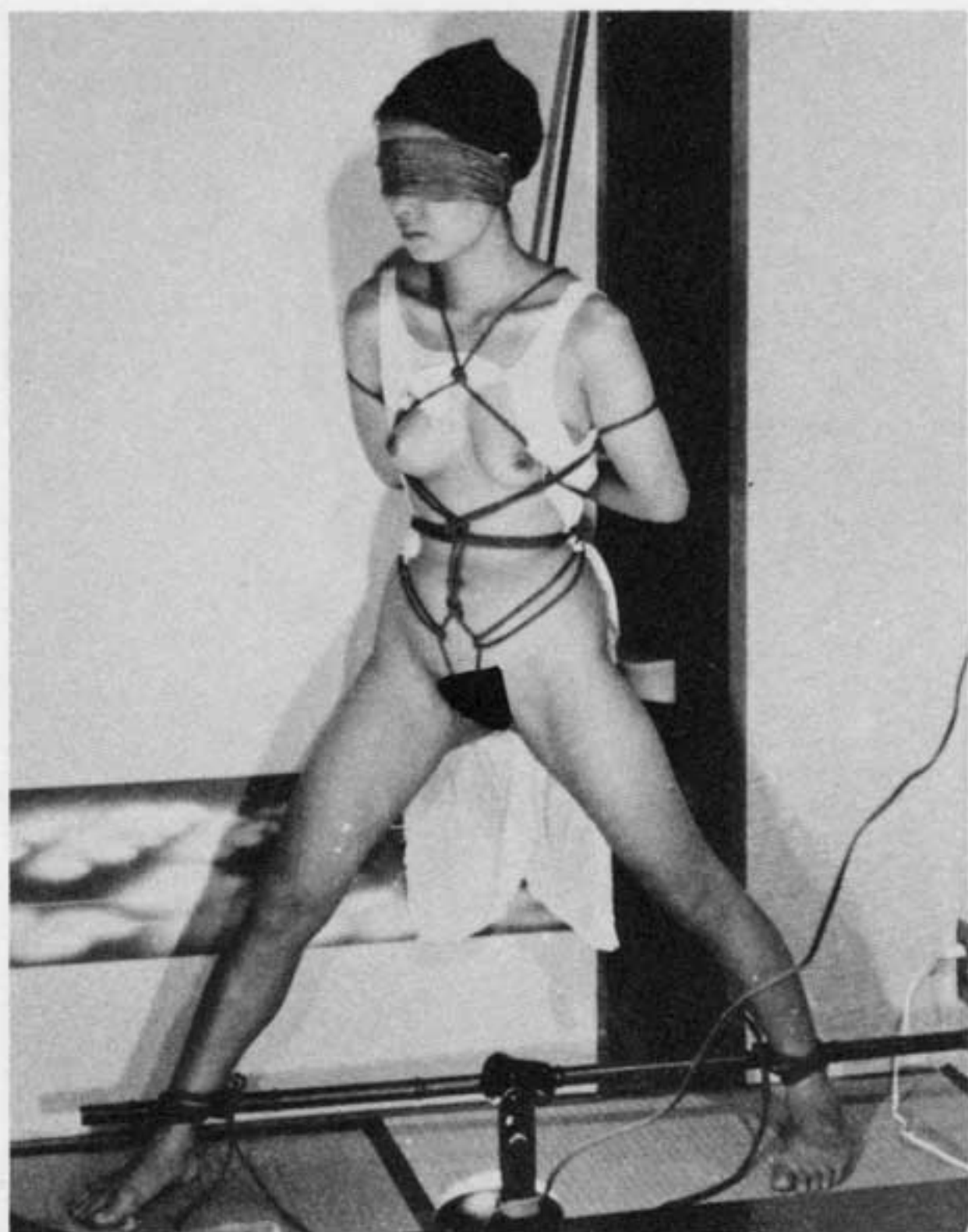
山谷様、私も毎号楽しみに拝見させていただいております。アナル責めの資料をお持ちの方、私の写真と交換して下さいませんか。私も三十歳を越し、

過ぎし日々を懐かしく思う今日この頃です。今までに数々行つてまいりましたプレイのフォトが増え、何方かと交換をと思つております。又、私にエッチな手紙を下さる方も願ひします。あくまでも、文通のみを希望します。

と考えております。残念ながら主人が病氣なのでプレイ参加は出来ませんが、手始めとして、愉芽サロンに出てみようと思ひ、お手紙差し上げました。そこで中島薫様のように、山谷様回送の手続きお願いしたいと思ひます。そして返送は、三重大作様あてに願ひします。これから、望月百合子を末永く可愛がつて下さい。 ◀望月様の御写真







## M女性求む！

仙台 原田修治

杜の都、仙台市に住んでいる三十三歳、身長一六七センチ、体重五四キロのS男性です。大手販売会社のセールスマネージャーをしております身元確実です。

現在、二人のM女性とプレイしておりますが、この度更に多くのM女性とプレイしたいと思いい筆を取りました。身元確実な二十〜四十歳位のM女性の方、未婚既婚問いません。秘密厳守でプレイしましょう。ムチ、縄、羞恥責め等が好きな方、返事確実です。



## 緊縛美に魅せられて

東京 栗田龍彦

前略。初めて投稿致します。以前より楽しく拝見いたしております。私も皆様のお仲間に入っていたきたたく投稿いたしました。

私の緊縛写真は美しくをモットウとしていきますので、貴誌の

読者の皆さんにはものたりないかと思いますが、よろしければ掲載して下さい。

奇クで緊縛写真を見て、緊縛美に引かれカメラを握り十年、初めて彼女を縛りファインターを覗いた時の興奮は今だに忘れられません。

自由を奪って美女をカメラで犯す喜びは、SMプレイとは又違った刺激です。恥らいの顔、

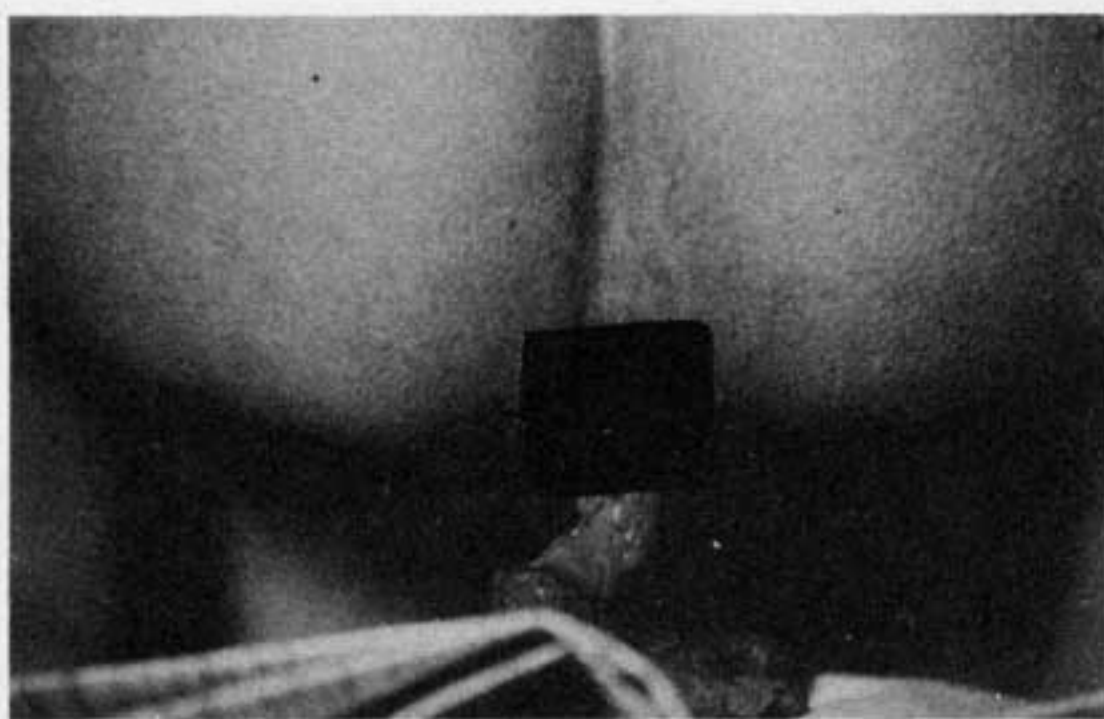


じつと耐える姿の美しさ、これ  
からも私のコレクションを誌上  
に発表致しますのでよろしく。  
(緊縛写真、プレイ写真を写し  
ている方、お手紙下さい。)

### スカトロマニア

大阪 和田信也

スペシャリーS&M13号掲載  
の石堂隆氏、「糞便の魅力に憑



かれて」に感激して拝見いたし  
ました。マニアの一人として、  
楽しませていただきました。

ぜひこれから、スカトロマ  
ニアを喜ばせるような記事を載  
せて下さい。

私もスカトロマニアとして、  
排便時の瞬間をフィルムに写す  
ことを趣味として居ります。同  
好の士の方、御一報下されば幸  
いでございます。

### 臍物趣味!?

東京 島森 拝

拝啓。小生、貴社の本を時々  
買っているものです。趣味で、  
同封のようなイタズラをしてお  
ります。もし、貴社に古いもの  
で、不要になった写真がありま  
したらお譲り下さいませんか。  
色々と遊んでみたいものです。

もし、興味があればお電話下  
さい。

妻を責めて下さい。

横浜 江夏俊一

初めてお便りさせて頂きます。  
私は、某鉄鋼会社に勤める三十  
歳になる男性です。  
今迄に妻とのSMプレイを何  
度も行ないましたが、いつも物







足りません。そのため一度私の妻を提供いたしますので、徹底的に責めていただき参考にしたいと思います。

ただし、プロの方はお断りします。特に、縛りの方法等にくわしい方お便り下さい。

最初の方は電話でお願いします。

交換プレイを：

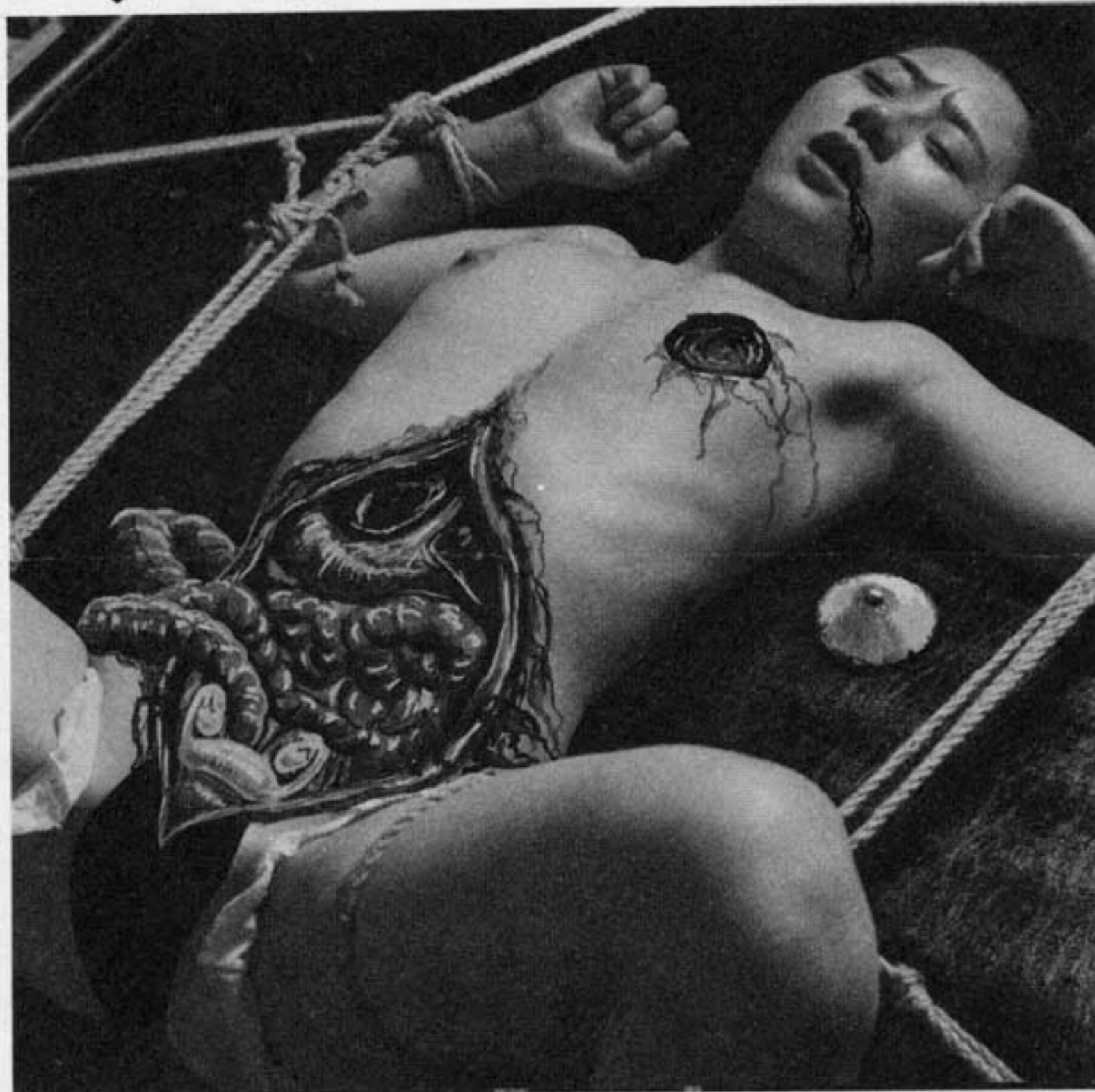
佐野 正

別冊スペシャリーS&M、御送付ありがとうございます。

我々、『奇ク』の時代からのSMファンにとっても、なかなか見ごたえありました。

最近、私も家庭用とSMプレイ用にと、キャンコンカメラと8ミリのポラビジョンを買いました。8ミリのポラビジョンは、ビデオのように直ぐに見れるの

◆イラスト島森氏



で便利です。しかし、フィルムが高いのと、映写するプレイヤーが10kgとテレビ並の重さなので、映写プレイヤーを持った人でないと、お見せ出来ないのが残念です。

十二月中に、渋谷のホテルにて、みさ子とのプレイを予定して居りますので、その時の写真の現像と焼付けをお願い致します。もちろん、スペシャリーS



&M誌上に掲載させていただきたいと思います。

本格的な縛りをやりたいと思っ  
ていますので、良い場面が撮  
れると思います。しかし、奇ク  
の残党モデルの最後の足掻きの  
ような気もしないではありません。  
ん。しかし、中年のSMファン  
だったら、一応名前は知られて  
居り、『奇ク』の最後のカメラ  
ハントを二回に渡り登場しただ  
けに、又自分の飼育した妻だけ  
に、今一度という気持ちもあり  
ます。

## ☆耳よりな話

大阪環状線「桜の宮」駅から、徒歩五分の  
至近距離に誕生したのがホテルエンペラー。  
昨年の十一月四日（火）にオープンしたばか  
りで、新しいのはもちろんだが、各種の趣好  
をふんだんに取り入れ、設備も豪華さに使い  
易さをプラスしたラブルームが全部で二十三  
室も揃っている。その割に料金は安い。  
休憩一時間で二千五百円から五千円迄の六

いずれ、十二月になりました  
ら、プレイフィルムを持参致し  
ますつもりですので、よろしく  
お願い致します。プレイするホ  
テルは、一応道玄坂上のホテル  
ファンタジーを予定しておりま  
す。

プレイについて、こんな事を  
考えています。丁度、同じ日時  
に、ファンタジーで夫婦又は、  
プレイメイトとのプレイをさせ  
る方がいれば、お互い隣りの  
部屋をかりて交換プレイが出来  
たらと思っております。以前、

辻村氏を含め二対一のプレイを  
をやりたいと思い計画したので  
すが、日時や場所の都合で流れ  
てしまいました。いずれ、複数  
でみさ子を責めてみたいと思っ  
て居ります。

仕事をしていない以前のみさ  
子でしたら、今週は辻村さん、  
来週はロマン派生さんといった  
具合で、

「代理妻のお手当をもらってく  
るわね。」

といったのは氣がるに出かけたも  
のでした。

他の男の前で全裸になり縛ら  
れ、責められる事を好んでいた  
ようにも見受けられました。そ  
して帰って来てから、決まって  
私にモーレッツにセックスを求め  
てくるのが常でした。他の男に  
肉体を許した後の私とのセック  
スは、特に素晴らしく、お互いに  
燃えつきまりました。

いずれ、みさ子のフィルムを  
お送り致しますので、良いのが  
あれば発表して下さい。スペシ  
ヤリーS&Mの発展を祈ります。

通りあり、利用する部屋によって使用料が異  
なる。

全室カラーテレビを設置してあるのは珍し  
くないが、四十二インチの大型画面を持つカ  
ラーテレビを備えてあるホテルはそう多くな  
い。その四十二インチカラーテレビは五部屋  
に置かれ、迫力ある映像を二人して楽しむこ  
とができる。

また、全室備えつけのカラーテレビにはビ  
デオ装置がついており、ビデオテープメニ  
ュ

ーから「好み」のテープをリクエストするこ  
とができる。テープメニューには、SMから  
寅さんまで百本程が記されており、フロント  
に注文すれば無料で映像を楽しめるのもエン  
ペラーならではのアイデアといえる。

スペシャルルームは十人程の男女が踊れる  
ディスコルーム（ビデオカメラ、寝室、バス  
ルーム付き）二部屋と、夫婦交換用ルーム、  
SMプレイルームがあり、その何れもが宿泊  
一万五千円、休憩（一時間）五千円、延長料





洋室 S M ルーム

(三十分) 千円で利用できる。  
S M ルームは和室と洋室があり、洋室には革製木馬、革拘束具、各種の鞭、十字架、首枷が置かれてあり、自由に使用する事ができる。天井には吊り責めもできるように太い梁が一本通っていて、縄掛けが容易にできる為の鉄輪も装着されている。

鉄格子の嵌込まれた S M プレイルームの右手奥には洋風便器がむき出しのまま置かれてあるのも羞恥責めを兼ねたプレイの好きなカップルには好適といえる。浣腸プレイを行う

ても、プレイルームにはシャワーも付いており、いちいちトイレへ駆け込む必要が無いのもうれしい。プレイルームでのプレイを終え、ベットへ運び込んでみても、両手を足を繋ぎ止める金具等が無いというのが一般だが、エンペラーの洋風 S M ルームには、しっかりしたスチールパイプがベットの周囲に固定されており、頭上にも「く」の字型になったスチールパイプがあつて、大の字縛り、開脚縛り、四肢開閉等も思いのままにできる。

和風 S M ルームは土蔵、牢内を思わせる厚い板張りの床に、ひとつかみもあるような牢格子が嵌めこまれ、牢内がプレイルームになっている。

牢内の壁は岩を連想させる灰色の凹凸があつて、冷たい感じを与えている。その一角は洞穴状になっていて、女を押し込むには恰好な場所でもある。壁の一方に嵌め込まれているスクリーンに写し出されている S M 写真は和風 S M ルームの雰囲気とそぐわないが、和室の持つ落ち着きに加えたところの暗さが無



し、初心者には評判もいい。

牢内は木製の大きな首枷と、青竹、笞が置かれて奉行所の牢獄を連想させる。

天井には四肢吊りもできるように大い梁が二本渡っていて、洋風 S M ルーム同様、大きな鉄輪が固定されている。

緊縛プレイを中心とした責めの好きな同好の士にとっては、心ゆくまで楽しむことができそうだ。

この S M ルームについては、電話による予約もできる。駐車も十五台が可能で、ホテル従業員と顔を合わす煩わしさもない。

TEL 大阪 06 (358) 0151 (代)



# 収声載文



新年あけましておめでとうございます。  
 本年も昨年に倍する御支援、御愛読の程を  
 よろしくお願い致します。

お目出度い新年に、昨年のお詫びを記すの  
 も如何かと思いますが、読者諸兄に御不快な  
 念を与えてしまったことは事実です。

スペシャリーS&M14号の巻頭カラー頁を  
 斜めに断裁し、お詫び文、説明文ひとつ書か  
 ぬまま、お手許にお届けした事はひとえに編  
 集長の責任。深くお詫びします。

斜めに断裁したのは製本ミスでも何でもな  
 く、掲載使用写真が不相当であった事による  
 ものです。趣味、嗜好の世界に拠所を求める  
 覚醒した人びとの雑誌とはいえ、そうでは無  
 い人も読む以上、いたずらに刺激を与えるよ  
 うな写真であつては却ってマイナスになるも  
 のです。読者諸兄におかれましては、その点

を御賢察の上、御容赦賜り、引き続き御愛読  
 の程を伏してお願い申し上げます。

一連のSMブームも下火になりつつあり、  
 一般SM誌もここへ来て方向転換を図らざる  
 を得なくなつてきているようです。従前に比  
 べ販売実数も減り、一社で同種の本を二冊刊  
 行しているところは一冊に絞る方向で検討さ  
 れ各誌共、編集方針の修整、変更を余儀なく  
 されていると聞いています。SMと名がつけ  
 ば売れる時代ではなくなつてきていると結論  
 付けるのは早計ですが、ポルノまがいのSM  
 や、小説、創作、空想もの中心では、読者に  
 飽きられ、見放されてくるのも仕方ないこと  
 でしょう。

プレイを生活に取り入れ、密やかな楽しみ  
 としている人の多くは寡黙で、その存在をな  
 かなか明かそうとしません。自分の嗜好の世  
 界に共通するSM誌を探し出し、愛読して同  
 好の士としてのつながりを持ち、楽しんでい  
 るのはごく少数で、ほとんどはその一步手前  
 であるようです。好みのSM誌を読んで共通  
 項を自分で見い出そうとしている段階に過ぎ  
 ないといつていいでしょう。

スペシャリーS&Mはそうした人達にとつ

ても心おきなく語り、交歓のできる広場であ  
 りたいと思うのです。この広場に参加するの  
 は自由ですし、資格、制限ありません。た  
 だ、この広場を存続させる為には、愛読者諸  
 兄の誌上参加が無くては成り立ちません。モ  
 ノ言わぬ読者では、その読者であり、愛好家  
 である存在すらも他の愛好家に知られぬまま  
 になつてしまふに過ぎません。年もあらたま  
 りました。心機一転しませんか。 山谷秋人

## 愛の提言誌 スペシャリーS&M 第15号

昭和56年1月15日 発行  
 企画・編集 山谷 秋人  
 発行所 (株)大共社  
 〒160 東京都新宿区西早稲田  
 2-16-9

ご連絡・お問い合わせは、  
 文書の郵送でお願い致します

厳禁  
 転載・劇化及び翻案等  
 全記載記事の無断引用